
声だけを聴いて

ひづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声だけを聴いて

【NZコード】

NZ8906X

【作者名】

ひずる

【あらすじ】

桐野夏花は修学旅行で『女子から』ばかり告白されるイケメン女子。本人はうんざりしているのに、人気は上がるばかり。あまりのアプローチの多さに、ある日夏花は彼氏を作ることを決意する！

第1話（前書き）

覗いていただいてありがとうございます！
更新は遅いですが、楽しんで書いていきたいです

第1話

「す、好きです」

出た、修学旅行お決まりのコト。

みんなと一緒に6泊7日、毎日樂しいイベントに溢れる関西への旅行。

浮かれ氣分になるのも当然なんだけど、旅行が始まつて3日、さすがに8回目の皆ともなると気が滅入つてくれる。

「ずっと桐野さんのこと好きだったの」

そのセリフ、昨日も聞いたとも言えずに躊躇にしつゝ、と頷いた。

毎日毎日な、…。

正直もう勘弁ほしー。

お気持ちは嬉しいのですが、よく考えて！

私は女なの！

なんで修学旅行で女子にばかり8人も告白されなきゃいけないの？

1回目。

「桐野さんって、ほんとに彼氏にしたいなれませんで。

2回目。

「私でよければ、付き合つてくれださー！」

いやいやいや、あなたがどうのこのの問題じやなくてー。

3回目。

「女だつていいの！」

私はよくないっ！

4回目。

「私だけを見ててほしいの」

見れませんから。

5回目。

「す…す…す…すき…すき…なんです」

何回『す』って言いつか数えちゃったよ！

6回目。

「お試しでもいいからーせめて、修学旅行の間だけは私の彼氏になつて？」

試せるかーだから彼氏になれないっ！女ー！

7回目。

「あたし、勇気を出して告白したの…」

あ、ありがとう…まあ、7人目なんだけどね。

そして8回目。

私が「ごめんなさい」と謝ると、彼女は手のひらで顔を覆つて泣き出しちゃった。

ああ、こうなると慰めなきやならない。

もう夜の11時半。

1日大阪を回った私たち5班はくたくたで、呼び出しを食いつた

私以外の班員はさつさと寝てしまった。

私だつて早く寝たいのに。

もう、どうすればいい?
誰でもいいから助けて!!

心の叫びは届かず、結局彼女を慰めてから2時に布団に潜り込む
ことになった。

ああ、ついてない…。

第1話（後書き）

どんな子なんだ桐野！？

詳しく述べは第2話で

第2話

修学旅行の壮絶な日々を思い出しながら、私は放課後に校舎の屋上で紙パックのジューースをちびちび飲んでいた。

10月も半ばを過ぎ、さすがにブラウスにスカートだけじゃ肌寒く感じて軽く手を擦りあわせる。

私の名前は桐野夏花。(きりの なつか) 9月に誕生日を向かえたばかり、17歳になりたての高校2年生！

得意科目は英語と体育、苦手科目は社会。

部活は帰宅部で…自称エースです。

そんな『ぐじぐし』一般的な私の悩み、それは『女子に恐ろしくモテること』。

男子じゃなくて、女子。

…なんで？

人によく聞かれるけど、私が教えてほし〜くらいだから！

好かれるのは嬉しいけど、本気は困る。

「ナツがかっこいいからよ」

いつものように頭を抱えて悩んでいたらしく、状況を察した友人が言った。

「モテる理由、簡単でしょ？身長は175オーバー、スポーツはなんでもこいだし、細身でスタイルischewy。ちょっと切れ長の目に入っとした鼻筋！髪の毛はうらやましいくらいサラッサラだし、なにもしてないくせにちよつと茶髪つぼくつてかっこいいからよ」

それに、と友人は続けた。

「女の子には基本的に優しくて、いわゆる乙女心もわかつてくれて。

そこの辺の男子よつといに決まつてゐる

「あ、ありがとア...」

「ほめてないわよ」

「うう...」

今川春花はふいと横を向いて、紙パックのジュースを一気飲みする。

春花とは中学校からずっと一緒に親友。

中3のときは『春花・夏花コンビ』と呼ばれていた。

女子にばかりモテる私と違つて、春花は男子によくモテる。
色白の肌にぱつちつした目とか、ゆるくバーマのかかつた髪とか、
とにかく至るところが女子感であふれてい、女の私でも惚れそう
なくらい可愛い！

なのに、春花は恐ろしいくらい毒舌。

さらりとひどいことを言つし、特に私の髪の色がつらやましきらし
く、絶対に一言一言皮肉を混ぜてくる。
でも、それも可愛いから許してしまつ。
これがギャップ萌えっていうのかなあ。

「またバカなこと考えてない？」

「な、ないない！」

ならいいけど、と言つて春花は顔を上げ、空を仰いだ。
こんな何気ない仕草も様になる。

「ところで、結局何人から『クられたの？』

「え？」

「修学旅行よ、この前の」

空を仰いだまま訊かれた春花の質問に少しだけたじろいだ。

そういうえば結局何人だっけ。

忘れた訳じゃないけど、怖くて数えてなかつた。

「 8?...いやウソウソ!えーと、10かな?」

「 はあ、あいかわらずモテるのね、女子に」

「 ジょ、女子にいつ言つなーー。」

「 違ひの?」

「 いや…まあほんとですが…」

いいわね、と呟いて春花はぐるりと体を回転させた。

右手には空の紙パック。

もう話すことはないとばかりに、すたすたと校舎の入り口まで歩いて行つた。

「 ま、待つて!」

私もあわてて残りのジュースを飲み干し、後を追つた。

152cmと小柄な春花は1歩も小さく。

すぐに追いつくと、入り口のドアを開けてあげる。

「 それよ、それ。そりこり紳士的なことをするのがモテる原因なの」

そつ言いながらも、春花は当たり前のよう開けられたドアから中に入り、先に階段を降りていぐ。

「 別に女子にだからやつてるわけじゃないよ~昔からよくやつてた

し

「 それがおかしいの。今だから言ひ乍らね、おばさん、ナツの教育間違えたと思う

「ええー?」

きっとダメーさんの影響もあると思つけど、と言つて春花は最後の1段をとばすと、先に3階に降り立つた。

「じゃ、私図書館で勉強していくから」「あ、うん。がんばって」

少し遅れて3階にたどり着いた私は、可愛らしく手を振る春花に向かつて頷く。

お昼の時間は、放課後に屋上行きたい！行きたい！と言つてたぐせに、自分が満足すればすぐに去つていく。

まるで黒猫みたいと思いながら、春花の背中を見送つた。

第2話（後書き）

冬くんってダレ?
次書きますっ!!

春花が図書館に行つたあと、私は一人で家に帰ることにした。放課後の校舎はちょっと寂しい。話し声もどこか遠くに聞こえて、そうではないのに自分が一人ぼっちのよつな気がしてしまつ。こんなときに彼氏がいたら、笑い合つて帰れるのかなあ。

彼氏、つまりは男性。

私の脳にすぐ浮かんだのは、以外にも弟の冬貴。

違うよ！断じてブラコンじゃない！

フユはなんというか…私のタイプじゃないし。

弟の冬貴は私より3つ下の中学2年生。

そしてこれまたモテる、女子に。

我が兄弟の共通点は『女子にモテる』ことだけかもしけない、と思うと、はあとため息が出た。

フユは生まれつき少し体が弱かつた。そのせいもあり、また初めての弟にお姉さん『口口口をくすぐられた私は、彼のためにバリバリ働いた。

母に代わっておむつを替え、重い荷物は持つてあげた。もちろん「おねえちゃん」と呼ばれればすぐに駆けつけて、ショットひゅう熱を出す弟のためにコンビニにアイスを買ひに走つた。

頭はあまりよくないから宿題の手伝いはできなかつたけど（しなくてよかつた）、弟の健気な顔を見ると胸がキュンとした。まあ今考えれば、都合のいいようにパシられてたつてだけなんだよね。

お陰でフユはすっかり甘え上手になつて、今ではそれを男女間の交流に生かしているみたいだ。

フユは割と細身で華奢な男の子に育ち、姉と違つてほんわか性格になつた。女子からは「冬くん」愛称で、かわいい!守つてあげたい!男子像をちやつかりゲットしている。

我が弟ながらうらやましいやつなんです。

世の中は不公平だ。

だつてフユは女の子だとしても絶対モテたし、私だつて男だつたら今絶対彼女がいるはずだ。

なんで女なのに、女子にこんなに人気があるかわからない。ドアを開けたり、荷物を持つたり、全てフユにしてきたことの延長で、つまりみんな妹みたいなものなのに。

うだうだ考えるうちに家に着いてしまつた。

カギを開けて中に入る。父ががんばって建てたマイホームの3階にある部屋に転がるようにして入ると、カバンを放り出して制服のままベットにダイブした。

「彼氏…つくれるかな」

家に一人なのをいいことに、声に出して呴いてみる。どうせ父は会社、母もスーパーに寄り道して帰るだらうし、フユも学校だ。

「彼氏…つくれたらどうなるかな?」

春花から噂で聞いたのだけれど、ついに夏花クラブといつファンクラブができたらしい…。

女子つて怖いと思いながら、枕に顔を埋める。

セーラー服にしわがよりそうだけじ、まあいつか。

「やっぱ、ほしいかも彼氏」

も「これ以上（女子に）告白されるのはヤダ。

もう「これ以上（女子に）モテるのはヤダ。

もう「これ以上私のイケメン度を上げたって、男子にはモテない！

「決めた」

よし、彼氏をつくる。こんな私だつて、努力すればなんとか女子っぽくなるかもしれない。いつものダルダルジャージを封印して、ボーグ・シューなパークーやトレーナーも封印して、たまにはスカートでもはいてみよう。

ガチャリとカギの開く音がして、続いてスーパーの袋の音が聞こえる。母だ。

「ナツー？ いるの？」

「うん、いるー」

顔を上げて答えて、私はまた枕に突っ伏した。なんだか眠い。そういえば、昨日は英語の予習が終わってなくて夜更かししたんだった。頭の中で彼氏ゲットの作戦を立てながらも、少しづつ意識が遠のくのを感じる。

明日春花に訊いてみようかな。きっと何か言つだらうけど。毒舌だけど、あれでも意外に頼りになるんだ、春花は。

そこまで考えて一呼吸すると、私は完全に眠りの中に落ちていった。

第3話（後書き）

読んでくださいありがとうございました！
感謝でいっぱいです。

ついに彼氏をつくることを決めたナツ！
キターー！

毎日更新できるようにがんばります

第4話

授業が早く終わる月曜日の放課後、我が校の自販機で最も高いドリンク（170円！）『いちじバナナみるくオレ』と引き換えに、私は春花が予備校に行くまでの1時間を勝ち取った。

教室で向かい合わせて座りオレを手渡した途端に春花はのどを鳴らして飲み出す。

「ちょ…速…！」

もう少し味わって飲んで！私は90円のジュースで我慢しているんだから！

あまりにすぐ飲み終わってしまったので、慌てて本題を切り出した。

「ねえ、あのや…。か、彼氏をつくるには、どうすればいい？」

すぐにあるくオレを飲むのどの音がピタッと止まる。ストローをくわえたまま上目遣いでこちらを見る姿の春花もかわいい。

「彼氏になるには、どうすればいいかって？」

「違う…。」

「すぐできるわよ彼女。今度誰でもいいからドアを開けてあげて、そのついでに恋の言葉を囁けばいいのよ。すぐできる、それでオーケー

「だから違うってー話聞いてた？彼氏つ・く・るー面白がってるでしょー！」

そんなことないわよ、と言いつつ一矢を以て春花はまたみるくオ

レを飲み出した。

ただし、今度はゆつくつと。

よかつた、話を聞いてくれる気になつたみたい。

「で、本当に彼氏でいいの？」

安心してジュースを飲みかけていた私は、春花の真剣な声にゲホッとむせた。

「いこのつてどうこりとー？」

「そのまんまだけど」

「いいに決まってるじやん！」

もう女子から畠山されるのはお腹いつぱい！

いいのつていうか、むしろ早く彼氏をつくりたいんだって。

「つくりと頷いた私を見て、やっぱりみるくオレを飲みながら春花は微笑んだ。

身近で見ると胸キュンな笑顔だ。

「いいわ、私にできることがあつたら協力する。何だか楽しそうだし、ナツにドアを開けてもらひるのは私だけで十分だしね」

し、師匠！後半何か聞こえたけど氣のせい？

私だけで十分つて言つた？

ま、まあ協力してもらえるならかなり心強いことは確かだし、見逃すか。

「ありがとう！師匠！」

「いいえー。あ、でもどうやって彼氏をつくるのかつてところは自

分で考えてね

「ええ！？」

春花は叫ぶ私を無視して最後のみるくオレを吸い込んだ。こくんと
のどが動いて、170円の高級ジュースがお腹の中に入っていく。

「だつて分かるでしょ。好きな人ができる、口くる、はいカップル
完成！あ、答え言っちゃった」

「いや、まあうんそうだけど……」

それは知ってるんだけど。

問題はその最初の方。

「好きな人つてどうすればできるのかな……」

「はあ？つそ、ナツつて今まで恋愛したことないの？」「
な、ない……」

ええ、信じられないと呴いて固まる春花。

その目の前で何もできない私。

だつて本当だし。

「ナツ……」

「ん？」

「私、今まで散々ナツのことバカにしてきたけど、今ちょっと申し
訳ないって思つてる」

「え？」

さらつと失礼なこと言つたよー。

申し訳ないというか、どちらかといふと哀れみが浮かんだ顔で彼女
は私を見つめる。

「そつか、そうなんだ。ナツいい？」

「は、はいっ！」

「まず、落ち着いて回りを見るのよ。そうすれば女子以外の何かが見えるはず。うちのクラスにだってイケメンがないわけじゃないわ。まずはよく見ること。いい？」

「はいっ！』

本当に理解したのか疑つてゐるらしい春花は、身を乗り出して私の顔を覗き込んだ。

「それから、この人といたら楽しいとか、もつと話したい、一緒に帰りたいと思う人ができたら、私に報告して」

「そ、それが恋なの？」

その質問に、春花はイスに座り直しながら少し悩むと、

「時と場合によるわ」

とじつち付かずな返事をくれた。

時と場合って、どんな時なんだろう？。

「とにかくいい？もう予備校に行かなきゃならないから確認だけするわよ。さつき言つたみたいな人が現れたら？」

「春花に報告します！」

「そう、いい子ね」

まるで生徒と先生みたい。

ガタガタ音をさせて春花がイスから立ち上がる。重そうなカバンにはきっとテキストがいっぱい入っている。

「じゃ、行くね。それから……がんばってね？」

「うん……ありがとう。あ、春花！」

何？と出入口で振り返った彼女に向かって私は右手を差し出した。

「みんなオレの『』捨てとくよ。」

ありがとイケメン彼氏！と笑つて、『』を渡すと春花は軽やかに教室を出て行つた。

第4話（後書き）

読んでくださいありがとうございます！！

意外とピュアなナツ。

それは效してしまつてありそな春花：

よかつたらまた覗いてください

第5話

寒い。ホント寒い。

冷えきつた教室で、私は手に息をハーッと吹きかけた。
11月も少し過ぎた教室にはそろそろ暖房がほしい。

若いから大丈夫だと見栄をはってないで、セーター着てくれればよかつた。

ちらりと前の方の席を確認すると、ちゃんとセーターを着こんだ春花が英語の文法問題に取り組んでいる。

「ナツだいじょぶ？ 私の上着貸すよ？」

腕をさすっていたのに気づいたのか、右隣の斎藤桜が声をかけてくれた。
くるくるに巻かれたセミロングの髪を揺らしながら、じかるを覗いてくる。

その瞳にこもる光に思わずたじろぐ。

何を隠そう、実は彼女には一度告白されたことがあるのだ。

『私、149つて背が小さいから…ずっと背の高い人に憧れてたの。初めは意識なんかしてなかつたし、その身長がつらやましい！ってだけだつたんだけど…』

あの、私あんなに優しくしてもうつたことなくて…ホラ！私が放課後に貧血起こしちゃったとき、荷物持つてお家まで送つてくれたり

…。

そのときからいいなあ、こんな人が彼氏だつたらいいなあつて思つて。

そうしたら気づいたら…ナツのこと好きになつてたの』

そう言われたのが去年の1・2月。
体育館裏に呼び出された上、ものすごく感情を込めて語られて正直
ちょっと困った。

なるべく傷つかないようにして断つたけど、やっぱり根に持つてた(?)
らしい。

「だ、大丈夫だよ。ありがと。お昼になつたらジャージに着替え
るねー」

だいたい、149cmしかない斎藤桜の上着を着れるわけがない。
不可能だ。

それに、ジャージに着替えれば大丈夫。

そう。うちの学校は登校は制服だけど、学校に来てからは自由でジ
ャージに着替えてもいい決まりになつている。

それでもジャージを着ている人はあまりいない。生地が厚くて暖か
いけど、サツマイモみたいな紫に黄色のラインが入つてるのでダ
サい。

寒い日は制服のまま授業を受けるか、いつも開き直つてジャージを
着てぬくぬくするか、いつも心で揺れる。
でもなんだか、今日は異常に寒い。
もしかして風邪？

「ナツ? もしかして風邪? 保健室行く?」

「う、ううん… 大丈夫だから…」

「でも、顔色悪いよ?」

「うう… 結構しつこい…」

「どうした桐野？風邪か？」

「あ、いえ…」

「そりなんです先生！顔まつ青で…」

「あ、斎藤さん…」

先生が教科書を持ったまま振り返って、私の顔をじいつと見つめた。何だか気まずい…。

しばらくしてから先生がうーんと唸つた。

「そり言われれば、顔色悪いなあ」

「え、えーとそりですか？」

えへへと力なく笑う私に、見かねた春花が口を挟んだ。

「大丈夫です先生、ナツはいつもあんな顔ですから」

つておいおい！

全然フォローできていないんですけど…！

「お、そうか」

え、それで納得なんですか先生？

「まあ、一応安静にしておけよ。ジャージの方が暖かいだろ、制服の上からでもいいから着ておきなさい」

「は、はい…」

じゃあ続きやるぞー、と言つ声で授業が再開しホツした。もう若くないのかな？ダサいけど、あとでジャージ着るしかないか。

第5話（後書き）

ここまで読んでくださって嬉しいです！

思つたより長くなりそうなので、続きは明日にします

次話ではついに彼が登場つ！

ああ、早く出したい…。

第6話

長い授業時間をやり過ごせば、お昼休みがやって来る。

大勢の生徒が購買と食堂に向かう中、私は急ぎ足でロッカーに行つた。

うちの学校のロッカーは、狭くなるからといつ理由で自分の教室にない。

ロッカーだけが立ち並ぶロッカールームがあつて、そこに全ての荷物を置けるようになつていて。

ロッカールームが校舎の4階にあるということを除けば、快適なんだけどな。

ロッカーが大きいのは嬉しいけど、4階にあるといちいち行くのがすぐ面倒だ。

でもこのまま寒いのは嫌だし、仕方ない。

私はロッカールームに一番近い階段を上がり、黒塗りの重い扉を開いた。

日当たりの悪い部屋のよつな、ちょっと湿っぽいにおい。

部屋の奥までずらりと並ぶロッカーは、それだけですぐ圧迫感がある。

ガチャ

お田端のロッカーを見つけ、扉を開けた。

えーと、ジャージは…。

あ、あれ?ない?

「あーっ!—」

そうだ！ジャージの上、春花に貸してたんだった！！

一昨日の体育は体育館の中でだったから、寒くなくて半袖で授業を受けたんだつた…。

あの紫ジャージは名前の刺繡がないから、誰に貸しても、借りてもバレない。

そのときたまたまジャージを忘れた春花に「貸して」と言われて…。

すっかり忘れてた…。

がっくりと頑垂れる。

「返すの、次の体育の授業でいいよ」って言つちやつたし、今日絶対春花はジャージを持ってきていないよね。どうしよ？…。

「桐野？」

呼ばれてふと左を見ると、同じクラスの秋津修^{あきつ じゅう}がいた。

「秋津だ。どうしたの？」

「いや、どうしたのはお前の方だ。さっきの叫び声、びっくりして心臓止まるかと思った」

「あ、ごめん」

別にいいんだけど、と黙つて秋津は自分のロッカーを開けた。ジャージをどうしようと考へながら、私は彼をちらりと盗み見る。

背が高い。

175cm以上ある私から見ても、かなり高い。

正確に尋ねたことはないけど、たぶん185cmを越えてるんじゃないかな？

これは春花に聞いたことだけど、秋津も修学旅行のときには10人

以上に「クられたらしい。

あ、もちろん女子からね！」

中学時代は野球をやっていたらしく、どちらかとこつと体は筋肉質なかんじ。

でも嫌な「ゴツヤジやない。学ランがよく似合ひし、調理実習のときのエプロンもまあまあイケた。

勉強するときに黒縁の眼鏡をかけると、ちょっと知的になるのも人気みたい。

「桐野……俺に何かついてる？」

「あ、ついてない！」めん！」

やばい、ついしつかり見てしまった。

私の悪いクセって、きれいな人がいると男女構わず見つかりうことなんだよね。

「あのや」

顔を上げると、秋津と田が合った。
あ、意外とまつげ長いんだ。

「あのや、俺一昨日体育あつたんだよ」

「え、うん、知ってるけど」

同じクラスなんだから、当たり前だよ。
私もあつたよ。

「で、ジャージ着たわけ」
「は、はあ……」

そりゃせつでしょ、体育ですか。

「寒いみたいだから、これ着て
「はい？」

体育がありました。ジャージ着ました。
で、今度は私に着ろと？

明らかに不審な顔をした私を見て、彼は慌てて言い訳をした。

「いや、そのときのままじゃないからーー昨日体育して、持ち帰つ
て洗濯したて！だから、きれいだからこれ着なよ？」
「そ、そう言ってよ！」

びっくりしたじやん！

ちょっと汗かいたのかな？とか思ひちゃつたじやんーー

「あ、『めぐ』『めぐ』

笑いながら、秋津はジャージの上着を差し出した。

「いや、お借りするには…」
「いいよ。お前の刺繡ないから誰のかわからな」と思つし。ま、桐
野なら俺のジャージ着てもバレないかな？
「なつ…！」
「なんてなー冗談！」

豪快に笑つと秋津は私の腕にジャージを押しつけた。

「ホラ、ちゃんと持たないと落ちるぞ」

「ととと…！」

真剣な顔に戻った秋津に促され、思わずジャージをぎゅっと抱えてしまった。

それを見届けて微笑むと彼は、

「返すの、次の体育のときまででいいから。俺帰宅部だし、体育のとき以外は使わないから」

と言い残して、ぐるりと背を向けた。

私が一昨日春花に言ったものと同じセリフを言われた。

何だか変なかんじ。

ギィと音を立ててロッカールームのドアを開けて、大きな背中が出ていこうとする。

お礼、言わなきや。

「あ、秋津！」

廊下への一歩を止めて、秋津が振り返った。

「ありがとう！」

少しだけきょとんとした顔をして、それから彼はとびきりの笑顔になつた。

つられて私も、ちょっとだけ笑う。

「いいよ。斎藤も言つてたけど、やつぱり顔色悪いみたいだから、気になつたんだ」

そう言い残して秋津は出ていった。

なんていい人なんだろ？

もう一度腕の中でぎゅっと抱いたジャージは、せっけんのいいにおいがした。

第6話（後書き）

いつもありがとうございます！

やつと出せた修くん

彼はきっと素敵な大人になると思います（笑）

明日はちょっとと閑話を入れちゃう予定です。

よかつたら、また覗いてください！

闇話 ナシヒコ(前書き)

フロ視点でお送りしますー。

閑話 ナツヒコ

ねえちゃんはいつも僕に甘い。
体が弱いからっていうのもあるけど、なんというか…過保護。
ま、最近はちょっと弱まったけど。

桐野冬貴はそつと笑って、右手に持つアイスクリームと、左手に持つスプーンを見比べた。

それはつい一時間ほど前のこと、学校から帰ってきて急にアイスが食べたくなった。

秋はお腹がすく季節だからね、自然の摂理、仕方ない。
だけど、今帰ってきたとこだし…。

コンビニまでチャリで5分、歩いて10分か。

「よし！」

と呴いて、僕は鞄の中から携帯を取り出した。ピッピッと慣れた操作をして、機械を耳にあてる。

トゥルルルル…トゥルルルル…ガチャ

「はいーフユ何？」

2ホール目で、ねえちゃんこと桐野夏花が電話に出た。
周りがガヤガヤしている。
よかつた、帰宅途中みたい。

「ねえちゃん今帰るとこ?」

「そう。何か用事？」

「アイスクリーム買つてきて！」

「え？」

「ア・イ・ス。帰りにコンビニ寄つて、『COW』のミルク買つてきて。スプーンは家の使うからもらわなくていいよ」

「えーもうコンビニ過ぎちゃったよ？」

「戻つて」

「ええつ！？」

昔はすぐ買いに行つてくれたのに。
やつぱり最近ちょっと冷たい。

「大丈夫、お金はちゃんと払います」

「と、当然つ！今金欠なの！」

なかなか手強い。もう一押しか。

「ねえちゃん」

「ん？」

「ねえ、買つてきて？だめ？僕今日なんだか熱っぽくて、どうして
もアイス食べたいんだけど…」

「むむむ…」

「お願ひします…」

精一杯しおらしい声で言えば、数秒の沈黙のあとわかつた！と大きな声が聞こえた。

「コンビニで『COW』買つてくれればいいんでしょ？わかつたよー¹
行きますー！」

やつた！－

楽しくなつて、そのまま携帯を耳にあてていると遠い会話が聞こえる。

「どうしたの？ 戻るの？」

「そり、フコガアイス買つてきてくれる」

「ああ、冬くんの頼みね

「笑わないでよ、春花！」

「あいかわらず甘いんだから」

そこまでで通話がぷつりと切れた。

思わず笑つてしまつ。

何だかんだ言つても、せっぱりねえちゃんは僕に甘い。

まあ、そこがいいところなんだだけだ－

そして現在。

僕は部屋でベットに腰掛けながら、まつたりとアイスを堪能していた。

ちよつと溶けかけているところも、よく冷えている部分と合わされば、またおいしい。

楽しんでこらえて、部屋の扉が開いた。

「フユ、体調は？」

「大丈夫、ありがと」

よく見ると、夏花も左手にアイスを持っている。

夏花は冬貴の視線に気づいて笑つた。

「私も食べくなつて、買つてきちゃつた

「何味？」

「フコ」と一緒に

その答えに満足して僕は再びスプーンを進める。
やつぱりミルク味で正解。

「それ食べたら寝てなよ?」

それだけ言つと、ねえちゃんはドアを閉めて階段をトントンと降つていった。

やつぱり甘い。やつぱり優しい。

僕らは正反対だと思つ。

性格も、容姿も、利き手も。

でも、やつぱり兄弟だなと感じる。

アイスはミルク味が好きとか、数学が苦手とか、きんぴりがまつのニンジンが嫌いとか。

探せば意外と共通点がある。

アイスを食べ終えて僕は満足げに息を吐いた。優しい優しいおねえちゃんの言いつけ通り、ちゃんと寝よつかな。

ゴリゴリを捨ててベットに潜り込む。

頭まで布団を被つて、アイスを2個買つねえちゃんを想像するとちよつと笑えた。

閑話 ナツヒコ（後書き）

ヒコは意外と腹黒ですね（笑）
でも、根はいい子…なはず…！

明日は本編に戻ります
読んでくださいってありがとうございました！

第7話（前書き）

本編再開です。

あの日秋津にジャージを借りてぬくぬく授業を受けることができたものの、結局私は熱を出して次の日は学校を休んだ。ちょうど休んだ日は金曜日だったから、土日は家で寝たきり状態で過ごした。

風邪なんて久しぶりで心細かつたけど、いつも甘えっぱなしのフコが珍しく看病してくれてちょっと嬉しい。

そして、月曜日。

すっかり元通りに回復した私は、3日間たっぷり睡眠を取ったおかげで授業中に寝ることもなく、昼休みに学食でカレーを食べていた。

「しつかし、病み上がりによくカレーなんてかき込めるわね」「好きだからね！好物に食べる時期は関係ナシ。あ、おはしおはしだよ？」

隣に座っていた女子がおはしを落としたので、拾つて差し出す。

彼女はありがとうございます、と言いながらポツと頬を染めた。肩まで切り揃えた髪は毛先の方で内側にくるんとしている。まつげも長いし、肌は白いのにほっぺたが赤いからまるで林檎みたい。ああ……かわいい……つ。

「ちょっと、見すぎ」

向かいに座っている春花が、雑炊風『はんが人気の『中華セット』を食べながら声をかけた。
あ、またやつてしまつた！

「すみません！」

「あ、いえ…そんな…」

まだ見たいと駄々をこねる本能を押さえつけ、無理矢理カレーに視線を戻す。

よし、大丈夫！

「元気になつたのはいいことだとして、一つ訊きたいことがあるんだけど」

「ふん、なんでもきひて」

「食べてから言え」

「ふあい」

スプーンいっぴいにすくつたカレーを頬張つて、もぐもぐと咀嚼する。

ああ、幸せ！

土田はおかゆかうどんしか食べられなくて辛かつた。土曜日の桐野家の晩ごはんは好物のオムライスだったのに。

急に落ち込んでカレーを食べ始めた私に、怪訝な顔をした春花が問い合わせた。

「カレーまずいの？」

「いや、おいしいよ？」

「あ、そつ。ならいいけど。ねえナツ」

「なに？」

「訊こうと思つてたんだけど、この前着てたジャージの上着つて誰かに借りたの？ 確か私まだ返してないはずだけど」

「あ、秋津に借りた！」

秋津？と繰り返す春花に向かって軽く頷いて、そのままスプーンを動かしながらちょっと焦った。

風邪回復で舞い上がってたけど、そういうえばジャージ返さなきや。火曜日の体育に秋津だけジャージの上着なしは避けないと…。もう洗濯はあるから返すだけだし。

「そつか、秋津に借りたのね。びっくりしたー！私記憶がないうちに戻してたのかと思った」

「ごめん」

「しかも結構ピッタリサイズだったから

「え…」

カレーだけを見ていた私は、スプーンを止めて春花の顔を仰ぎ見る。そんな私の顔を見て彼女は楽しそうに笑った。

「なんてね、うそよ」

「ちょっと！それ秋津にもやられたから！
さすがに男物の」は大きいです！

「ナツは反応が面白いから、ついついからかいたくなるの」「えーやめてよ…」

せめて素直だとか言つて！

「あ、あの…」

2人で話していると右隣から声がかかった。
2人してそちらを見ると、目に飛び込んだのはさつきのかわいい子！
やつぱり林檎のようなほっぺた。

だらだらと話す私たちより先に食べ終わつたらじく、手には空のお皿が乗つたトレーを持っていた。

「あの、さつあは…」

5秒ほどの沈黙。そして息を吸う。

「おはしありがとうございました！あのっ、失礼ですが桐野さんですか？」

「あ、はい…」

「私、1年の橋本雪枝^{はしもと ゆきえ}といいます！去年の文化祭で桐野さんが王子をされていた劇見ました！…あの、そのとき私この高校に入りつつて決意したんです！」

そこまで一息で言つと、雪枝は肩でふうと息をついて、小さく「かつこよかつたあ」と呟いた。

あ、あの劇を見たんだ…。

お姫様がお城のパーティーの帰りにガラスの靴を忘れる某ロマンス物語。

去年の文化祭、劇をやると決めたうちのクラスは、その物語の現代版をやるついでということになつた。私は運悪くその王子役になってしまったのだ。

理由は簡単。

『男子と手を握り合つなら、ナツと握り合つた方がいい…!』

こんなクレームが飛び交つて初期王子役の男子は降板、代わつて私が王子することになつてしまつた。

まあ、劇 자체はうまくいったからいいんだけど。

ふと雪枝の方を見上げると、瞳がキラキラしている。うーん、かわいい、確かにかわいいんだけど……。その憧れはやめほしい。

「あ、ありがとうございます。きょ、去年のクラスのみんなも喜ぶよ」

「えつ、いやそんな、あつすみません! 私つたら憧れの桐野さんと会えてつい……失礼します!」

とりあえず微笑んでお礼を言つと、彼女は林檎ほっぺをさらりに真っ赤にして去つていつてしまつた。

本当にあつという間だ。何がしたかつたんだろう。

「すごいわね、彼女… 雪枝ちゃんだけ?」

「熱烈アプローチだな、桐野?」

「へ?」

突然入ってきた声に、なんともすつとんきょくな声を上げて後ろを見た。

「あ、秋津!」

「よ。風邪治つた?」

「は、はい。お陰さまで…。あつ、ジャージ明日返すね!」

「ああ」

秋津も学食食べに来てたのかな?
手にはトレーを持っている。

「カレー」

「ん?」

「早く食べないと授業間に合わなこぞ」

「あ、うんー」

時計を見る。え、もう一、三時！？

あと一〇分しかない！！

急いで残りのカレーを食べるため、置いていたスプーンを持った。

「それにしてもモテんだな、桐野」

「むあー！？」

それはそれは楽しそうに、秋津が笑った。

くそ、絶対こいつ人の不幸をツマリにするタイプだー！

「ま、わからなくもないけど」

「え？」

「じゃあな、お先」

そう言つて秋津は返却口まで歩いていく。

なんなの今日…。私、「は？」とか「え？」しか言つてない気がする。

「うわー！」

やつと食べ終わると、向かいで座つたままの春花のトレーも手に取る。

「持つてこくな？ちよ、ちよつと、向一ヤーヤしてくるの？」

「いや、別に？モテるなあと想つて？」

春花は微笑みながら立ち上がり、私の後ろを付いてきた。

だからなんなの！女子にモテたって嬉しいんだけどねーーー

私は膨れながら返却口に向かった。

第7話（後書き）

毎日読んでくださる方も。そうでない方もありがとうございます！いつもよりちょっとと長くなりましたが、秋津くんを出させて楽しいです！

明田も彼は登場します。どんどん彼の本性が明らかになつていいく予定です！

どうなるのでしょうか…！？

「ジャージありがとうございました！」

火曜日の朝、教室に入つて斜め前の席に秋津を見つけた私は、昨日家できれいに置んだジャージを差し出した。

「あ、おはよう。ん？これ何？」

「おはよう。あ、これね、昨日お母さんが焼いたクッキー。甘いものの大丈夫？普通のやつとチョコチップ入りとあるんだけど」

ジャージを受け取りながら、秋津はオレンジの袋でかわいくラッピングされたクッキーをつまみ上げる。

「大丈夫！てか、お母さんが焼いたんだな、桐野じゃなくて」

「うつ…私おかしは食べる専門で」

確かにバレンタインいっぱいもらつてるもんな、と彼に笑われて、苦い顔になる。

だつて、おかし作りなんて繊細なこと性に合わない…！

昔は騙されてたけど、材料入れて混ぜるだけとか嘘だからね！

「ありがとうございます。体育のあとお腹空くから食べるよ」「うん、うちのお母さんのクッキー絶品だから、期待して！」

「おうー。」

そのとき、教室のドアから「秋津ー！」と呼ぶ声が聞こえた。

そちらを見ると、隣のクラスの男子2人が手を降つている。茶色に染めた髪を揺らしながら、彼らはドアの方に軽く体重を預けて笑つ

ていた。

「秋津、マジで頼む！数学ピンチ！！」

「俺も！ていうか、数学だけじゃなく英語もちよーピンチ…」

「わ、すりい！俺も俺も！分詞教えて！」

「わかつたわかつた！ちょっと待つてろって…」「

笑っているけど、どちらも勉強が得意ではないみたい。そういうや私も今日の5限のリーディングの予習、まだ終わってなかつたつけ。ジャージを畳んだあとでやりだしたのはいいけど、あまりに眠くなつて途中で寝たんだつた…。

「秋津、私もリーディングの予習やるねー！」

慌ててかばんからテキストとノートを引っ張り出す。席についてパラツヒノートをめぐると、あちこちに不審な線がある。

げ…。

寝ぼけながらやつてたからだ。

「うわっ、すごーいノート！」

「あ、秋津っ！あー見ないで！」

とつさに隠したけど、時すでに遅し。

私のノートを覗きこんでいた秋津は、くすくす笑いながら「がんばれ」と言つてくれた。

「秋津早くー！」

「はいはい。じゃな、桐野」

「うん」

そりと、やるか。リーディングの先生、いきなり当てるから怖いんだよね。

シャーペンを持ち直した私は、

「桐野！」

とこう声に顔を上げた。

「リーディングの予習、あとで見せて？」

「え、やってないの？」

「実はね」

意外だ。成績優秀な秋津が予習を怠るなんて珍しい。ていうか、それで焦らずに友だちに勉強を教えに行ける余裕がうらやましい。

「だからちゃんと予習やつておいて」「

「はあ？」

何だそれ！利用されてるじやん私！

笑顔で去っていく秋津を一睨みしてテキストに向き合つ。

わざと間違えようかな。

うーん。無理だ、それは無理。

絶対指摘されて終わる。

じゃあ、このままやらないのである？

だめ、私の命に関わる。

だいたい、あの2人が来なければもつと話していられたのに。

あ、でもそしたら予習忘れに気がつかなかつたかもしれないし、なん
て微妙なボーダーライン。

……。

あ……？

『話していられたのに』？

……。

私、もつと話したかつた？

もしかして、秋津と話していたかつたの？

えーっ！春花！春花に報告しなきや！

結局予習を投げ出して、私は春花のところに走つた。

第8話（後書き）

いつもありがとうございます！

そろそろ動いてきました！

秋津は頭がいいです、うらやましい。

心臓がびっくりしてる。

そう、きっとびっくりしてるだけ。

これは恋じゃない、きっと。

恋じゃない、まだ！！

「ふうん、そんなことがね」

お昼休み、春花と私はお弁当を持って屋上に行つた。今日は暖かいから外の方が気持ちいい。屋上は少し風が強いけど人が少なくて大きい声を出しても大丈夫なところがポイントだ。

「で、ナツはその2人が来なければ、もつと話していられるって思つたんだね？」

春花の問いにこくりと頷く。

「つまりは、秋津ともつと話しかつたつてことなのね？」

こくり。

「残念ながらナツ、それはまだ恋じゃないわ」

私は下げていた頭を急に上げて、本当ー？と叫ぶ。それを見て春花はにっこりと笑つた。

「そりゃ。あんな2人を選ぶなんて！私とだけ話していればいいのにーつて思うくらいにならないと」

「いや、ちょっとそこまではなれないかと…」

「そう思えるのが恋なのよ！」

今日の春花はなぜか話に力が入っている。ずっと話しているせいで、お弁当はまだ半分も減っていない。私が食べるぞ。

「春花、お弁当食べないの？」

「あ、ああ忘れてたわ。食べる」

揃つてもぐもぐと食べだし、屋上は暫しの沈黙に包まれた。春花はパンを、私はお弁当を無心に食べる。

暫くして、『じゅわっと春花が声を上げた。は、早い！

「ふう、食べたわー。それにしても、意外。ナツは秋津か「秋津がどうかした？」

「ううん、なかなかいいチヨイスだと思つてね。優良物件見つけたわねー」

「ぶ、物件つて…」

だつて、と春花は続ける。

「頭良し、顔良し、背良し。おまけに優しいと評判の秋津修よ?」

そうか。確かに秋津は女子からも男子からも人気が高いもんね。今日クラスに来た男子のことを考えながら、卵焼きを口に放り込んだ。

それにも今日もまた卵焼きがおいしい！
このなんとも言えない焼き加減が絶妙！！

「何ニヤニヤしてるの？そんなにおいしい？それ、確か冬くんが作

つてゐるんだっけ」

「そう！フコつたらす”ご”い料理上手で！」

フコは手先が器用だ。

もともと本を読むのが好きだったが、いつの間にか料理本にも手を出していたらしく、気づいたらいろいろな料理をマスターしていた。今では調子がよければ、早起きして家族みんなのお弁当を作ってくれる。

味ももちろんだけど、何より卵焼き一つでもちゃんと凝つているところが嬉しい！

今日は私の好きな力ー力ママが入つていて、ちょっとテンションが上がつた。

「いいわねー！いただきつ！」

「あ、卵焼き！返して！」

お弁当を覗きこんでいた春花が、急に卵焼きを誘拐した。そのまま彼はひょいと春花の口の中に消える。

「あー……。たまごやき…」

「大丈夫、また作ってくれるわよ」

おいしいわね、と言いながら春花が私の肩を数回叩いた。落ち込ませた本人に慰められても嬉しくないんですけど！もういいよっ！春花はニヤツと笑つて手を離した。
絶対わざとだ！

「まあまあ。で、今日は何話してたの？」

「秋津と？えーと、ジャージとクッキーの話？」

「クッキー？」

「そりゃ。お母さんが焼いた。春花もほしい？」

「頂戴」

仕方ないなあ。我ながら少しそうとしたままお弁当を屋上コンクリートの上に置いた。

田差しがぽかぽかしてこるせいで、コンクリートも暖かい。

「ハイ」と突き出した。春花の方は靴の中をガサガサ探り、レンジの袋を引っこ張り出すと

「ありがとう…おこしあう…」
「でしょ！」

なんだか得意気になつた。
私が焼いたわけでもないけど、おいしそうと言われて嬉しい。

「お家でいただくなつたよ。それでひまつぶつしてゐること」「はーい! そして、」

卵焼き1つ取られたけど、おいしかった！

そんなことを考えながら機嫌よくお箸をしおつ。

「それで、終わったの？」

春花が訊いてきた。

え、
何の話？

「リーディングの予習」

リーディングの~~知識~~。

あ… そう…えは…予羅… あは…。

「！」めん先に教室戻る…予羅…。

もひこ…れは泣くしかない。

だつて半分までしかできてないよ！

マッハで片付けをして、階段を駆け降りる夏花の騒音を聞きながら、

「忙しいやつ」

残された春花は、クッキー袋を見てミルクティーを飲みながら、1人で笑った。

第9話（後書き）

ふう、ギリギリ投稿できました！

第10話

わいわいとクラス全体が騒がしい。

休み時間なんだから、当然かな？

私はジャージ姿のみんなを眺めて、ふうとため息をついた。

あれから1週間。

秋津に話しかけたいけど、勇気が出ない！

いや、やろうと思えばできるんだけど…正確には会話が続かない。なんで！？

そうやっておろおろしているうちに、また火曜日になってしまった。いた。

ちなみに先週は、結局リーディングの予習が間に合わなくて先生から怒られた。

秋津は「と、私と同じく予習を忘れてきたにも関わらず、当然それでも涼しい顔で答えていた。

くそー、頭のいい人はこれだから…！

何度も手を挙げて「秋津もやつてません！」と言おうと思つたか…！

まあ、そこは我慢しましたよ、ええ。

今週はしっかりやつてきたからね！

ちなみに今は体育の前、着替えが終わつた休み時間。場所は天気が

雨のため体育館。

今日は体育の先生が倒れた（…）ので、自習になつた。体育祭の準備での過労が原因らしい。

大丈夫かな…。

とこりわけで、ラッキーハッピー自習…と思つたのも束の間、なん

と男女混合ドッジボール大会をやることになった。
体育の先生が休みだと聞いた担任の森川先生が、

「たまにはドッジボールでもするのがいいんじゃない？私も昔はよくやったわ～！ね？体育の時間なんだし、運動しましょ」

と、あまりにもノリノリで言つて、断りきれず、やることになってしまったのだ。

森川先生恐るべし！たぶんこの学校で一番空氣が読めない先生だと思つ。

あーあ、本当は春花と筆談しながら宿題でもやるはずだったのに…。

と言いつつ、いざ始まつたら結構本氣でやつてこる。
ルールは簡単。

クラスを4チームに分けたトーナメント制。
1試合15分で、終了の時点で内野に多く人が残っているチームの勝ちになる。

ああ、ドッジボールなんて久しぶりすぎ〜。

意外と楽しいかも！なんかいつ、ガチでぶつかり合つかんじがたまらない！！

「さやあっ！当たるとこだつた～」
「もう一、男子もつと優しく投げて！」
「ナツこいつらのチームにほしかったんだけどー！」

相手側のチームからヤジが飛ぶ。

そりや、男子が本気で投げたボールに当たつたら痛いよね。でも、私はチームの女子をボールから守つてる訳じゃないんだよ？

ボールをキャッチしたいから前に「行くの！」
つまりは、たくさん投げたいわけ。

ちなみに一緒にチームの春花に「私の後ろに隠れていなよ」なんてセリフ吐いてないから…！

半ばあきれながらボールを投げようとした、まさにそのとき。

「ナツ危ない！！」

「ボール！当たる！」

鋭い声。

私は自分が持っていたボールを落として身を屈め、とっさに手で頭を覆った。

バシッ！！！

痛ッ！！

…って声を出そうとした。出す準備をしてた。
でも、おかしい。全然痛くない。

沈黙の中、ゆっくり体を上げる。

手を頭から外すと、知っている大きな背中。
これは秋津の背中だ。助けてくれたんだ…。

「い

「い？

「いってえーーー！誰だよこれ投げたのーーー？」

秋津がボールを放り投げて腕をさする。
そりや痛いよ、だつてすごい音がした。

「あ、オレ投げました。滝本です！」

「お前か滝本！もうちょっと優しく投げるよな！俺でも痛いわ！」

「悪い悪い。いやー、桐野に当たらなくてよかつたわ」

「そうだ桐野！けがは？」

秋津が振り返る。紫のダサダサジャージなのに、なんかかっこいい。

「けがは…ない…」

だつて秋津が守ってくれたから。
隣のコートから駆けてくれたんでしょう？
だつて、チーム違うもん。

「そ、つか…よかつた…」

ねえ、そんな顔しないでよ…。
その笑顔、反則だよ…。

「な、桐野やつぱどこか打つた？」

「え？ 大丈夫だよ？」

「だつて」

「な、何？」

「だつて、お前泣いて…」

「え？」

慌てて手で頬を触る。

温かい何かがつづつと流れ落ちた。

「あ、涙…」

「なあ、大丈夫か？保健室行く？」

「大丈夫！その…痛いとかじゃなくて…なんかびっくりして…」

そうだよ、けがなんかしてない。

顔を上げると秋津の心配そうな顔が見える。

それが嬉しくて、また涙が出た。

ほらやつぱり。

もう…ダメだ。もう限界。

そうなんだ、私。

…好き。

私、秋津が好きです。

秋津のことが大好き。

今涙が出るくらい、秋津が好き。

実は分かつてたよ。

たぶんこれは恋なんだってこと。

先週春花には違うって言われたけど。そのときは違うのかつて思つたけど。

秋津と話したい。

もつともつと彼のことが知りたい、私のことも知つてほしい。

桐野じやなくて名前で呼んでほしい。

それから、今みたいに私だけに笑いかけてほしい。

ねえ春花、これって恋だよね？

涙を拭う。

さつきから秋津が何度も「大丈夫か?」と訊いてくるから、いい加減泣き止まないと。

それから、提案通り保健室に行こう。

冷やさないとまぶたが腫れちゃいそう。

待つて秋津。

そのうち、捕まえに行っちゃうから。

他の人に渡したくない。

ほんとは今だつて彼の側を離れて保健室に行きたくない。

でも、我慢。今日はまだ我慢。

ねえ秋津、と私は心の中で問いかける。
あなたのことが好きなの。
だからお願い。

もつよつとだけ、保健室に行く前に笑顔を見ててもいい、かな?

第10話（後書き）

いつもありがとうございます！

ついにナツの心に進展です。
やっと自覚。

これからは…捕獲？？

閑話 春花の微笑み（前書き）

春花曰線です！

閑話 春花の微笑み

私の名前は今川春花。
実は、彼氏がいます。

あ、違つた。訂正。

彼氏のような女友達がいます。

ドアを開けてくれて、『ミミは捨ってくれるし、ピンチのときは助けに来てくれる。

まるで彼氏。

いや、えっと違うよ？

ナツに「クツつてくる女子とは違う。

「好き、付き合つて……」つていう感情じゃない。

でも、ナツはそこらへんの男子より乙女心をわかつてくれるから。疲れたときは一緒に甘いもの食べに行けるし。

そんな私のここ最近の楽しみは、ナツを観察すること。

思つてていることが顔と行動に出すぎて、見てて本当に飽きない！わかりやすい！

そんなナツに、好きな人ができるらしい。
これまたわかりやすすぎる。

話したくて、でも話せなくて。

「おはよう」ひとつ言つても緊張して、授業中は暇さえあれば彼を見つめてる。

もどかしくてたまらないけど、あえて口には出さない。前は協力す

るって言つたけど、今はする氣もなかつたり。
だつて自力で捕獲しなきや！

そこまでの甘い道のりも恋なんだから！

ちなみに、相手の人は同じクラスの秋津。

もしも変なやつだつたらナツのために一発殴つてやるつかと思つた
けど、秋津なら…「うーん、許してやるか。

背も高いし、頭もいいし、何よりナツと雰囲気が合つてるから。
実はあいつナツのことからかつて遊んでるから、そこだけ減点。
それは私の特権だつたのに。

と…まあ、始めは面白がつてただけだつたけど、今は親のような心
で娘の成長を楽しんでいる。

ああ、女子に「クられればつかりだつたナツも、やつといじまで來
たのね…。

笑みがこぼれそう。

だけど、ナツが秋津に取られるのも、ちょっと悲しい。お昼と一緒に
にお弁当食べれなくなるかも。そう考えると、なんだか悔しくなつ
た。

ぐしゃぐしゃとメモを丸めて、授業中にうつらうつらし始めた秋津
の頭に向けて投げた。

「あたつ」

見事命中！

秋津はキヨロキヨロして回りを見渡す。
もちろん目なんか合わせてやらない。
彼は首をかしげてから前を向き直した。

これくらい、させなさいよ。
私のナツを取ったんだから。

私は微笑む。
確かに寂しいけど、ちょっと楽しいから。

閑話 春花の微笑み（後書き）

いつもありがとうございます。

前回の話で一区切りついたので、今日は閑話です

春花は敵に回すと怖そり…。

明日からはまたナツが頑張ります！

これから、毎日の更新に間に合わないことが増えるかもしれないのですが、よかつたらまた覗いてください！

それは唐突だった。

「覚えてますか？」この前お皿のときにおはしを拾つてもらつた橋本雪枝です」

待つて待つて…」の状況は、なに？

夕焼けが眩しい中、目の前にいる美少女。戸惑う私を気にせず雪枝はことを進める。

「あの、突然なんですけど」

嫌な予感。逃げ出したい、助けてほしい。でも放課後のうちの教室は誰も残つていなくて（誰もいない時間に呼び出されたから当然なんだけど）、どうしようもなかつた。

「私、ずっと…」

もう何度も聞いたことがあるけど、言つたことのない言葉。そういう言われるのは嬉しいけど、なぜ私なの？私はそれを望めない。

「好きです！」

出た、スキテス。

甘酸っぱくて優しくて勇気のこもつた言葉。でも、今は恐怖の言葉にしか聞こえない。もう嫌なの。その気持ちは私には重すぎるのである。

胃の辺りがきゅうりゅうと痛くなつた。

心臓の音がドクドクとこだまして、汗が出てくる。暑いはずなのに体はすぐに冷えて。でも、言わなきゃ。

「う、ごめんね…」

声を絞り出す。

あなたと同じ気持ちになることはできない。
お願いだから分かって！

あなたは女の子！
私も女子だからね！

そんな悲しそうな瞳をしないでほしい。
いや、させたのは私か…。でも、そうするしかないよね？今でも、
女の子に優しくしたり、世話を焼いたりすることがこんな形に繋が
るなんて不思議で仕方ない。

私よりもすてきな人なんて世の中にたくさんいるはずなのに…
例えば秋津とか。

そうか秋津。

ねえあなたならどうする？

逃げ出せない教室でどうすればいいのかな？

「桐野…帰るぞ」

あ、そつか、帰ればいいんだ。

つてできないでしょ！！

今置いて帰るとか、非道じやない？

「…桐野?…きり…いや…ナツ…!」

「え?」

秋津の声がする。本物?

後ろを見ると、本物の秋津が私を見下ろしている。少し苛立つた顔だけど、それすらかっこいいと思えてしまう私つて馬鹿かな?

「帰るぞ」

「え、えつ?」

ちょ、ちょつと!

いつどうやつて入つてきたの?

振り返ると秋津の体越しに空いた教室のドアが見えた。確かにここはうちのクラスだから、入つてもおかしくはない。

でも、このタイミングって…!

「待つて」

さつとは少し違う、低く怒ったような声が耳に入つて、再び雪枝の方に体を向ける。

彼女はキッと秋津を一睨みして、

「桐野先輩、待つてください!誰ですかこの人…。もしかして…付き合つて」

とんでもない」とを言い出した。

「え、この人は同じクラスの秋津で。あ!別にそういうんじゃない…」

冷や汗が流れる。

本人目の前で何を言うのかこの子は！？
いや実はそなりたいなって思つてて、なんて言えるわけがない！

「そうだよ」

慌てて言い訳をする私を制して、秋津はニヤリと笑った。意地悪な笑みを浮かべていろ。

「桐野、いやナツとは、そーゆー関係なわけ。邪魔しないでもうえ
る？俺ら今から一緒に帰るから。じゃ、行くぞ」

「ちよっと、ええーー？」

「こっちもこっちだ！！

涼しい顔ですごいこと言いやがつて！

心臓爆発しちゃう…。

秋津はまだおひおひする私の手首を掴み、ついでとばかりに私の荷物を持ち上げた。

そのまま弓を引いて入り口へ向かつ。

「先輩！」

「橋本雪枝さん、『』めんねーま、また今度会おうねー」

雪枝がうつすらと涙を浮かべて私を見た。

頬は林檎のように赤く染まっている。

そんな彼女を断ち切る様に、廊下に連れ出された私の目の前でドアがバタンと閉まった。

ああ、ひどい振り方をしてしまった。

申し訳ないな。

でも、連れ出してもらえてよかつた。
本当に帰れないかと思つたよ…。
どうしてわかつたんだろう?
今日はもう帰つたんじゃなかつたの?
忘れ物取りにきた?

あいかわらず手首を掴んだまま、私の顔を見さえせず歩く秋津と歩
きながら、私は一人考え込んだ。

その大きい背中に安心しながら。

第1-1話（後書き）

毎日ありがと「ひ」やっています！

ナツがちょっと病んできました（汗）
大丈夫かなあ…。

明日はつづきからです

第1-2話

廊下に響く、2人分の足音。

手首を掴んでいたはずの秋津の右手が、いつの間にか私の左手を握つていて、焦つた。

本当に一緒に帰る気なのかな？

秋津も高校の近くに住んでるから、確かに方向は同じだけど。

それとも、突然振り返つて「なーんてな、冗談だよ」って笑うバターン？

放課後といつても、全く生徒がいない訳じやない。むしろ、部活組はグラウンドや体育館で活動真っ最中だし、図書室だってまだ開いている。誰かに見られる可能性もあるのに。

秋津は何を考えているんだね？

手を握られたままじや、階段も降りにくく。

そう、さつきだつて。

どうしてあんなことをしたの？

「秋津」

私の声聞いて秋津が突然立ち止まる。

「わつ」

対応できずに私は彼の背中にぶつかった。

「「」「めん……」

慌てて謝るけど、秋津は黙つたまま。
何か、怒つてる?

「あ…きつ?」

「ああ、もう嫌だ…」

「えつ?」

嫌?またなんか変なことしたかな?

いや、別にそんなにショッちゅう怒らせたりしてないんだけど…

「なあ、ナツ」

名前を呼ばれる。

いつの間にか、桐野じゃなくなつてゐ…。

ふいに心臓が跳ねた。顔がかあつと熱くなつて、火照つてくれる。

「いつも、あんなかんじなのか?」

「あんな、かんじつて…?」

「さつき…「クられたんだろ?あの橋本雪枝つてやつに」

「な、何で橋本さんの名前知つてるの?」

秋津が前を向いたまま笑つた。

ツツ「むとじろはそこかよ、と呴く。

「橋本雪枝は中学の先輩の妹でさ、何度か見たことあつたから。去年も文化祭くるつて先輩から聞いてたし」

去年の文化祭。あの劇か…。

チクリと胸が痛くなる。

「いつも…いつもああやつて女子から『クられてるの、か?』

秋津の言葉に私は頷いた。

「やつ、かな。あ、場所はいつも教室とは限らないけどね」

明るく笑う。

そうでもしないと、なんだか泣いてしまって。

「嬉しい? そうこうときつて」

「うーん、確かに慕われてるつてことはマイナスな感情じゃないから、嫌ではないよ。嫌ではないけど…他に、私以外に他にいっぱいいるのになあって思ひ」

「そつか」

そう言って、

「くくつ…」

秋津が笑い出した。

なんでなんで?

もう今日の秋津おかしいんですけど…

でも、明らかに彼がまとう雰囲気がさつきより優しくなって、安心した。

「そうだ、さつき俺忘れ物取りに来たんだ。結局、取りに出てきちゃつたけど」

「あ、やつぱり。…『めん』

「取らずに、って言つただろ。取れなかつた訳じゃないから

…うさ。じつこいつ今まで、いちいち優しいんだよね、秋津って。

「忘れ物いいの？」

「まあ、筆記用具だから。家にもあるし」

「なるほど」

ふいに秋津が手を離した。同時にそつと流れるような動作で一いちらを向いて、私の前にしゃがむ。

え？ しゃがむの？

いくら背の高い秋津でも、しゃがめば小さくなるに決まってる。私もしゃがんだ方がいいのかな。だつてこれじゃ、必然的に私が秋津を見下ろす形になってる。

いやでも、うーん。2人そろつて廊下の真ん中でしゃがんでおしゃべりつて…。しかもここ一年の教室の前だし。それに、秋津を見下ろす機会なんてそうそうないからなあ。あ、これってちょっとした優越感？

「今、何か失礼なこと考えてる気がするんですけど？」

「いいい、いや…考えてないっす！」

「ふうん？」

「ほ、本当だつてば…」

「まあ信じてあげましょう」

しゃがんでたつて、上から目線だし。

秋津も違和感を感じてからか立ち上がる。

あ、これこれ。こっちの方がしつくづくる。

「そうだ」

「ん？」

「ナツ、さつき連れ出しちゃうめん」

「え？ええ、いいよそんなのー。」

突然真面目なこと言つから、びっくりして声が裏返つかけたじゃん！

いいのに、そんなこと。むしろ…

「連れ出してくれてありがとう。ちょっと困ってたから。誰もいなかつたし、秋津が来てくれて助かりました」

ついでとばかりに頭を下げる。

だって、感謝したのは本当だから。

そのまま静止していると、いきなり秋津が私の頭を撫でた。2回しゃくしゃと撫でて、すぐに手を引っ込める。

何これ…！？

しかも…くつ、今「もひもひ」と言つてになつた…。やめろ自分…！

「じゃあ、結果オーライってことで帰るか」

頭を上げる。

私の気持ちも知らないで、秋津は楽しそうに笑つた。ドキドキすることばっかりしゃがつてー私はまださつきのことでも話したいことがあるんですけどー！

「ねえ、秋津。さつき橋本さんに言つたことって…」

「なあ、帰りに本屋寄つてかない？漫画の新刊、今日発売日」

「え、もしかして『トウペース』？」

「そう」

フコに買つてきてつて頼まれたやつだ！
戻れるとこがだった、危ない！

「寄るー。」

「はー、じゃあレッシィゴーー！」

わっさの質問をまんまとはぐらかされたことに気づいたのは、家に

帰つてフコに漫画を渡した後だった。

第1-2話（後書き）

いつもありがとうございます！

毎回字数がまちまちですみません…。

この焦れったい感じはまだ続きます…。
どうかもう少しお付き合ください。

しかし、『トウペース』って…。

もつと他の題名はなかったのか私…。

ま、まあ…近いうちに短編を載せるつもりなので、よければこちら
も覗いてください

第1-3話

午前8時、いつもの様に教室のドアを開けると、本を読んでいる春花と田が合った。

「おはよー、ナツ」

「おはよう!」

「今日早いのね」

「うん、痛ッ!…」

歩きながら挨拶をしてイスの背もたれに手をかけたとき、指先にチクリと痛みが走った。

なに…?これは画ビヨウ??

見ると、背もたれのちょうど真ん中にセロハンテープで画ビヨウが固定してある。

まるで怪我させるために貼つたみたい。

昨日まではなかったのに…。

「ナツ、どうしたの?」

「なんか、イスの背もたれのところに画ビヨウが貼つてあって

座つたままこちらを見ていた春花が、慌てて立ち上がり駆け寄つてきた。

「大丈夫?」

人差し指の先で血がぷくりと膨れ上がった。

「大丈夫、これくらいなら針で指したのと変わらないから」

「絆創膏持つてくるから、トイレで洗ってきてなよ」

「あ、ありがと！」

席に戻つてポーチを取り出す春花を横目で見てからトイレに行く。

蛇口を捻ると、冷たい水が指先で跳ねた。

冷えそ…。

血はすぐに流れたので、水を止める。

春花の絆創膏はオシャレな柄が多いから、ちょっと楽しみだなー！

「ナツ、はい絆創膏」

「ありがと！」

今日は黄色にオレンジの花柄！かわいい！
裏をペラリと剥がし、くるっと巻く。
よし、大した怪我にならなくてよかつた。

「[画]危ないから取つておいたわ」

「ありがとう！さすが！」

「それにしても誰があんなことを。昨日まで何もなかつたんでしょ
う？」
「うん」
「完全に誰かの仕業よね…。ねえ、誰か心当たりあつたりする？ナ
ンのこ…と悪く思つてそ…うな人」

…すごく思い当たるのは気のせいかな。
昨日の今日だし、あの別れ方だし。

「は、橋本雪枝…さん」

「橋本？誰？」

「前、おはし拾つてあげた1年生……」

「あ、劇のファンのあの子か！」

春花はぽんつと手を打つて頷いた。

それから私の机に堂々と座る。

「で、その子と何かあつたの？」

「えーと、まあいつものじとく

笑つてみせると春花は呆れたようにため息をついて、そのきれいな指で私のおでこをピコンと弾いた。

「あたつ…」「まつたくナツは何度も…。で、今回は何が原因でこじまでなつちやつたの？振つたから？それとも、振り方が悪かつたとか？」

「ど、どつひも？」

「はあ？」

春花が怪訝な顔をして私の顔を覗き込んだ。

仕方ない…昨日のこと言つか。

私は、教室に呼び出されたところから秋津と逃亡したところまで春花に話した。

秋津が連れ出すときに言つた爆弾発言はさすがに伏せたけど…。あのことはまたちゃんと訊かなきや。昨日は結局はぐらかされたしね…。

「なるほど。それは怒るわね…。あの子すくべナツのこと好きで追いかけてたし、もしかしたらこれからも何かあるかもしないわね。注意しなよ？」

これからも、か。

「謝りに行つた方がいい?」

「付き合ひ気があるならね」

私の机から腰を上げながら春花は言つた。

「そうでないなら、逆効果よ。やめた方がいいわ」

「うー。もう勘弁して…」

女の子って、かわいいけど怖い。
どこまでも追つてくるあの執着力とか、観察力とか、プロの探偵に向いていると思つ。

頭を抱え込む私を見て春花が笑つた氣配がした。続けて頭を撫でられる。

いつも毒舌を吐いて厳しい春花だけど、私が弱つてるときはちゃんと支えてくれる。

「大丈夫よ。今まで乗り越えて來たじゃない。堂々としていいなさい。それに、今回は秋津もいるし」

パツと顔を上げて春花を見上げる。

私と目が合つて笑うと、彼女のきちんと手入れされた髪がさらりと一房流れた。

「なんで秋津?つて顔してるわね。だつて、こいつって嫌がうせ受けたのは、連れ出したアソシにも責任があると思わない?」

お、思わない！ちょっと春花！！

あのときは本当に困つてて、責任つていうかむしろ感謝するくらい
だし！

「いいのよ、その方が秋津も楽よ。私がナツに何も言わず一人で悩
んでるの、嫌でしょ？しかもナツにも関係のある話で」

「嫌ー！」

でしょーと言つて、春花は軽く首を傾げた。

「でも、とりあえず今は言わないでおくわ。今日みたいなことが続
くとも限らないしね」

「うん」

これつきりであつてほしいけど、さつとそんなことではないと思つ。
それは春花も私の話から気づいたはず。でも、なるべく秋津を巻き
込みたくない。

もつ、どうしてこう問題ばかり起つるんだろ？

第1-3話（後書き）

「…」まで読んでくださいて、ありがとうございます…！

な、なんと…氣弱そうな橋本さんが大暴走し始めてます！
「橋本より秋津出せよー。」といつ方、次はちゃんと出す予定です…。

よかつたらまた明日も覗いてください…

第14話

風邪を引いた。…また。

鼻声で学校に電話すると、受話器の向こうで先生も苦笑していたけど、一応「ゆつくり休んでね」とは言ってくれた。

体が熱いし、ううっ、頭も痛い。

私は電話を枕元に置いて、もう一度布団を掛け直した。同じく枕元にあるスポーツドリンクを一口飲む。

原因は昨日の事件に違いないと思つ。

改めて、女子って、いや橋本さんってすごいな…。あんなにかわいい子が、と思うと怖いを通り越してすげーこと感じてしまつ。

昨日の事件の始まりは放課後。

私は春花と校舎横の花壇にいた。この花壇は体育の備品が置いてある体育倉庫と校舎の間にあって、普段はあまり目立たない。そのせいか、花壇といつても雑草生え放題、荒れ放題で、夏は蚊の巣窟になるから誰も近づかなくなつた。ちなみに私も嫌！…だってあそこ、夏が終わつた今でも蚊が生きてるんだよ！？

ちなみに言い訳をすると、私たちは好きで行つた訳じゃありません！美化委員の仕事で仕方なく片付けしたんですから。

私と春花は学校の美化委員に所属している。

その名の通り校内の美化に努めているので、こうやってたまに放課後に残つて掃除をする羽田になる。たまにだからいいんだけどね。

で、今回は荒れ放題の花壇に田がつけられたところで、私たち

美化委員はジャージと軍手着用の下、花壇に繰り出した。

私はいいけど、見目麗しい春花がダサいジャージを着て、土をガツガツと掘り、根から雑草たちを引っこ抜く姿はなんともいえない…。他の委員（主に男子）もチラチラと春花を見ては、陰でため息をついている。

もちろん私も負けずと雑草と格闘した。軌道に乗り始めるとな単純作業も楽しい。

そのとき。

バシャン!!

その場が一瞬で固まった。

誰も何も言わないのに、全員の視線だけが私の方に集まる。

今度は水。

朝は画ビョウで、夕方は水…。

上を見ると、ちょうど真上の3階の窓が開いている。

「ナツ!大丈夫!?

「う、うん…へ、へっくしゅ…」

桐野!と大きな声がして、美化委員の木下先生がこちらに走ってきた。

木下先生は理科の先生で、いつでも白衣を来てているのが特徴だ。しかも、美化委員の活動中でも脱いだことがない。

「桐野、どうした?」

「あ、水が落ちてきて…」

「水が勝手に落ちるわけないだろ？、誰かの仕業じゃないか？」

「あ、そうだと思います…」

「かといって探すわけにはいかないだろ？…今日は帰りなさい。その格好では風邪を引いてしまつだろ？」

11月に水を被ると、さすがに寒い。私は一度だけ頷いて立ち上がった。ありがたく帰らせてもらおうかな？

春花が田だけで「気を付けて」と伝えてきた。橋本さんのことかな。まさか水を被せてくるなんて…寒っ！

…そして現在に戻る。

結局風邪を引いて寝込んだ。

ちなみに寒いので制服に着替えて帰つて、ジャージはすぐに洗濯機に放り込んだ。たぶんお母さんは気づいてない、はず。

「ねえちゃん！ただいま！」

ベッドでどうとしこうと、ドアが細く開いた。弟のフコだ。あれ？フコ今日学校だよね？

「フコ、学校は？」
「何言つてんの、もう終わったよ」
「え、今何時？」
「5時」

いつの間にか寝てたみたい。そつこえば、ちょっとスッキリした気がするかも。

「ねえちゃん」

「何?」

「お客さん」

「へ?」

お客さん? 春花かな?

も、もしかして橋本さんじやないよね?...?

「ナツ?」

違う、春花じゃないこの声。
まさか、でもなんで家に?

入るぞ、と声がしてフユが体を退けた。
よく知ってる人。私の大切な人。

「大丈夫か? 風邪引いたって聞いたけど」

秋津。

秋津が家にいる。

思つたより元気そうでよかつた、なんて言つて笑つてくれた。

ど、どうして?

第1~4話（後書き）

いつもありがとうございます！

いつも0時更新なのですが、ちょっとオーバーしてしまいました。

秋津出すと言ったのに、結局最後にちらりだけですみません…！…

明日ガツツリ出ます！！

むしろ秋津しか出ないですよー！

どうなってるの？

熱を出して寝込んでいたら秋津が家に来た。

「那人、ねえちゃんと同じクラスの人？」

「そ、そうだよ。秋津…くんていうの」

「ふうん。家の前でうるうるしててさ、ねえちゃんと同じクラスの人だつて言つから、一応上げたんだ」

フユがちょっと疑わしげな目で秋津を見た。

その様子がごはんの品定めをしている猫にそっくりかも。そんなフユの隣で、秋津はクスクス笑っている。どうもさつき私が「くん」付けで自分を呼んだことがツボに入つたみたい。

失礼な！自分でも違和感は感じたけど！

じろじろと秋津を見てから、フユはねえちゃんがそういうなら、と言ひ残して部屋から出ていった。扉がぱたんと閉まって、なんともいえない沈黙が流れる。

「あ、座つて…ど」でも…そうだなんかお茶とか

「いや、お構いなく。てか病人にさせられないから…寝てて」

立ち上がる私を制して、秋津はベッドの側に座つた。ついでとばかりに、私の布団を掛け直してくれる。

「ありがとう」

「ん」

妙に恥ずかしくて、布団を口元まで引っ張りあげた。パジャマだし、髪もボサボサだし。

「あ、そうだこれ

「何これ？」

「進路調査の紙」

「…」

「提出は金曜日」

「…」

「返事は？」

「…ハイ」

「あと、こいつちは今川から」

「あ、ノート…！」

私は思わず笑顔になつた。

さすが春花！大好き！授業のノートを取つておいてくれたんだ！！！

「さつきと大違ひの喜びよ」

「だつて…」

「まあ、授業用ノートが全部ロッカーの中にあるつてこいつのは、あまりよろしくないと思つたけど…」

うつ…。鋭い指摘に苦い顔になる。

秋津は意地悪い笑みを浮かべて私を見た。

「ぜ、全部ではない…古典と英語と数学と地学と現国くらいだから

！」

「ほほ全部じやん！」

「世界史は持つて帰つてる…」

まあ、世界史は毎回プリントだから、ノートは宿題にしか使わないし。正確には家に置きっぱなしというか、たまにしか持つていかないというか…。

「あーわかつたわかつた」

「…絶対そう思っていないでしょ」

「まーね」

と軽く流すと、秋津は頭だけ動かして部屋をぐるりと見回した。

「汚いって言わないでよ」

自覚しますから。

「いや、思ったよりきれいかも?」

「それも失礼!」

でも確かに、昨日はすぐ寝たから片付けてないし、もうこいやと思つて教科書出しちゃはなしだからなあ。

「ナツ?」

「あ、うん。ごめん、何?」

「今日風邪引いた原因って、もしかして…」

コンコンコン

「ハイハイ！失礼します！！お茶お待ちどうさまーーこのテーブルに置くね？あ、ねえちゃんは猫舌だから赤いカップの方で」

ノックからドアが開くまでおよそ1秒。

フコが唐突にドアを開けた。

開けるの早っ！！しかも、秋津が何か言いかけたところだったのに！なんてタイミングの悪い…。

フコはお盆をベッド横のミーテーブルに置いて、再び体を起こした
私にカップを手渡してくれた。

「はい、秋津さんも

「ありがとう」

き、気のせいかな…。

今バチって何か散ったけど…。

秋津にお茶を渡してから、体を反転させると、フコはベッド脇で仁王立ちをした。

「ねえちゃん熱は？」

「えーと、ない？」

「ちゃんと測りなさい」

「う…」

しばらくこじみ合つたけど、これは誤魔化せないかも。私は体温計を取り出した。

もう、いつもおまじないが年上かわからなくなる。

体温計を挟んで少しだすとい、明るい電子音がピピッヒ音を立てた。

「じうへー」

「えっと、38.6」

「寝てろ」「う

2人同時に声が上がり、続けて秋津が立ち上がった。フユも私からカップを取り上げて片付けをする。

呆気にとられている間に、秋津が帰る準備万端で私を見下ろしてにこっと笑った。

「じゃ、またな」

え、何なのこの展開…？

せつきまで和やかに（？）話してたのに！

「じゃ、ねえちゃん、またね」

秋津が部屋からるとフユがばいばいと手を振り、扉をそつと閉めた。

第1-5話（後書き）

毎日ありがとうございます

思ったよりフュがいっぱい出てきました（笑）
秋津は次の話も出す予定です！

では、また明日、よかつたら覗いてくださいー

正直あまりまだ学校に行きたくなかった。昨日の今日で見事に熱は下がったし、体はすくなく元気なんだけど学校に行くぞー!っていうションションにはならない。

橋本さんから何かされるかもしけないと毎日と怖いっていつのもあるし。

うーん、でも春花にノートお礼言わなきゃいけないし。秋津にもプリント持つててくれたお礼しなきゃ。

大丈夫、こんなことでへこたれる私じゃない!!

「ねえちゃん学校遅れるよ?」

「あ、うん」

リビングを行ったり来たりしている私を田の端に捉えてフコが忠告した。

フコの通う中学校は家から10分なので、朝はのんびり朝ごはんを食べて、テレビで芸能ニュースを見てから行つても十分間に合ひ。今田もまだイスに座つてトーストをかじつている最中だ。

ちなみに我が家は共働きなので、朝は各自で取ることが多い。今日も両親は出勤済み、フコが作ってくれた朝ごはんを食べた。

テレビのリモコンを操作していたフコが、いきなり「あつー」と言って私を見上げた。

「やつだ。秋津さんが7時30分に迎えに来るって言つてた

は、はああ！？

なんで迎えに来るの？

もしかして、（たぶん）橋本さんによる嫌がらせのこと知ってる？

「すっかり伝言忘れてた！なんか心配だからとか、今川に頼まれてるからとか言ってたけど。ねえ、今すっこいマヌケな顔してるよ」

春花に頼まれた？

春花が秋津に言つたってことかな。

確かに昨日のノートだって、春花が持つて来てくれてもおかしくなかつたのに。

「ねえちゃんにもついにモテ期が来たのかなあ。弟としては複雑だけど。あ、そういうや今川つて春花ちゃんのことだよね？僕、久しぶりに会いたいなー。また今度連れてきてよ」「う、うん」

トーストを食べ終えて、フコが牛乳を一気に飲んだ。「ゴクゴクと喉の鳴る音が聞こえる。それと重なつてピンポーンとチャイムの音がした。

「ほら来た。荷物は？」

「じ、準備してる！」

「はい、いってらっしゃい

いつてきますと言つまでもなく、外に出されてドアが閉まる。フコ…姉に対してなんだか冷たくないかい？

「おはよう」

恐る恐る振り返る。

やつぱり秋津がいる！

「お、おはよー」「

ややぎこちない挨拶を交わすと、秋津は先に歩き始めた。さすが長身、一步が大きいな！速つ！

置いていかれないように駆け出す。

朝からこの状態って、心臓に悪い。

だって、私は秋津が好きなんだよ？

でも告白はしてないし、彼女でもなんでもない。たぶん秋津も私の気持ちを知らない。

なのに、家まで迎えに来てくれて一緒に学校に向かってる。

絶対春花の策略だ。

「ナツが危ないのよ」とか言つたに違いない！下手すれば「秋津にも責任があるんだから」とか言つちゃつてるかも…。あり得る…。

前を歩く秋津の背中を盗み見る。

学ランに包まれた背筋はスッと伸びていて、かっこいい。

ふいに笑いが込み上げた。

秋津は今私がこんなこと考えてるなんて知らないんだよね。

「何？何かあつた？」

「つづん、別に」

秋津が歩くのを止めて振り返る。

それから笑っている私を見て、顔をしかめた。

「変なやつ。ま、熱が引いたみたいでよかつたけど」

それだけ早口で言つと、彼はまた前を向いて歩を進め始めた。
まだちょつと笑いながら、私も遅れじと着いていく。

そつか。

今、秋津を独り占めにしてるんだ。
ふとそう思った。

秋津が後ろを気にするのは私だけのためで、早足だったのを遅くしてくれたのも私のためで、振り返るときは私だけを見ている。
独り占めって、いいかも。

朝の憂鬱さを吹き飛ばすべし、私は幸せな気持ちになつた。

…そのときはまだ、学校で彼女と対峙することになるなんて考えて
もなかつたから。

第1-6話（後書き）

今日もありがとうござります！

お気づきかと思いますが、ナツはものすごく流されやすい子です（笑）

でも、芯のある人にしたいと思ってます。
そして次話はそれが垣間見えるはず？

桐野先輩おはよーい」やれこます、と甘ったるい声で後ろから挨拶され、思わず背筋にゾッとしたものが走った。

ロッカールームの前の廊下は私たち以外誰もいない。

声の主はわかつてゐる。

「けど、後ろを向いたままで「橋本さん？」と尋ねた。

「もちろんそうです。さつちに私はいませんよ。ちやんと私の方に向いてください」

笑いを含んだ言葉。

言われなくても向くから！

そう言おうと思つた衝動をぐつとじらへて振り向く。

隣で秋津が唾を飲む音が聞こえた。

「おはよーいります。お久しぶりですね」

柔らかに微笑んだ彼女は何か違う。

うまく言えないけど、今日の橋本さんは私が今まで見てきたあの子じゃない…。

どうしてだらう？化粧が濃いから？スカートが短いから？それとも、

私を見据える目が鋭いせい？

しばらく見つめ合つてから、つやつやのグロスが塗られた唇を開いて、彼女は悲しそうな声を出す。

「そういえば、覚えてますか、あの日のこと。あの放課後のことです。私、あの後すごく寂しかったんです。ひとりぼっちで教室に残されて、何もできなかつたから」

「それについては謝る。「ごめんなさい！」
「別に謝つてほしかつた訳じゃないんです」

そう言いながら潤んだ瞳に映る悪意が怖い。

今、橋本さんの目はギラギラしてゐるようなかんじ。獲物を見つけた肉食獣のような瞳に見つめられて、思わずたじろいだ。

「大丈夫か？」

その様子を見ていた秋津が小声で尋ねてくれた。
声は出さずに頷く。まだ大丈夫。

「ねえ先輩。その人は何なの？桐野先輩の何なんですか？朝から一緒に来るなんて…許せない…」

秋津が私に話しかけるのを見て、橋本さんが怪訝な顔をした。
どうやら秋津が気に入らないみたい。でも、何なのって別にあなたに関係ないじやん。

私にとって秋津は大切な人なだけ。

「私だつて、あなたが…好きだつたから…。あなたのためを想つて…。でも、先輩は私の気持ちを受け取つてはくれない。だから、この想いを分かつてもらうために…いろいろしてたんですよ?」

知つてた？と訊くように、目の前の少女が両手を広げて微笑む。
普段はかわいらしく見える仕草に、今は無性に腹が立つてきた。

どうしてそんな目をするの？

あなたにとつて私はどんな存在なの？

憧れと恋は違う。

憧れでもらえるのは嬉しい。

百歩譲つて恋になつたとしても、でも…それは相手を思いやる気持ちがなければきっと意味がない。

「好きだから、あなたを想つて」なんてその人が作った理由でしょ？大切な人を理由にするなんて、私は許せない。

いつそ、言つてしまおうかな。

「ナツ、言つな」

その言葉にハツとして秋津を見上げた。もしかして考へてることだだもれだつた？

「ナツはそれを言つな。きっと今ナツが考へてる正論はあいつを傷付ける。そうすれば、またこの前みたいなことが続くかもしぬない」

秋津の真剣な声は私を冷静にする。

私はこくりと頷いた。

やっぱり知つてたんだね、画ビヨウと水の事件のこと。

秋津の言つ通りだ。そう、きっと彼女は混乱してる。

憧れてた人とやつと話せた。なのに、いきなり現れた知らないやつと一緒に帰つていったなんて。もし自分と秋津のことだと思うと胸が張り裂けそうになる。

でも…でも、やっぱり理解できないよ。

私は秋津が好きだけど、傷つけたいわけじゃない。

私のことを見てほしいけど、そのために怪我をさせたり、風邪を引きたくない。それをするれば確かに意識は私に向くけど……でも、違うよ。

私はただ秋津に傍にいてほしいの。
支配じゃなくて、心が望むままで。

第17話（後書き）

1日あけての更新です。

再び読んでくださった方、ありがとうございます…。

橋本さんの愛が歪んできます…。

もう私も止められなーいです。

とこつーことで、もう少しお付き合ってくださいー。

目を合わせていられなくて、私は下を向いた。再び顔を上げると、前に立っている女の子が意地悪い笑みを浮かべる。でも彼女顔に似合わず真剣な声を出した。

「いいですか桐野先輩、私もう一度言います。あなたが好きなんです。私と付き合ってください」

がらんとした廊下に響く声。

いつもは混雑するはずのロッカールームなのに、今日に限って見計らったように誰も来ない。

いいですか、つてまるで小さい子に確認するみたい。それって『付き合わない』これからどうなるかわからないよ』つてことなの？

私は顔を曇らせた。

こんな展開は初めてかも。

画ビヨウなら今までもあった。水はさすがになかったけど、飲み物をこぼされたことはあるし、それくらいなら耐えられなくはない。いつも春花の助けもあって、ある程度我慢していれば諒めてくれた。

そう、そんなくらいじや屈しないけど。

今気になつてるのは秋津のこと。

このままだと、きっと秋津はこの先も世話を焼いてくれる。そうすれば、橋本さんは彼のことを邪魔だと思い始めるかもしれない。矛先が私ならいいけど、もし秋津に移動してしまつてしまつたら…。申し訳ない。そんなことは絶対させられない！

「先輩、決められないの？」

「…っ！」

冷ややかな目で見つめる橋本雪枝。

彼女はイライラしたように右手の親指の爪を噛んだ。

「どうして？何が気になるの？その男？」

「ち、違う！秋津は何も関係ないから」

「関係ないなら、どうして邪魔するの？放課後のときも、今だつて一緒に学校に来てる。私に見せつけたいわけ？」

「だから、違うつづれば！落ち着きなよー！」

やばい。

どんどん悪い方向に行つてる。

このままじゃ今日のうちに秋津が標的になってしまつた。

「落ち着けるわけない！ハツキリしてー！」

「だから…」

「俺のこと、そんなに気になるのか？」

私の言葉を制して秋津が口を開いた。やめて、と叫おうとした私を手で制して、彼は一步前に出る。

「確かにさつきのナツの発言は間違ってるかもな。俺は関係ないわけじゃない。あのとき教室から連れ出したことがきっかけでナツは嫌がらせを受け始めたわけだし

「嫌がらせー？違う！」

ああ、お願ひだからやめて…。

嫌がらせと言われた橋本雪枝が頬を赤くして抗議する。しきりに「先輩のため」「私だけを見てほしいくて」と呴いて、さうに爪を噛んだ。

「じゃ、何なんだ? 好きな人傷つけて楽しいか? そんなことをして自分だけを見てもらえたとしても、俺だったら何も嬉しいな」「なつ……」「なつ……」

ちよつと!

れつも私に言つなつて言つたくせに同じ様なこと言つてるし……

「ナツはお前のものにはならねえよ」

「ひ、ひどい……」

「ひどいのはお前だ」

もしかして、秋津……怒つてる?

どうして、私のために怒つてくれてるの?

橋本雪枝はさつきまでとは違い、青い顔をして秋津を見上げていた。その瞳にうつすらと涙が浮かぶ。続けて私を見て、再び口を出した。

「もういい。桐野先輩の気持ちはわかりました。隣のあなたの気持ちも。でも、私は変わらないから」「

覚悟してと言わんばかりの口調で言い放つと、橋本さんは踵を返して歩いていく。

「ま、待つて!」

私の声を無視して、彼女は階段を駆け降りて行つた。残されたのは

私と秋津の2人だけ。

これは、春花を交えて会議が必要かも。

第18話（後書き）

ちょっと更新が遅れつつあるので、がんばります……！

橋本さんの今後はどうなるのでしょうか…。

そしてナツと秋津の関係がいまいち進展しなくてすみません…！

進展させる気はバリバリあります！

書く気は満々なので、もう少しあ付け合いいただけると嬉しいです。

「で、逆上をさせて終わつたと？」

まだ苦い思い出が残る放課後の教室、秋津と私に春花を加えて会議…といふか説教を受けていた。

ほんと容赦ない…。

ちなみに、今日は春花も予備校がないみたい。3人とも帰宅部だから助かつた。

「悪い、俺つい感情的に…」

いつも明るい秋津が珍しくうなだれていた。

朝の発言、結構気にしてるらしい。

確かにあんな風に怒る（？）秋津は初めて見た。

あんな状況なのに、低い声もいいなあなんて考えてたなんて言えな
い！

「まあ、仕方ないわよ、私だったらもつとキレてたかも。もう勘弁してほしいわね…。今日で完全に秋津も標的になつたわよ？迎えに行かせたの、間違いだつたかなあ」

「そ、そうだ春花！なんでそのう…いきなりお迎えとか？」

「だつて心配だつたから。風邪引いてたし、その状況での子に何かされたらダウンしちやうと思って。あ、そういえば風邪は大丈夫

？」「遅つ！」

つっこんだ私をかるく流して、春花はとにかく、と続けた。

「朝の『タタタ』に私を呼ばなかつたことは大きなミスね。でも、今更言つても過ぎたことだし、お説教はこれくらいでやめておくわ。彼女は簡単には諦めてくれなさそつだから、2人とも警戒しててね」

「はい」「ああ」

同時に返事をした私たちを見て満足げに頷いた春花は、ふいに私の頭をポンと叩いた。

「ナツ、落ち込まない。秋津はナツのせいで巻き込まれたとか思つてないはずよ、ねえ?」

いきなり話を振られて目を丸くした秋津は、一瞬の間のあと大きく首を縦に振つた。

「うん、ありがとう…」

やつぱりいつときの春花は優しい。ちゃんと説教してくれる友だちは春花くらいい。

「しようがないなあ、今日は春花先生が『あ』オレをおいてあげましょう」

「え、ほんと!…?」

「ほんと」

春花は左手で髪をすくと、机の横に掛けていたトートバッグから財布を取り出した。

クリーム色のレースが付いたピンクの一ツ折り財布。その中から200円を出すと、私に「ハイ」と渡した。

春花…なんて優しい!

いちごオレをおひつてくれるなんて！

いちごオレは80円。

手が届かないわけじゃないし、むしろお手頃な値段なんだけど、私と春花の間ではいちごオレは特別なときに飲むものにしている。特別だと落ち込んだときに明るくなれるから、ということで1年のときには2人で決めた。ちなみにいちごオレにしたのは、2人ともそれが好きだからっていう理由。

「私の分もお願ひね。あと、おつりはちゃんと返すこと」

「了解です！」

うつて変わつて笑顔になつた私。

春花はにっこり微笑んで頬杖を付くと、秋津の方に顔を向けた。

「大変申し訳ないけど、秋津の分までおごる余裕はないの」「や、別にいいよ。自分で買うし。俺、抹茶オレの方が好きだから」

秋津はそう言つて笑うと財布を取り出した。
黒いお財布。使い込まれた二つ折り。

「あ、私買つてくるよ。抹茶オレだよね」

お小遣いをねだるみたいに右手を差し出すと、秋津は笑いながら自分の左手を私の手の上に載せた。もちろんその手の中にお金はなくて。

あれ？と首を傾げると、そのまま手を握つてぐいっと引っ張られた。

え、ちょっと！

なんで引っ張る！

お金を渡してって意味なんだけどー

「一緒にいく」

えつー?

思わず助けを求めるよひにて春花を見ると、あいかわらず頬杖を付いたまま手をヒラヒラと振った。
声を出さずに口パクで「こつてうりしゃい」と呟える。

そのまま半分引きずられながら、私と秋津は自販機に向かった。

第1-9話（後書き）

「んばんはー、いつもありがとうございます！」

こじらへんで宣言しておきます。

秋津は『肉食系男子』です！！

そろそろ顔を出す頃かな？

ゞ、ゞあゞきすゐ…。

秋津は私の手を握ったまま鼻歌なんか歌いながら歩いていくけど、私はどうしていいか分からない。空いている方の手にある春花にもらつた200円が、妙に冷たく感じた。

廊下に誰もいなくてよかつた…。

今日は廊下運はついてるかも。

いや、そんなこと考えてる場合ぢやなくて！

この状況おかしい！飲み物買いに行くのに手繫いでるとか、付き合いたてのカップルでもやるかどうかの行為ぢやないですか？

「秋津？」

「…」

あ、今無視しましたよ。

「秋津！」
「…何？」
「手」
「え？」
「手を、はなして」

子どもの言ひみたいにゆづくつ話すと、彼は立ち止まり、私の手を見て少し考えてからゆづくつと手をほどいた。

ああヒヤヒヤした！もし誰かに見られたらと思つと…。

手をはなすついでに、秋津はふうと息を吐いた私の顔を覗き込んだ。

「な、何? 何かついてる?」

「いや? 顔、赤いから」

「え! ?」

「なんてな?」

いつもみたいに明るく笑うと、秋津はぐるりと背を向けて彼は歩き出した。

顔、赤いのかなあ?

頬に手を当ててみるけど、あまりわからない。
もひ、なんなの!

私の前を歩く秋津が、軽快に階段を降りる。
オレがある自販機は1階。

階段を降りてすぐの場所にあって、食堂からも近い。ちなみにオレは我が校で一番人気だから、人がいっぱい来る文化祭や夏の暑い日には、お昼休みに売り切れになることもある。

そろそろ冬になるこの季節は大丈夫かな?
どちらかといふと冷たいオレより温かいココアが売れるようになる
みたいだし。

先に自販機に到着した秋津が100円玉を入れてボタンを押す。
機械がウイーンと動く音がすると、続いて30秒お待ちくださいの
表示が出て、ランプが点灯した。

「なあ、ナツ」

取り出し口付近にしゃがんだ格好のまま、秋津は顔だけをこちらに
向けた。

「本当に… その、悪かった。あのとき… 放課後の教室で連れ出しちゃった今になつてややこしくなつた

…きた。

秋津なら絶対謝罪すると思ってたよ。

連れ出してもらえて嬉しかったんだって。

本当に困つてたし、来てくれたのが秋津でよかつたって思つてて。あれから何度も言つたのに。

何も言わない私を一瞬だけ見て、彼はでも、と言葉を続けた。

「なんでかな、あの教室からナツを出されなきゃいけない気がして…。だから、後悔はないから。こんなことになつて俺に責任ないって言つたら嘘だけど、後悔はない」

自販機がピーとマヌケな音を立てた。

秋津は立ち上がり、取り出しから抹茶オレを手に取る。それから2歩つしろにトガリ、「お先」と小さく呟いた。

私は慌てて自販機に駆け寄り、どこかぎこちなく100円を投入する。『いちじオレ』と書かれたボタンを押して一息ついた。今度は20秒お待ちくださいの字が浮かび上がる。

「笑うよな、相手は女なのに嫉妬するなんて」
「え？」

今、なんと？

「いや、何でもないよ。とりあえず、橋本からまた何かやられたら

すぐ言えよ?」

「う、うん...」

「じゃないと今川に怒られる...」

「あ、だね...」

どうやら秋津も春花の怖さに気づいたみたい。
2人して納得し合っていると、ガラガラとカップに氷が入る音がして、再び自販機が音を立てた。

取りに行こうとしたまさにそのとき「ナツ」と声がかかった。首を傾げて秋津を見ると、ふいに大きな手が降りてきて一番だけ頭を撫でられる。

意味が分からずにさらに首を傾げると、秋津は少し笑いながら「取つておいで」と言った。

第20話（後書き）

いつもありがとうございます！
毎度ながら乱文すみません…。

もうひょっとだけ、2人きりのお話が続きます

閑話 水族館（前書き）

少しだけ修正しました。
なので、少しだけ長くなりました。

突然ですが、私は今水族館にいます。

： 1人じゃないよ！

「待った？悪いな」

「あ、全然…」

チケット売り場から駆け足で駆け寄ってきたのは秋津修。私のクラスマイトで、私の好きな人。

今日の秋津はブルーのストライプシャツの上にグレーの薄手セーターを着ている。下はカーキのパンツを履いて、仕上げに紺のダッフルコート。

シャツの襟だけが白になつてるのが、なんだかお洒落！

対する私は紺の一ツトセーターにショートパンツ、タイツにムートンブーツという動きやすさ重視の格好をしていた。だつてスカート寒いじやん？

ちゃんと上からモツズコートを着ているから、防寒もばっちり。

そう。

今日はうつかり秋津と水族館デートすることになつてしまつた。もともと水族館は春花が行きたがつた場所で、それを知つた秋津が誘つてくれたのだ。まあ、秋津のお父さんに頼めば、チケットが少し安く手に入るからっていうのもあるけど。

秋津パパありがとう！

というわけで、カップルが大勢いる中3人で水族館に行くはず…だったんだけど。

朝早くに風邪を引いて行けなくなつたから2人で行つてきて、つて
いつ連絡が春花から来て…そして今この状況。

2人で入り口に並んで、2人で館内地図を見て、2人で回る順番を
決めたりして。

…デートか！

こ、これって初デートに入るのかな？つていうかそもそもこれはデ
ートなの？遊び？

いやでも少なくとも私は秋津が好きなわけで、となると私にとつて
はデートつてことになるよね。

今も館内地図とにらめっこしている秋津を見つめる。私服こんなか
んじなんだ。もっとチャラい感じかと思ってたけど、意外。

あーこれならもうちょっととかわいい格好してくれればよかつたかなあ？

ブブとポケットが震えて、メール受信を伝えた。

差出人は春花。写メ付き？

『件名：でーと！

本文：やつほー！楽しんでる？もうすぐ開館かな？今日は2人で楽
しんできてね 私は今、ナツの家にお邪魔してるよー久しぶりに冬
くんに会つたら、大きくなつてびっくりした！すっかりイケメン
になつたねー。狙おうかしら（笑）じゃあ、しつかりね！

追伸、風邪引いてません。』

もう…言葉が出ないよ。

春花…わざとなの？

いや、絶対わざとに決まってる…じゃなきゃフコと撮った[写真を添付してこない！

なんて友人…。

でも、ちょっとだけ嬉しいけど…。

――――――――――――

水族館内を見て、シヨーを楽しんだあと、私たちはハンバーガーで簡単にお腹を済ませた。

ちなみに、イルカシヨーでは、はしゃぎすぎて「落ち着け！」って怒られたくらい。

自分だけ「ママアザラシの水槽の前に貼り付いて離れなかつたくせに。」

「ナツ、イルカに触りたくない？」
「触りたい！」

ハンバーガーを食べながら秋津が微笑む。

「じゃあこのあと行こう」
「うん。ここイルカに触れるところとかあるんだね」
「ああ。でもイルカが来てくれなきゃ触れないんだけどな」
「え、じゃあ来なかつたら…」
「また今度、かな？」

えー！と不満の声を上げて膨れる。

そんな私を見て笑っていた秋津は、ふいに真剣になつて「俺はもう1回来てもいいけどな」と呟いた。

そうだね、と相づちを打ちながら、ポテトをつまむ。熱いポテトに冷たいケチャップが絶妙に合ひつ。

それは、どういう意味なんだろう。

私ともう一回来たい？それとも、単純に水族館に遊びに来たいだけ？

飲み込んだポテトが喉の奥でちょっと引っかかった。

そして、結果的にイルカには触れなかつた。

…2時間粘つたけど、無理！

近づいてくるには来るんだけど、触れる距離までは来てくれない！
私、もてあそばれてた…。

その代わり、小さなクジラには触れた。
すべすべしてるけど、結構硬い。

水族館の人は『濡れた茄子』って言つてたけど、まさにそをんなかんじかな？

とりあえずクジラ触れたからよしとするか。

隣で秋津も不思議そうな顔をしている。

私の視線に気づくと、「なんともいえない感触」と首を傾げた。

あ、今ちょっとかわいかつたかも。

今日だけは笑顔もびっくりした顔も、ゴマファザラシにニヤける顔
も、独り占め。

幸せだな。涙が出そう。

こんなにいろんな顔を知ってるのに、まだ友達なんだね…。

水槽に映る自分たちの姿を見たら、まるでカツプルみたいで切なくなった。

日が暮れてきた頃、帰る前に寄つたお土産屋さんで、なんとなく一緒にストラップを買つて、なんとなくその場で付け替えた。それぞれの携帯に、青とピンクのイルカが揺れる。

明田学校でたぶん春花につっこまれるけど、家に帰ればフコにも訊かれただけど、それさえもちょっと楽しみかも。

閑話 水族館（後書き）

なんだか最後が切なくなつてしまつた…。
今度は遊園地のお話が書けたらいいなと思います。

あいかわらず、橋本雪枝からの行為は続いていた。その内容がやたら細かい。

机の中にミミズが入っている（小学生か！）、朝教室に来たら机がなかつたり（隣のクラスにあった）、全クラスの黒板に大きく名前が書かれていたり（24クラス分）などなど。

よくこんな面倒なこと続けてるよね、と春花が言つた。彼女の今日のお弁当はコンビニのおにぎりらしい。ぶつぶつ文句を言いながらも、ビールを丁寧に剥がしてから一口かぶりつく。

屋上は暖かい。

私もフユ手作りのお弁当を広げてスプーンを取り出した。今日はオムライス！！このために午前の授業を乗り切ったと言つても過言ではないかも！

「ほんと飽きないわねあの子…そんなにナツがいいのかな？」

「え、失礼じゃない今の？」

「まあまあ。でも、きっともう好きじゃないでしょうね。ナツに何かしなきやつていう思いの方が強いよつな気がするけど」

「かなあ」

言葉を濁した私の顔に春花の顔が近づく。
目を開いた私をじっと見つめたあと、うーんと唸つてまたおにぎりにかぶりつく。

「おかしい、私？」

「いや、おかしくは……ない?」

「訊かれても困るよ」

「今も、毎日秋津と学校来てるんでしょ?」

「そうだけど」

そう、秋津は飽きもせずに毎朝7時半にうちのチャイムを鳴らす。この頃はフコとも意気投合してきて、すっかりなつかれてる。

毎日2人で教室に入るからクラス内でやや噂になりつつあるのが、今の問題。一度、噂になつたら迷惑だから、と泣きついたけど、「いいじゃん?」とおどけて返されてしまった。

「ナツは俺と噂になるのが迷惑?」って訊かれて、あれ以上交渉できなかつた!

私は…噂になつたら…ちょっと喜んじやうかもだから…!

春花は最後のおにぎりのかけらをぽいつと口の中に放り込むと、もう一度うーんと唸る。

「その割には疲れてる」

「その割にはつて、どの割?」

「好きな人と毎日通つてる割には、よー」

「あ、うんそれは…」

そう言われて、少しだけ頬が熱くなつた。

「だけど、なんか疲れてる」

「そう?」

「うん。大丈夫?彼女からの嫌がらせ、思つたより長いわね。何かあつたら言つてよ?私でも秋津でもいいから」

そつと春花は両手を上げ、くーっと伸びをした。と、突然足音がして、続いて長身の男性が扉からひょいと顔を出した。

秋津！

「俺も昼食べていい？」

「も、もちろん！」

あ。即答した私を見て、春花がニヤニヤする。

アタックしろとか言わないのはいいけど、ただニヤつきながら見守られるのも嫌なんですけど！

ま、でもなんだかんだ、お昼の時間が一番幸せ。

橋本さんは何もしてこないし、春花とたまにこうして秋津も一緒にごはんを食べる。

いつか、ね。

橋本さんからの嫌がらせなしに心穏やかにごはん食べたいなー。秋津の分のお弁当とか、作っちゃつたりしてさー…

「あ、そうだナツ」

「ん？」

3口でメロンパン半分を平らげて、秋津がこっちを見た。やっぱり秋津ほどネックウォーマーが似合う人はいないと思うな！グレーかつこいい。

「明日…話したいことがあるから、放課後残つて？」

「わかつ…た。オーケー！」

話したいこと?何だらう?
いいことかな?

それにしておせっかく、フコのオムライスはおいしかった。

第21話（後書き）

いつもありがとうございます！
明日はちょっと更新が難しそうなのですが、また覗いてください

6限目の終わりを知らせるチャイムがなつて、クラスの男子が歓声を上げた。

終わったー！

最後の授業は英語？。英語は嫌いじゃないけど、ややわからなくなつつある…。高校英語つて、中学と違つて本当に覚えることが多い！

頭パンクしそうだよ！

英語の先生が帰ると同時に担任の先生が教室に入ってきて、パンパンと手を2回打つた。

「ホームルーム始めるよ？」

うちの先生ホームルーム始めるの早いんだよなー。先生も6限は授業をしているはずなのに、絶対に6限目の先生とすれ違うように教室に入つてくるんだよね。どうやってるんだろう…すごい。

しかもホームルームが終わるのも早い。実は結婚していて毎日子どもを迎えるためとか、恋人のため（もしかして学生！？）なんという噂があるけど、今のところ『先生自身が早く帰りたいから』という仮説が一番支持されている。

確かに、あの先生ならありうる…。

意外と面倒くさがりで、アバウトだし。たぶん朝の小テストの統計掲示してないので、うちのクラスだけだと思う。朝テストがボロボロな人は喜んでるけど

今日も必要事項をだけをテキパキ伝えると、うちのクラスは解散になつた。

「ナツ、待つて

掃除のため机を教室の後ろに移動させていると、秋津がやつてきてこそつと耳打ちされる。

うんと頷いてから、慌てて「図書館にいる」と付け足した。それを聞いて、教室掃除当番の秋津は右手を振つてホウキを取りに行く。話つてなんだろ？

橋本さんについてだつてことは確実だけど……。
もしかして何かされたのかな？

あの日からも標的は私のままだけだつたから、ちょっと安心してたのに……。

机を下げるすると私は荷物を持って教室を出た。

春花は用事があるらしくて、さつさと帰っちゃつたし、私は本当に1人で図書館に行く。

図書館つて、いつも埃っぽい。

春花はそれが少し苦手らしいけど（その割にはよく行つて）、私は好き。本に囮まれるとそれだけでどこかに行けそうだし、図書館ある本は新品のものとは違つて、独特のにおいがする。莊厳なようだけど、でも誰かをその領域から外すことはない。そんなんかんじ？

私は一番奥の読書スペースまで歩いて行つた。
どこのクラスもまだホームルームが終わつていないみたいで、スペースには誰もいない。

途中で『今月のオススメ』が置いてあるラックに立ち寄つて適当に1冊持つていった。

今話題のライトノベル。こう見えて、私結構本読むの好きなんだから！

ジャンルもあんまり問わないから、フコが借りたり買ってくる本も読んだりする。

熱中しすぎて人の話が耳に入らなくて怒られることがあるけど、1週間に1冊くらいは読むようにしてる。

「おまたせ？」

どのくらい時間が経つたのかな？

声をかけられてハッと顔を上げると、秋津が少し困ったように笑っていた。気づけば手元の本はもう半分を過ぎている。

秋津が「？」を付けたのも、そのせいかな？
だって確かに待つてはいなかつたし。

秋津は私の向かいに座り、同じように荷物を下ろして彼の隣の席に置いた。それから中に手を入れ、何かをじごそと探りだす。

夕日が入ってきて、眩しい。

秋津の頬も少しオレンジ色になっていた。

「これ」

見とれかけていた私を、彼の声が現実に引き戻す。ちえつ、もうちよつと見ていたかったのに！

秋津が差し出したのは1通の手紙だった。
真っ白な封筒には何も書かれていない。

「これ…何?」

「橋本からの手紙。机の中に入つてた」

橋本といつ名前を聞いたとたん、胸がズキンと痛んだ。

「読んで。どうもうかと思つたけど、ナツにも読んでほしい」

秋津の真剣な声に、躊躇つていた手を伸ばして封筒に触れた。

第22話（後書き）

いつもありがとうございます！

今日も更新できました！

明日はいよいよ…ふふふ

第23話（前書き）

読みじつと編集しました。

『桐野先輩が好きな貴方へ

ここにちは。もひじか存じかと思いますが、私は1年の橋本雪枝とい
います。

单刀直入に言うと、私は桐野先輩が好きです。

私が先輩にしてきたこともあなたなら知つていいでしょう。

けど、決して嫌がらせなんかじゃない。あなたは以前、「俺なら嬉
しくない」とか何とかおっしゃっていましたよね。

あのときは思わず言葉に詰まってしまいましたが、じっくり時間を
かけて考えてみると、やはり私のやり方は間違つていないと感じま
した。

どんな方法でもいいのです。

先輩の意識が私に向くのであれば、それがどんな感情だとしても、
私の喜びにしかならない。そのことを強く強く理解しました。

今の私にあなたは邪魔者でしかありません。だって、あなたがいる
限り、先輩は私のことを見てくれない。

だから思ったの。

桐野先輩はとても忍耐強いし、きっとこの先私が何かしたとしても
動じない。

じゃあ、あなたなら？

先輩は友だちを大事にする人だと聞いています。あなたが友だち以上だとしても、それは変わらないこと。

なら、あなたでいいよね？

桐野先輩に私だけを見てほしいの。

そのために、協力してもらえた嬉しいわ。

橋本雪枝『

便箋4枚に渡つて綴られたその言葉は、私を痛めつけるのに十分だつた。

手紙を持つ指先が震えて、全身から嫌な汗が流れ出す。どうしよう。

一番恐れていたことが現実になる。

簡単に言つと、今の手紙で橋本雪枝は『次の標的は秋津だ』って宣言してゐることでいいんだよね？

嫌だ、そんなのダメ！

私は手紙から目を離せずにいた。明らかな意思を持つて綴られた言葉に息を飲む。

無意識のうちに紙を持つた手に力が入つて、端が少し折れた。

「ナツ…大丈夫か？」

目に見える動搖に驚いて、秋津が顔を覗き込んできた。うん、と頷いたけど、たぶん私青い顔してる。秋津の心配そうな顔が目に入つ

て、どうじょうもなく申し訳ない気持ちが溢れた。

あ、ヤバい。泣きそう…かも。

うう、嫌だ。学校で、しかも秋津の前で泣きたくはない。

それに…私が泣くのはフェアじゃないよね…。

だって、これから辛い目に会う可能性があるのは秋津だから。

「大丈夫。それより…秋津ごめん。私のせいでのせいで、秋津も何かされるかもしれない。っていうかこの手紙だと、確定だよね」

あはは、と笑つてみたけど、ちょっと不自然になっちゃったかも。秋津は黙つて何も言わない。

「…」

う、気まずい…。10秒ほどして耐えきれなくなつた私は、荷物の中からハンカチを掘むと、勢いよく立ち上がつた。

「と、トイレ行つてくるーー！」

くるりと背を向けた向こうでイスを動かす音がする。秋津も動いたような気配がした。

と、そのとき。

右手を強く引かれる感触がした。

「…つー?」

何?と訊く前に、そのままぐいっと引っ張られる。前に行きかけていたところで急に後ろに引かれて、私の体は軽くバランスを崩した。

秋津?

そうだ、今私の背後にはいるのは彼しかいない。

突然のことなどでどうしていいか分からず、腕抜けるかもなんて考えて、脱臼は痛いんだよねなんて想像を膨らませた。

そして気づいたときには彼の腕の中。

秋津の中にすっぽりと収まって、ぎゅっと抱き締められた。

「泣けよ、泣いていいから」

「え?」

「今にも泣きそうな顔して。どうせトイレ行って泣くつもりだったんだろう?」

「そ、そんなことないよ……」

「嘘。そんなとこ行つて泣くくらいなら、ここで泣け。まだ誰もいないうから」

秋津が私の頭を撫でながら、「俺がいるから」と優しく囁いた。その手が温かくて……大きくて。ここはなんて安心できるんだろう。

もう……限界。

堰を切ったように涙が溢れた。

抑えようとしていた声も次第にコントロールが効かなくなつて、ついに嗚咽が漏れる。

「なあナツ……俺ってそんなに頼りない?」

「そ……んなこと……ない……で……す」

「俺つてそんなに弱く見える?」

「うう…ん」

「じゃあ、信じよ。あんな辛い顔すんなよ。甘えてくればいいんだ。いつかきっと無くなるからそれまで一緒に頑張ろうね、って言つてくれればそれでいい。一人で考え込まなくていい」

頭の上で聞こえる低い声に、またせりて涙がこぼれた。

「ナツ」

「…は…い」

「ナツ」

「うん…」

「夏花」

「…こ…る…よ」

何度も私の名前を呼んで、最後に秋津は大きく深呼吸してから、私を強く抱き締めた。

ナツ、橋本のことなんか気にするなよ?と呟つけて、ゆっくり頭を撫でる。

「橋本の声じゃなくて。

俺の声だけを聴いていて」

第23話（後書き）

いつもありがとうございます
ついにいいかんじになつてきました…！
長かつた！

秋津の大きな手が何度も背中をさする。その暖かさに安心して、私は子どもみたいに泣きじゃくつた。制服濡らしちゃうかもと思うのに、涙はあとからあとからこぼれてきて、止められない。

最初は無言でさすっていた秋津も、からかっているのかだんだん「おう、泣け泣け」とか「まだいけるぞ」とか、訳のわかんないことを咳き始める。

あやしているような行動と、唆している口調が合っていなくて思わず笑いがこみ上げてきた。

「ナツ、笑ってる?」

「う……ん。だつで、変な」と言つから

「お前こそ変な声」

笑つてぎゅっと抱きしめる。

男の人つて、やっぱ大きいな。

広い胸に顔を埋めながら思つ。

春花も桜も雪枝も小柄だし、修学旅行で苦虫された子で私より身長が大きい子はいなかつたし。

それに、なんかしつかり? がつちり?

抱きしめたとき、春花みたいにふわっと柔らかくない。それに、シヤンプーのにおいもしないかも。あ、でも石鹼のかおりがする……。

「なんでおいを嗅ぐのかな?」

顔を埋めたままでぐるぐると匂いを嗅ぐ私に気づいて、秋津は私の頭をぱしんと叩いた。

「だ、だつて… 石鹼のこないがした…」

「石鹼？ そつか？」

彼は少し顔を寄せて三分の腕の辺りに鼻を近づける。その姿がかわいい。

「そんなどしないけど。まあ、いいや。ひとつあえず、落ち着いた?」「うん… ありがとう」

いいえ、と言つてから秋津はそつと腕を離しかけた。暖かさが離れていく感覚に、少し寂しさを感じる。

もつひなつといつて言つたら、秋津はびつする?

いや、ここはチキンになつてないで自分から抱きついてみる!?

…無理だ。それはまだハードルが高い…

結局何も言えないまま、秋津の腕は外されて。と思こめや、また背中に回されたりと抱きしめられた。

「やつぱつ… もつひなつと。掃除当番と図書委員が来るまで。ダメ?」

ダメつて… 言えるわけないじゃん!

何も言つてないのに、彼は満足したみたいに私の髪を撫でた。ふわりと石鹼のにおいがする。

ドクドクと鳴り響く心臓の音が秋津に聞こえないか焦る。

今になつて体が熱くなつてきた。

そ、そ、うだ…。冷静に考えたら、これっておかしな状況だよね！？

泣くときに誰かに抱きしめられる…ことなんて、めつたにない。逆に抱きしめて慰めてきたし。

なのにその相手が同じ学校の男子とか、かなりありえない。しかも同じ学校なだけでなく、同じ学年、同じクラスだなんて…！…

なんの拷問ー！？

もう、明日からどんな顔してればいいの？

そんなことを知るはずもない秋津は私の首筋に顔を寄せて、エネルギーチャージだーなんて呟いた。

いや、マジで吸いとられてる気がする。
下手したら魂まで持つていかれそうだし。

少し身をよじつた、そのとき。

ガラッと音がして扉が開く音が響き、続いてガヤガヤ掃除当番らしき人たちが入つてくる。

そのときの2人の離れ方はたぶん超高速だった。

秋津は一瞬で手を離してイスに座る。

私もまた不自然にラックの本を手に取った。

ああ！びっくりした！

まさかこのタイミングだとは！

まだ、背中とか頭に秋津の温もりが残つてる。

第24話（後書き）

なかなか進まないフタリ…
いつも私の妄想に付き合ってください、ありがとうございます！

第25話（前書き）

久々のフコ登場。場面は桐野家です。

「ふうん。慰められたんだ?」

「う、うん…」

「秋津の兄ちゃん結構やるんだねー」

「掃除の人があったときは超高速で離れたけどね」

「ま、そこはね。まだ高校生ですから」

あんただって中学生でしょ、と思つ。

フユは私のベッドに腰かけて、足をぶらぶらせながらコーヒーをゴクリと飲んだ。

角砂糖を3つ入れた、激甘コーヒー。

学校から帰ってきた私は、家族から見ても何かあつたと分かんべりいに拳動不審だつたらしい。

フユには「あれだけお米が好きなねえちゃんが、『はんでお米以外から手を付けたの、初めて見た』と言われた。弟よ、それは学校とかで言うんじゃないぞ。

私だつてたまにはおかずから食べ始める」ともあるぞ。

「じいさんです」

「何?」

「ねえちゃんつて、秋津の兄ちゃんの『ト、好きなんでしょ

思わぬ流れにコーヒーを吹き出しそうになつた。
今白米の話してたじyan!」

ていうか、なんでそれ知つてるの!?
言つてないはずだけど私!!

え、もしかして、言つちゃつたりしてた？

てことは、てことはだよ。

毎朝私がバタバタ支度してる間に、玄関の外でのんびり秋津と談笑してるフコが、彼にこのことしゃべってる、なんてことないでしょうね？

「大丈夫、バラしたりしないから。本当にねえちゃん分かりやすいねー！全部顔に出てたよ？この調子じゃ、もう秋津の兄ちゃん知つてるんじゃない？」

フコはクスクス笑つてそう言つと、ベッドから立ち上がりつて机の方に歩く。

「秋津は知らないはず……。頑張つて顔に出来なこようにしてるから。つて、ちょっと！机の中…見ないでよ？」

「はいはい、分かつてますつて。あ、この本面白そつ。借りていいく？」

今日借りてきたミステリーの本を手に取つて、フコは床に座る私の側にしゃがんだ。

「いいよ、もう読んじゃつたから。今日借りてきたとこだし、返却まだまだだから、ゆっくり読んでも大丈夫」

「え？もう読んだの？あいかわらず速つ」

フコは口笛をヒューッと鳴らして、本をバラバラとめくつた。

「今日借りてきたつてことは、あの熱い抱擁の後ということですかね」

「…フ、フコ…」

近くにあつた黄緑色のクッシュョンを拾つて投げつけたけど、フユはニヤニヤしたままやつと避けてしまった。

「まあまあ。嘘じゃないからね？それにしてもそのクッシュョン、いつ見ても空豆にしか見えない」「空豆じゃないから。どっちかっていふと、枝豆ですから」

「どっちも変わんなよ」

フユは手を伸ばして豆クッシュョンを掴むと、ぽこっとベッドの方向に投げた。

ぼふっと音がして、布団の上に着地する

「ナイスコントロール」

「この狭い部屋だもん、そりゃつまくいくでしょ」「…ねえちゃん、今日は妙に突っかかるね？」

当たり前。フユがからかうのが悪い。

私はふんっと横を向いてコーヒーを飲み干した。

「じゃあ、ありがたく借りておくれ？」

そう言って立ち上ると、フユは自分と私のカップを両手に持つて、本を右の脇に挟んだ。

「ありがと」

「ん」

「あ、やつやつ」

ドアを開きかけたところ、フユが振り返る。

「僕は応援してるから。ねえちゃんと秋津の兄ちやんの」と

「…なつ」

「だつて、もし2人が結婚したら、僕の兄ちやんになるんでしょう？」

「楽しみだなあ」

「楽しみつて…」

「僕のためにもがんばってね？」

僕のためつて…。

時々ほんとに腹黒いよね…。

ドアがぱたんと閉まって、私はため息をついた。

第25話（後書き）

フコがこいつぱい出てきました！

本当はもっと出てきてほしいです。

橋本さんより登場回数少ない…かも？

短編を載せました！

そちらも覗いてもらえた嬉しいです！

「ねえ、ナツ何かあったの? ってか何かあったんだしょ。朝から举动不審すぎるから」

図書館での一件があつた次の日の放課後、春花に呼び出された私は、今川家にお邪魔している。

春花のお家は一戸建てで築20年らしいけど、中はリフォームされているので、新築みたいにきれい。

上下グレーのスウェットという部屋着に着替えた春花は、また少し伸びた髪の毛を手早くポニーテールにした。

「ナツ?」

私が返事をしないから、不審に思つたみたい。聞いてる、聞いてますって。

でも、何て言えばいいの?

「昨日ねー図書館で秋津に抱き締められひやつた! あはーなんて…とてもじゃないけど言えない…。

その点、我が弟は恐ろしい。

「もしかして、ぎゅっ! とかされひやつたの? って核心をついた質問をしてきた。でも、それなら頷いて答えられたけど…。

「あの…ですね」

「どうせ秋津絡みでしょ? 「…ハイ

「だと思った。今日いろいろ行動が不自然すぎて、なんか面白かっ

たわよ

そう言つて春花がくすくす笑う。

ああ、スウェットでもかわいいな…。

そして部屋がきれい…！！

基本的にはオレンジで統一された部屋は、なんとも女子っぽい。ベッドカバーなんか花柄だし、カーテンはオレンジのグラデーションで、下の方に白いレースがついている。

私は春花に向き合つてじつと目を合わせた。

「ねえ、私そんなに変なことしてた？」

「うーん、変なことつていうか…」

そうね、と春花が呟く。

「いくつかあるのよ。例えば、

case 1

「秋津、教科書36ページ読んで」

「はい。Mr. White who works~」

「よし、次桐野！」

「…」

「桐野？秋津の次のところから読んで」

「あ、は、はい！秋津の次…えーと…。秋津の次…」

「37ページ1行目から」

「あ、はい。秋津の次ですね！」

case 2

「ナツ、今日暇？」

「うん」「

「そろそろ秋物だと寒いから、冬物の服買いに行きたいんだけど、付き合つて？」

「え、秋？」

「そう。秋物だと寒いから」

「あ、ああ。服の話ね」

「ずっと服の話だつたけど……」

case 3

「ナツ！」

「あ、ああ秋津、おはよう

「『あ』多くね？おはよう、つてかもう昼だけど」

「そ、そーーそうだつたね！はは、うつかりーー！」

「まあいいや。なあ今日の放課後……」

「放課後！？き、今日は春花と買い物だし！」

「あ、いや……俺じやなくて……。世界史の門真先生かどまが、プリント持つて来るよう係に伝えてつて言つてたから……」

case 4……

「ちょっと待つたあーもういいからー」

さすがに耐えきれなくて、春花を遮る。

オレンジジュースをぐいっと煽つて、彼女は笑つた。

「ねえ、告白しないの？」

「え、告白？」

「そう、告白。だつて、好きなんでしょ？」

「うん。でも、勇気ないし……」

妙に乙女っぽいね、なんて言われる。

「ユーモア女子にモテますよーだ。

「勇気なんかその場で出るわよ。とりあえずアタックしなさい。ナ

ツが意外と初で、先生ちょっと悲しいわ

「そ、その場で！？」

「ううよ。見てていじらしげー。冬休みに入つたらまた会えなくなる
んだから」

「…」

春花先生、厳しいんだけれど。

「うなつたら約束するまで返してもられないんだよね。

第26話（後書き）

更新が乱れぎみですみません！

そしてなかなか進展せずにすみません！

な、なんとか次は秋津を出したい…

第27話

『好きですっ！』

普通に言つたつもりなのに、案外大きい声が出て恥ずかしい。放課後の図書館、中には秋津と私だけ。もちろん今発言したのは私だから、相手は秋津ということになる。

『ナシ……』

ひどく驚いた様子の秋津は、たっぷり10秒程黙つた後で、柔らかな微笑みを浮かべて。

『俺も』

と言つた。

――

「……や……よ」

え？ なになに？

「……ただよー」

……声が聞こえる。誰？ 秋津？

「朝だつてば起きるー」

「わあー！」

フコが耳元で怒鳴つて、その声の大きさに驚いて私は田を覚ました。

「つたく、何回呼んだと思つてんんだか。早く着替えなよ、ねえちゃん。秋津の兄ちゃん来るよ?」

お玉を持つてエプロンをしたフコは、ぶつぶつ文句を言いながら部屋を出て行つた。

携帯を開いて確認すると、朝7時ピッタリ。

いつもより30分も寝坊してしまつた。

とりあえず制服に着替えながら、思い浮かぶのは図書館のアレ。幸せだった。

さっきのは…やっぱり夢か。

だよね、だつて図書館に誰もいないとかありえないもん。普通は図書委員とか他に勉強しに来たりしてる人もいるし。

それにして、夢の中の秋津かつこよかつたなあ。

前髪がちよつと目にかかる、でもその奥の瞳は優しくて、頬がちよつぴり赤くて。

いや、現実の秋津もかつこよかつたなあ。

まだ余韻に浸りつつ着替えを終えると、今日の授業に必要な教科書、ノート、プリントをがさがさとまとめてカバンに詰め、下に降りた。

朝迎えに来てもらつようになつてから2週間くらい。橋本さんからの細かな嫌がらせは、やっぱり続いてる。私自身飽きたというか…疲れた。

いちいち反応すると面倒だし、今やクラスの人ですら私のイスや机

の画『』を取つておこしてくれるよつになつた。

ちなみに秋津への嫌がらせも、私とほぼ同じ内容で繰り返し起きて
いる。橋本さんからの手紙からでは『協力して』つてあつたけど、
とりあえず… そんなにひどい嫌がらせじやなくてよかつた。
秋津はミミズも平氣みたいだし…。

「「あんな兄ちゃん、ねえちゃんたら寝坊してるから」

玄関の外で声が聞こえる。

またフユが話してるみたい。

「大丈夫か？ たぶん疲れてるんだろ」「

「かなあ、なんか最近拳動不審だけど」「

「拳動不審？」

「うん。特にこの前…」「

「だあああーーー！」

「ちよつと待てよ…

フユ！ 何てことを！

私は慌てフユと秋津の間に滑り込んで、

「お、おはよう…寝坊しちやつた…はは」

と秋津に笑いかけ、

(何やつてんのアンタ！)

とこう形相でフユを睨み付けた。

当の本人は「してやつたり」みたいな顔をしている。

「お、おはよう」

振り向いたら、秋津がビックリした顔で一いちを見ていた。

第27話（後書き）

夢つて怖いですよね。

特に嫌いなのは、食べたかったものが食べられずに終わる夢…。

結局なんとな〜〜」とかして、私は家を出た。

フコのせいで慌てて出たから、朝〜はん用に持つて行こうと思つていたパンを忘れた。。

仕方ないから、途中で「コンビニ寄りはりもりおつかな…。朝〜はんナシはさすがにキツイ。

毎朝学校に行く内に、いつの間にか秋津は前じゃなくて隣を歩くのが普通になつた。けど、これといって会話もしない。えっと、全くしないわけじゃなくて、話題があればするけど。ホラ、宿題のこととか。

今日も軽快に歩く秋津の横顔をチラシと見る。
これが私の朝の習慣。

ちょっとした元気のチャージ。

でも、今日はお願いがあるので口を開いた。

「ね、今日途中でコンビニ寄つていい?」

「ああ。おやつ?」

「違つ〜〜寝坊したから朝〜はん食べ損ねで。で、持つて行こうと思つてたパンも忘れてきちゃつたから、ちょっとその分の調達。てことで、ゆづくら来て!」

ちゅうぢコンビニが見えて、私は駆け出した。

ダッシュして買つてくれば、秋津がコンビニに差しかかる頃に間に合つかー。

定番のたまごサンドをゲットして外に出ると、秋津はもう立つてい

た。あ、やういえば、今日またマフラーしてるんだね。

赤に縁のラインが入ったマフラーを巻いて、彼が手招きする。

「行くぞー」

「うん!」

私が並ぶと同時に、また歩き出した。

「なあ

「何?

「ナツ、毎朝俺の横顔盗み見てない?」

げつ、バレてた!

私としてはうまくやつてた方なんですが…。

「無言でことは正解でいいんだよな?」「

いやいやいやそんなことないですから」

「まあ、いいけど…」

え、いいの?

ちょっとビックリして秋津を見つめた。

前を向いていた秋津がは私の視線に気づくと、フイと顔を反らした。

「いいけど、恥ずかしいからあんま見んなよ」

あ、ホントだ。顔赤い。

それにも「恥ずかしい」なんて、授業中でもクラス会でもいつも堂々としてる彼には珍しい。

あ、言い忘れてたけど秋津はクラス委員をやつてる。文化祭とかで

クラスをまとめるアレです。

「だーかーらー見んなつてー！」

反らしていた顔を戻した瞬間に私と田代が合いつ。秋津は何度もやめろ、とか見るなーって言つてから、早足で歩き出した。

ちょっとかわいいかも。

家出中の猫を追いかけるみたいに、私は恥ずかしがる秋津を追いかけた。

走つて追い付いて、袖を軽く引っ張る。

にこひと笑つても、また顔を見る。

「へつ……」

少しだけ悔しそうな顔をした秋津は、足を止めたかと思ひと次の瞬間、意地悪い笑みを浮かべた。

…ヤバイ。

朝の住宅街。

ちらほらと制服姿の学生、スーツのおじさんやきれいなお姉さんが行き交う中で、秋津は立ち止まる。続いて立ち止まつた私を見る目が真剣そのもので、ちょっと…いや、かなり怯む…。

「そんなん俺の顔が見たい？」

「いや、そんなことないです…」

「別に見てくれていいから」

「さつきのは嘘…えつと嘘じゃないんだけど…。その出来心つて言

うんですか？あの…つまり、「ごめんなさい」

「ナツが謝んなくていいよ。見たいだけ見ればいい。ほら、どうぞ
？」

明らかに黒い光を光らせた瞳で、秋津が顔を近づけてくる。

ううつ…イケメン。

いや、そんなこと思つてる場合じゃない！
こうなれば…

「お、お先に！」

耐えきれなくなつて、私は逃げ出した。

心臓がドクドクと派手な音を立てる。

朝から秋津の顔ドアップなんて、体に悪すぎる…。衝撃的すぎます
…。

しばらく早足で歩いてから後ろをそつと見ると、秋津は例の微笑み
を浮かべながら歩いてた。

第28話（後書き）

意地悪な秋津はいいかんじです。
本当はもつと意地悪くさせたいですが……！

第29話（前書き）

短い上、少し中途半端ですみません…。

第29話

重大なお知らせがあるって言われたとき、大抵はいいことじやない気がする。

今回もそうだった。

しかも、その報告…聞きたくなかった。

「橋本雪枝に告白されました」

「…」

「橋本…」

「聞こえた!」「聞こえたわよー」

私と春花は同時に叫んで、秋津を睨み付けた。

告白！？何で！？

橋本さんにとって秋津は嫌がらせをする対象者じゃなかつたの？

「秋津は嫌がらせの対象じゃなかつたの？」

あ、春花も同じことを思つてゐる。

秋津は困惑した顔で私たちの顔を交互に見た。

「俺だつて分かんねえよ」

「…それ、いつ？」

「告白？昨日の放課後。用事があつて職員室に行つた帰りに会つて、

そのままそこで」

「え、職員室の前で？」

「そう、職員室の前で」

春花がチッと舌打ちする。

職員室つて言つたら放課後もいろんな人が行き来する場所なのに…。
すごいなあ。

「…感心してゐる場合ぢやないつて。

何なの橋本さん！いや、この際橋本と呼び捨てで呼ばせてもらひつか
ど、ありえなくない！？

ついこの前まで私が好きつて言つてたのに変わり身速すぎるでしょ！
私を好きじやなくなつたことは嬉しいけど、よりによつて秋津！？

秋津、お願ひだからなびかないで！
りんごほっぺに惑わされないで…！

「で、どうしたの？」

私が1人脳内で焦つてゐるうちに、春花がどんどん質問を重ねる。
ちなみに今はもちろん放課後です。場所はお馴染みの屋上。かなり
寒いけど、そこは我慢。

「断つた…当たり前だろ」

その答えにホツとする。

屋上の柵にもたれかかつてこちらを見ていた秋津は、少しイライラ
した様子で体を回転させて、住宅街を見下ろした。

第29話（後書き）

あまりに半端な終わり方になってしまったので、もう少ししたらまた1話更新します！

橋本雪枝の問題にいい加減決着をつけたいです……。彼女のやることが奇怪すぎて、もはやミステリーなんかじ。

全く橋本雪枝は何を考えてるんだね。いやむしり、何も考えてないのかも…。想いのまま突っ走りそうだし。

「私に一ついい提案があるんだけど」

なんとなく重苦しい空気になりかけていたとき、春花が腕を組んで言った。

小柄な春花が腕を組んで立つと、何か組体操のペリillisで一番上に乗る子みたいになつて、微笑ましい。

私のニヤついた顔に気づいて、「何笑つてんのよ」と春花がひょりと怒つた。

秋津もひやりに体を向けて、再び柵にもたれかかる。

「提案つてどんな?」

「まあまあナツ、今から言つから。そつ焦らない

焦つてないよ!延ばしてるのはあんたでしょ。と、喉まで出かかつたけど…言わなかつた。あとで毒吐かれるの嫌だし。

「いい?以前、橋本はナツが好きだった。で、今はどうも秋津が好きらしいと。ここまではいいよね?」

「ああ」「うん」

「彼女がここまで執着するのは何でか考えてみたの

ほほう、なるほど。

さすが頭がいい人は考えることが違う…。

私も秋津もうんうんと頷いた。

「それはね、2人に決定打がないからよ！」

「…」「…決定打？」

「そう。例えば、秋津は元カノが忘れられなさすぎて恋愛できない体質だ、とか」

「オイ、例酔いな」

「例えだから。あくまで例えよ。つまりは、そういう『じゃあ無理か…』って思わせるような何かがないからいけないの」

第30話（後書き）

2つ目です。

第31話（前書き）

本編について、少しお知らせがあります。
詳しくは活動報告の『本編の長さについて』を、ご覧ください！

第31話

『じゃあ無理か…』って思わせるよ!』と。
それって意外と簡単にできるかも。
もちろん、相手の同意が必要だけだ。

私は春花に向ひ合つて、その細い肩をガシッと掴んだ。

「春花!私と付き合つてるってこいつ」
「却下」
「はや!」
「私そういう趣味ないから。でも、ナツにしては、いい線いつてる
かな?」

ナツにしては、って!

それに私だってそんな趣味ない!そういう風にしちゃえれば橋本も納
得するかと思つて…。

「まあまあ。つまりね」
「つまり…?」
「秋津もナツも、恋人を作っちゃえばいいのよー。」
「…」

あ、ヤバイ。

一瞬で屋上が凍りついた…。

秋津が好きな私はともかく、彼がどんな反応をしてるか見るのが怖
い。黙つたままの秋津もイケメンだけど、いつもより迫力があつて、
雰囲気違つかも。

「えへへ…えへなーっ?」

やけに嬉しそうに春花が訊いてくる。

ひゅうっと冬の風が吹いて春花の髪が軽くなびいた。

そこ、私に振るの…?

どうって訊かれても困る…けど。

私は秋津が好きなんだつてば!

でも仕方ないから、

「それも…ありだ、ね?」

うん、結構無難な答えだと思つ。

でもたぶん顔、引きつってた。

それに「ね」の声が裏返つてたけど、気づかれた?

「秋津は?」

私の微妙な返答に少し呆れ顔をした春花は、柵にもたれている秋津の方を振り返つて答えを求めた。

ちょっと困った顔の秋津。何か言いかけて、また口を開じる。

「うーん…」

「彼女、ほしくないの…?」

「いやーほしこっちゃほしー」

「え、どっちなの?」

「ほしーです」

やつぱり秋津も春花に頭が上がらないんだ。

そう思つたらまた笑つてしまつた。

第31話（後書き）

この時期に屋上って、絶対寒いですよね……。

第32話

『2人に恋人がいるって分かれば、ちょっとは納得するかもよ?』

春花はそう言つたけど、どうなのかなー。

でもいつも嫌がらせにも反応してないし、そろそろ飽きるかな?

秋津と一緒に帰り道、特に会話もせずに1人妄想に耽っていた私は、彼の「なあ」という呼びかけで現実に戻つて来た。

「今川…怖かつたな」

それには同意なので、うんうんと頷いておく。

そのとき「確かに彼女ほしいけど」という咳きも聞こえてしまった。

「ところで、ナツって彼氏いるの?」

のんびり夕焼けの空を見上げて歩いていて理解が数秒遅れる。それから、その質問に思わず立ち止まつた。
あまりにも…その…直球!!

秋津は私が立ち止まつたことに気づいてないまま数歩歩いてから、隣にいない私を探して振り返つた。

「ナツ?」

「い、いないです」

「うん、知ってる」

「は?」

知ってるって！

ナニソレねぎと訊いたってこと？

今、結構勇気振り絞つて言つたんだからね！

秋津はニヤリと笑つて「おいで」と言つた。
その余裕の笑みが悔しい…けど、帰らないわけにはいかないので、
言われるまま彼の隣に並んだ。

「や、いい子だね」

「子つて！私175cm以上あるのに子つて…」

「俺は185cm以上ある

「血漫にならない！」

やつぱ185cmあるんだね。高っ！
て、違う違う！まつたくも…。

時々秋津は「ひやつて私をからかっては、意地悪な笑顔を見せる。

ビハシヨウセイないくらい…素敵な笑顔で！

第32話（後書き）

1日のユニークアクセスが初めて100人を越えました！！

いつも覗いてくださるみなさん、ありがとうございます！！

第33話

日が落ちるのが早くなつて、図書館も1~6時をひよつと過ぎれば明かりがつくよくなつた。

ふと周りを見渡してキヨロキヨロしていると、1つ向こうの机で勉強中らしき女子に睨まれた……。

慌ててペコッとお辞儀をする。

この高校の図書館は長方形の形になつていて、丁度真ん中くらいの壁際にカウンター、通路を挟んでその向かいに雑誌類の棚が2つあり、棚に囲まれるように細長いソファーが置いてある。

通路はカウンターから左右に伸びていて、向かつて左は小説や文学作品、新書の棚。

右に行けば『今月のオススメ』プレートが掛かっている小さなコナーがあり、その奥は地理や歴史、民族に関する本が置いてある。

本棚は通路を挟んでカウンター側にしかないので、逆側には自習用の机がいくつか設置されていた。窓がすぐ側にあるから夏はちょっと眩しいけど、外はちょっとしたテラスになつて雑誌類の棚の横にあるドアから出られて休憩ができる! どう?なかなか快適な図書館でしょ?

で、何で私が1人で図書館にいるかといふと。
別に自習をしたり本を読みに来たわけじゃない。
図書館の使い方間違つてるけどね……。

今日は秋津が勉強を教えてくれるつていふから、図書館で待つてる。
来週から試験だし、正直英語がヤバイ!

教えてくれるひつじさんなり、教えてもらひおひじやないか…といふことで。

リーディングとライティングの教科書を携えて図書館で席を確保した。

日直の仕事でなかなか来ない秋津を待つ間に、少しは単語の復習でもしようかと思つたけど、始めた途端に襲つてくる眠気に負けかけてやめた。

よくこれで日々の予習が続いてるなあ…。

やつぱみ予習は忘れたら先生怖いし。

試験はなんだかんだ平均点いつちやうから、毎回なんとかなるつて思つてやらないんだよね…。

頬杖を付きながらそんなことを考へつつじし始めたとき。
トンと荷物を置く音がして、続いてよく通る低い声が「起きてるー」と囁いた。

第33話（後書き）

ちょっと説明部分が多くなつてすみません…。

そろそろ2人をくつつけたい…！
ので、がんばります！

第3・4話

秋津に声をかけられたことで覚醒した私は、顔を上げて「起きてます！」と勢いよく返事をした。

まあ実は嘘ですけどね。

今一瞬オチてた。

ちょっと「私飛んでる?」とか考えてた…。

そして秋津の笑顔を見るに、寝てたつてこと、おそらく気づかれてる…。

見上げると、秋津は荷物を隣の席に置き直してイスに座るといひだつた。続けてかばんの中をじしゃーそと探る。

筆箱出して…教科書出して…あ、そうだ勉強の時は眼鏡かけるもんね。

今度は両手で頬杖をついて、秋津の黒縁眼鏡をじっと見た。彼ならシルバーフレームもありだな、と考えたところで。

バサツ

目の前に出されたのは…紙束？

いや、よく見ると細かい字で何かがびっしり書いてある。

とっても、嫌な予感がします。

気のせいかな?どの紙にも英文が書いてあるように見えるよ?

バサツ

冷や汗が出てきた私の前で、秋津はさりげなく4～5枚の紙を取り出した。

それはどこかうらうら見ても英文法の問題で。
心の中で泣きそうになる。

「よし、こんなもんで」

「コンナモン…？」

ぱっと見10枚以上あるんですけどー。

「ナツ」

「…は、はい」

「前回の試験は見せてもらひた

「…はい」

「正直に言つけど、結構酷いな

だから言つたじやん。

3日前、準備をしたいから前回の試験を持って来いと言われたので、
家で眠りかけていた答案用紙を引つ張り出して秋津に渡していた。
その時にちゃんと『結構酷いからね？』と言つておいたのに。

「平均越えてたし、応用ちょっとやれば大丈夫かな、なんて考え
ていた俺が間違っていた」

「……」

「というわけで、対策プリントを作ったから、これをやるついでー。」

「……」

「返事は？」

「…はい」

よろしい、と微笑んで秋津が私の頭を撫でた。
行動は厳しいけど、態度は優しい？

この量とか絶対無理だし、ダメもとで質問してみようかな！

「先生、まさかとは思うんですけど、これ全部やるんですか？」
「もちろん。終わらせるまで帰さないけど？」
「あ、あははー！で、ですよねー！」

もつ無理かも…。今日は閉館まで図書館から帰れそうにない。

第3・4話（後書き）

試験直前！秋津の地獄演習、始まります！

もう……帰りたい……。

「並べかえは全部。で、こっちのプリントは問2と問5だけやりなおし。ちゃんと時制の確認して」

「…………わかりました」

丁寧に答えつつも、私は目の前に座る男を軽く睨み付ける。

これぞ、本当のスバルタ教育。

プリント18枚中、10枚は氣合いで終わらせた。

そこから集中力がぶつんと切れて、なかなか進まない。このままだと無理だ。消ゴムのカスで机がいっぱいになる！

「秋津ー、絶対今日これ全部終わらないよ！」

「大丈夫。終わらせる」

終わらないって言つてるじゃん！

終わらせるとかそういう問題じゃない！

不可能なの！！

なんてことが言えるわけもなく。

私はただただシャーペンを握る手に力を入れた。

ちなみにこれは、秋津が私の試験結果を見て作ってくれた、オリジナル対策プリント。

ちゃんと分析してるだけあって、並べかえや英作文の問題まできつちりそろっていた。

やつぱり頭のいい人は違うなあ！

ありがたや…。そう思つと、感謝の気持ちが湧くんだけどな。

少しして、さつき間違えたプリントを再提出する。

秋津は私の向かいで、自分も教科書とノートを広げながら復習していた。

そのノートといつたら…なんてきれいなの…

…売つてほしい。いや、ホントに。

私がノートを見ている間に、彼は赤ペンでちやつちやつと丸をつけた。お、今度はいけそつかも！

「よし、満点！やればできる！」

「わーい！」

しばらくして秋津が顔を上げ、満面の笑みで私の頭をガシガシと不器用に撫でる。

あ、またそれ。今日はどうしたの？

プリントが全部できるたびに、秋津は頭を撫でる。なんだか遊ばれてる気がしないでもない。ていうか…単純に恥ずかしい…。

図書館には人がいるのに。

第35話（後書き）

プリントを20枚近く作るなんて、秋津かなり暇だったんですねかね。
それともナツのため？

今日はスキンシップが激しい？

いや、いいんだけどね！

そういうば、秋津つて頭撫でるの好きなのかも。

頭を撫でられている途中に秋津と田が合って、ニヒリと笑つてみる。

「…！」

逆に秋津はちょっと怯んで田を逸らすと、そつと撫でるのをやめた。
名残惜しい大きな手。

いやいやそれより！

人の笑顔見て怯むつてどうこうこと！

確かに美人ではないけれども…そんなに明らかに怯まられたらちょっとへこむ…。

「ごめん」

「何が？」

勝手に想像して勝手にへこんでたから、少し不機嫌な声になつた。
それに対して秋津はといふと、苦笑してから右肘を立てて頬杖をつく。

「撫でたこと。なんかナツ、猫みたいで。撫でやすそうだったから、つい

猫みたい…ですか。

ビットコアクションにしていいか困る。

一瞬悩んで、

「頭撫でられるの好きだから、大丈夫」と答えた。

「ホント?」

「う、うん」

なんなんだ、このキラキラした瞳…。秋津がすごく嬉しそうに笑っている。それはそれは幸せそうに。

その笑顔に流されて、私まで微笑んでしまつ。そして彼は、

「じゃあ、遠慮なく

「わ、ちゅ…」

その一言とともに、さらに私に手を伸ばした。

軽い抵抗もせりうと流されてしまう。
でも、嬉しいぞうだから…。

違う。

私が嬉しいから…。
強く振りほどけない。

カウンターにいる同書の先生にちょっと笑われた気がするけど、見
なかつたことにしようかな。

第36話（後書き）

秋津くん、ナツを猫扱い（笑）

先日図書館で「撫でられるのは好きだから大丈夫」って言つたせいかな？

休み時間に突然手を引かれたり。

(落ちた消ゴム取つてって言われた)

消ゴムを渡そしたら、その手」と握りこまれて3秒くらいギュッときれたり。

放課後は「じゃあな、また明日」と囁いて頭をポンッと叩かれたり。

いきなりそういうの、よくないと思つー。

教室の掃除をしながらそのまま春花に訴えたら、一ヤニヤした顔で「いいじゃない」とかわされてしまった。

心臓に悪いからつて対抗してみたけど、

「じゃあやめてって言つ? ナツが本当に嫌なら言つていいと思つわよ。それか会わないとか。まあ、本当に、嫌なら、だけね?」

なんて返された。

本当に、が強調された答えに、ぐうの音も出なくて黙りこむ。

嫌なわけない。

でもこのままだと、絶対期待しちやう。

それはよくないと思ってても、今だつて小さく期待してゐ自分がいる。あんな夢を見たせい?

もしかしたらつてあんまり考えたくないのに。

だつてあつと、現実を知つたときに耐えられなくなる。

「そんなに泣きそつな顔しないで、気軽に考えたらっ。私だってナツに触るし、『トコピン』だつてするし、変わらないわよ。」

春花はさつまつてから、一発お見舞いとばかりに背伸びをして『トコピン』をした。

「たつ！」

「当たり前。痛くしたんだから。ホラ、掃除するわよー早くやんなきや帰りが遅くなるんだからー帰りが遅くなつたら、録りためた昼ドラマ観れなくなるでしょ」

「毎ドラマのためー？」

そつよ、と言いつけると、彼女はそのよべ手入れされた髪をなびかせて、他の班員にも注意をしに行く。

女王様みたい。

なんて言つたら怒られるかな？逆に「ナツもしつかり『トコピン』と聞くのよ」って言われるかもしれない。

あ、でも秋津だけは「わかるー」とて共感してくれそつな気がする。明日、話してみようかな？

……期待しちゃうけど。

やつぱり、秋津に会いたいかも。

第37話（後書き）

あいかわらず平行線のままでみません…。
くつつけ…ます！

大丈夫、秋津くんは肉食ですから！

闇話 いたずらなおまかせー? (前書き)

春花視点です。

閑話 いたずらねおまかせ！？

ほんつともどかしい。
つい、ちょっかいを出しあしまいたくなるへり。

「春花ーきこてー！」

ほら今だつて、困った顔でナツが私の方に駆けてくる。 原因はわかつてゐるけど、あえて訊いてあげよう。

「どうしたの？」

「なんか！ 昨日ー勉強教えてもらつたときー…えーと…そう昨日を、
スキンシップ激しくて」

意味不明。

ううん、大体の内容はわかるんだけど。
どうせ、図書館で勉強してるときに秋津がナツに何かしたとか、そ
んなかんじじゃない？

「ナツ。 落ち着いて説明して？」

そう、わかってるけど。

あえてここはナツに説明させる。

「…昨日、勉強してるときに、やたら頭撫でられた」

「あらら。 それで？」

「…私が…猫みたいだつて」

猫ー正直175cmもある猫いないでしょー！」

と愚ったけど、まあ秋津にとつてナツは猫のよつなのものなのでしう、といつことで結論付けておいつかな。

「猫ね。いいじゃない。ナツはされるがままにやられてたんだよね?」
「…え

絶対そうでしょ。

気づいてないかもしないけど、ナツかなり秋津に流されてるから
ね? それに、押しにも弱いし。

まあそれは秋津にとつてはいい点かも。

「されるがままついにわがじや、ないよ

やや間を空けて、ナツが答える。

あ、今嘘ついた。

彼女は嘘をつくときは田がキョロキョロするから、すくべわかりやす
い。

それに対しても私が「ふうん」と頷くだけでいるが、嘘ついた手前罪
悪感があるのか、やや困り顔で彼女は席に戻つて行つた。

閑話　いたずらはおまかせ！？（後書き）

1話で大丈夫かなと思つたら、意外と長くなってしまうので、
今日はここまでにします！

閑話 いたずらなおまかせ！？（前書き）

引き続き、春花視点です。

閑話 いたずらはおまかせ！？

ナツを困らせるのはちょっと楽しい。

表情がくるくる変わるし、秋津つて名前を出すだけで反応する姿が、実はかわいい。

ナツが秋津を好きなのは、クラスの人を始めとして結構いろんな人にバレてる。

ナツのことが好きな女子はショックを受けたり、逆にいきなり乙女に変身した彼女を見て楽しんだりしてみた！

（同じクラスの斎藤さんは「いやだーもう…ギャップ萌えーー！」って叫んでた）

橋本雪枝ほど悪質なことをする子はないから、そこはよかつたかな。どちらかといつと応援する雰囲気で不自然に班を組み分けたりすることもあるし。

「秋津つて、話しやすいし勉強もできるから、一度同じクラスになつたらずつと友達！みたいな空氣あるかもな？」でもアイツ、意外と自分から絡みに行くことないから、桐野にかまう姿見てちょっとビックリした

と、これは隣のクラスの田中君。

ナツが想いを寄せる人だから、まあ一応近辺調査しておこうと思つて聞き込みに行つたときに、こつ証言してくれた。

「そりいえば…桐野つて実は、よく見れば、かわいくないこともないよな」

「実は…？」

ちょっとそれ失礼じゃない？女子に使う言葉じゃないと思ひけど…。

そう思つてギロッと睨むと、田中（もつ君はつけない）は決まり悪そうな顔でへらへらと笑つた。

「つんうそーか、かわいいよなつて！あ、でも別に狙つとかじやないから！俺…今川さんの方が好みだし…。あ、ちょっと無視しないで！」

追いすがる声を振り切つて歩き続ける。
私は興味ないし。好きな人…いるし。

それよりナツと秋津のことよね…。
いい加減もどかしいわ。

ちょっと、いたずらしてみようかな？

闇話　いたずらおまかせ！？（後書き）

やつぱり悪くなってしまってしねうです……。
次の話でいたずらの全貌が明らかに！？

閑話 いたずらなおまかせ！？（前書き）

今回も春花視点です。

闇話 いたずらおまかせーーー？

「ナツ、秋津にありがとつって言いたいときは、彼の服の裾掴んで
10秒田を閉じればいいのよ？」

「はあ？」

放課後、冬服の買い物に付き合つてもらつた帰り道、囁いた私にナツが目を見開いた。

「それさ春花、某少女漫画のパクリだよね？パクリな上に10秒つ
てー！盛つてゐからー！」

ちえつ、じつこうといふのは単純じゃないんだかい。
珍しくいたずらじょいと思つたのに、なかなかやつせないなんて、
悔れないわね。

ま、そこがナツのことじりでもあるんだけど。

誰かの恋を応援するとか、手助けするとか、本当はあまり性に合わ
ないんだけどな。

ナツだけはもどかしくて手を出しちゃつ。

「ねえ、ナツが田しないの？前ひに来たときも話したけど
「…」

あひー。

面白こくらこくらべて固まるなあ。

「しないの？」
「…春花は？」

「えつ？」

「春花はしないの？！告白！」

「…なんで私の話になるのよ」

「春花なら、するのかなって」

するわよ、と短く答えて、私は歩調を早めた。
ナツはもともと背が高いし、これくらいペースアップしても、全然
問題ない。

「するの？！じつやつて？」

「じつやつてって、口で言つんだよ！」

どーんとナツの気持ちをぶつければいいの！

「へえ、春花は正攻法タイプなんだ。意外！」
「意外って失礼な。だって言わなきゃ伝わらないでしょ？」
「そりゃそうだけどさ、緊張するんだよ？普通に話すときも自然に
できてる自信ないのに、正攻法なんて無理」

あ、それは確かに。

「だから、もうちょっと準備期間が必要かな」

「準備期間、ね」

なるほどね。じゃあ、ちょっと手を貸してあげましょっ。

――――

「秋津！」

「ん？って、何これ？」

――――

「お礼。毎朝お世話になつてゐるかい」

「これ……ケーキ？」

「そう、パウンドケーキ。苦手？」

「いや、大丈夫。ありがと」

「いえ、こちらこそいつも……」

「あれは俺が好きでやつてることだからいいの。お、これいいにおいしいする。おばさんが作ったの？」

「ううん。……私が作ったの。フコが簡単だつて言うから、教えてもらひつて。ごめん！だから形がちょっとといびつだから、家で食べて？」

「そんなの問題にならな」

「家で食べて！」

「……はい」

ナツがチョコペンで少しひく書いた『LOVE』の字に、秋津が気づくといいけど。

閑話　いたずらおまかせ！？（後書き）

すっかり長くなってしまった…。
閑話なのにすみません！

明日からは本編再開です。

春花と秋津に何やら起こる予感？

第38話（前書き）

本編に戻ります。

「ナツ、今週の日曜日、暇だよな
」
…

暇だよなって、決定事項？

せめて「？」付けなよ、と思いながら秋津を見上げる。

「え、もしかして暇じゃなかつた？」

「いや、暇ですけど。秋津こそ、橋本雪枝と予定とかないの？」

イラッときて、思わず皮肉を混ぜてしまった。

彼女の嫌がらせも最近はほとんどない。

どうやら終息に向かつてゐみたい。

春花がいろいろ動いてくれてたらしいから、またお礼言わなきゃと思いつつ、まだ言つてない。

橋本雪枝の弱味を握つて脅したりとか、あの毒舌でけちょんけちょんにしてないといいけど…。

「橋本と…？」
「そう、彼女と…」
「ふうん」

で、出た！「ふうん」！
これはよくない。「ふうん」が出たらブラック秋津が来てる証拠なんだよ！

「て、訊いてみたりして？」

なんて言つて、今からでも誤魔化せないかな…？

「冗談？」

「そ、そう冗談だよ！」

「へえ。それって嫉妬？」

「違う！…」

何で急に嫉妬の話になるの！？

「じゃ、空いてるつてことで」

「え、もう結論？」

「異議があるなら、一応聞くけど」

一応つて時点で聞く気ないじゃん！

「ナツは『うん』つて言つておけばいいよ

「いやいや、『うん』も使うよー。」

「俺との時は使わなくていい」

えー俺様！？

優しい秋津はどこに行つたの？

そして、今日に入ったけど春花＝ヤーヤーしちゃー。

第38話（後書き）

ナツの日曜日は秋津のものですね！

すっかり冬らしくなつたある日曜日、私と春花は秋津に連れられて
とあるお家に来た。

灰色で統一された外壁とか、玄関扉の前にちょこっと置いてある鉢
植えとか。いかにも現代風つてかんじの外装！

「ただいま！あ、入つて」

秋津は扉を開けて大声で叫ぶと、中に入るよう私たちを促す。
恐る恐る踏み入れた玄関は白い壁紙が明るくて、ここにも花が飾つ
てあって、おしゃれ！

「お、おじゃましまーす」

「おじやまします」

そう言つて、私たちは顔を見合させた。

春花なんか小さくため息までついている。

「ね、なんでうちら秋津の家にいるのかな？」

あ、もちろんここは口パクね？

靴を脱ぎながら（私服だからブーツ）、春花も口パクで答えてくれ
る。

「私が訊きたいわよ。だいたい、秋津の家に来るならナツだけでいいじゃない」

「え、なんで私だけなの！？」

「そんなこと自分で考えなさい」

「ひどーでも、ここまで来たし帰れないよね…」

「秋津のお兄さんが呼んだんでしょう？ どんなお兄さんかちょっと興味あるけど」

「…やっぱ春花だけ行きなよ…」

「イヤよー。」

そして玄関先でパクパクしているうちに、いつの間にか靴を脱ぎ终え、階段を上がって2階、一番手前の部屋に通されてしまった。

「ここ、俺の部屋。適当にしてて。今、お茶と兄貴呼んでくるから」「ハイ

春花が間抜けな声で答えて、その間私はさっそく部屋を見回す。へえ、意外ときれいかも。

黒で統一されるあたりが秋津っぽい。なるほどね、音楽はJ - P O Pが好き、と。あ、もしかしてアルバムとかあるかな？

コシン

「あたつー。」

「見すぐる」

春花に指摘されて、大人しくその場に座った。

毛足の長いカーペットが気持ちいい。

第39話（後書き）

登場と書いておいて、まだ出てきませんでした…。すみません！

第40話（前書き）

話の投稿順が少しおかしくなっていたみたいですね……！
正しく直しました！
すみませんでした。

第40話

とにかくもわもわのカーペットに座りながら、私は春花を仰ぎ見た。

「どうしたの？」

「ね、秋津のお兄さんってことは名字は秋津よね？」

「は？ 当たり前じゃん」

久しぶりに思った。

この子大丈夫かな…。

ううん、私より頭いいはずだし。

いや、それにも！ 秋津のお兄さんが「今川」とか「桐野」って
いう名字なわけないでしょ！

「だよね」

「大丈夫…？」

「なーんか聞いたことがある。ていうか嫌な予感がする。なんで私まで呼ばれたかわかったような…」

「え！」

なんで？ 教えて！

って言おうとしたまわりのとき。

「おまたせ」

ガチャリと扉が空いて、空色のお盆にオレンジジュースを乗せた秋津が入ってきた。

それを見て春花も私の向かいに座る。

コンビニで待ち合わせたときから思つてたけど、今日の秋津、すご

いイケメン…。なんでだろ?」

私服だから?

いや、でも前に水族館行つたときと似た雰囲気。
もちろんかつこいいけど。

メガネ?

いやいや、授業中はいつも着用しています。
これも普段と変わらず。

あれ? 髪の毛…かも?

今日はワックスしてるのかな、少しうねつたかんじが違う空気を出
していく…お、大人っぽいといつか! 色気があります! 男なのに!..

「ナツ、飲むだろ?」

「飲む!」

いつの間にか隣に座つていた秋津の声で我に帰つた。
ああ、またガン見してしまつた!
気づいてないといいけど…。

「は」

「あ、ありがと…っ!？」

差し出してきた手からジュースを受け取ひとつとして腕を伸ばした瞬
間。

その腕を引かれてバランスを崩し、秋津の方に体が傾いた。
耳元で甘く低い声が囁く。

「また、俺のこと見てたろ? もしかして、今日ワックスつけてるの

気づいた？なあ…赤くなってるけど、惚れた？

ちょ！何を言い出すかコイツは…！

春花もいるのに…！

「そんなこと、ないつ！」

負けじと体勢を立て直し、ひつたくるようにしてジュースを受け取った。

そんな様子を見て意地悪い笑顔で笑う秋津。

そして、ややニヤニヤしながらジュースを飲んでいる春花。

からかわれた！

そろつて笑う2人にそっぽを向いてジュースを飲み始めた私の後ろで、

「ふーん、その子がなっちゃん？」

秋津とよく似た、でも彼より少し低い声が響いた。

第40話（後書き）

お兄さん登場！

第41話（前書き）

話の投稿順が少しおかしくなっていたみたいですね…！
変だと思ってたいらつしゃつた方、すみませんでした！
正しく直しましたので、第39話あたりから読んでいただけないと、
繋がると思います。

なつぢやん…って私のことか！

気づいて後ろを向こうとした、その一瞬前。

春花が、

「蓮さん！？」

と声を上げた。

あれ…わざも言つてたけど、知り合い？

「今川、兄貴のこと知ってるの？」

秋津も不思議そうに春花の方を向いた。

慌てて私も振り向いて、そして…すゞぐびっくりした。

だって、お兄さん秋津にそつくり…！

雰囲気はもちろん、銀縁の細いフレームの奥にある静かな瞳とか、鼻筋の辺りが本当によく似てる。髪は秋津より少し長めで、前髪が眼鏡にかかっているけど、それはそれでやっぱり色氣がある。しかも、なんていうかな大人の色氣？

お兄さんと田が合つたことも気づかないまま、私は凝視してしまつていた。

「ひんなにちは？修の彼女さん」

そう言われるまで、きっと間の抜けた顔してたと思う。

「あ、こんなにちは

「否定しないね。修、もつげ出したの？」

「してない！」

否定？ 皆田？ なんの話！？

田をぱちくりせとお兄さんの顔を見ると、柔らかく微笑まれた。

なんてきれいな笑顔！！

この人…絶対モテる！…（女子に）

静かで優しいオーラがしてるもん。

「あんま見んな」

怒られないのをいいことに、ここにこ笑ひお兄さんのことを見つめ続けていた私の腕を秋津が引っ張った。

その様子を見て、春花があとため息をつく。

「やっぱり、そつだつたのね。なんか聞いたことあると思つてたの！」

もちろんこの発言はお兄さんに向けられたもので、彼は春花の黒いオーラにも流されず、ふつと小さく笑い飛ばした。

「久しぶり、今川さん」

「久しぶりじゃないわよ！」

「春花…知り合い？」

「知り合い…うーん、知り合っていえば知り合いかな？」

「冷たいね」

春花はお兄さんをキッと睨むと、ふいと顔を戻らした。

「蓮さんのせいで、小学生のときの夏キャンプで大変な思いしたの
よ」

顔を反らしたままでため息をつく。

お兄さんの方を見ると、なんだか困った顔で笑っていた。

第41話（後書き）

順番を間違えてしまつてすみません…！

第42話（前書き）

お詫びの誤載については、活動報告の方にも載せてあります。
よろしくお願いします。

春花の話を要約すると、つまりは「ひこうじ」。

小学4年生のとき、地域の小学校3校のPTAが合同主催するキャンプに参加した春花は、たまたま蓮さんと同じ班になった。

秋津は風邪を引いて参加できなかつたけど、PTA役員だった蓮さんのお父さん（つまり秋津のお父さん）は、秋津の代わりに当時中学3年生だった蓮さんを率いて参加することになった。

子どもたちの班は1班6人。3つの小学校からそれぞれ2人ずつという構成で、2日目の山登りまでは順調に過ごした。

けど。

山登りでなんと春花は迷子になつちゃつたんだって！しかも迷子になる前最後にあつたのは、同じ班だった蓮さんで。

「みんなこっちにいるみたいだよ」と言われて登つた先には誰もいなくて。

2時間後、一人で泣いている春花を見つけたのはたまたま山登りに来ていたある家族だった。

なんとかキャンプセンターまで連れていつてもうつて再会できたらしい。

「あれ以来、山登りはトラウマなのよ

「いやー、久しぶりに会つたけど、春花ちゃんきれいになつたね？

惚れちゃいそうだな」

「話反らしたわね！そして昔みたいに名前で呼ばないで！惚れると

か言語道断。私、5つも年が上のおじさんになんか興味ないから」

「ひどいなおじさんだなんて。まだ23になつたばかりなんだ
ぞ」

そう言いながらも、蓮さんはその銀縁のフレームを上げて嬉しそうに笑つた。

「でも、あれは本当だつたんだよ？役員してた親御さんが確かにあつちだつて言つてたし、前の班は登つて行つたから」「じゃあなんで蓮さんは来なかつたわけ？」

食い下がる春花に、彼は肩をすくめた。

「だつて、父さんに『用事があるから、ちょっとだけ班から外れて来てくれないか』って呼ばれたから。ちなみに用事つていうのは、その後みんなに配る予定だつたおかし運びだつたけどね」

そう言つて薄く笑つ。

それを聞いた秋津（弟）はため息をついて兄を見上げた。

「そんな話聞いてないけど」

「だつて修に話してないから。春花ちゃんが実は今、修の友だちだつてこと聞かなかつたら、忘れてたかも」

うわっ、ひど！

このお兄さん、ひどいとひどいと罵りへー！

「まあいいわ、済んだことだし。ただ、私は山に登らない。それだけよ」

そして春花も割り切つてる！？

大人な対応をする2人を前に、私だけがわたわたして、思わずオレンジジュースの入ったグラスを持つ手に力が入った。

第42話（後書き）

秋津（兄）は書いていて楽しいです！

「それより、僕はなつちゃんのことが気になるんだけど」

そう言って蓮さんは振り向いた。

好奇心つていうか、詮索心つていうか、妙な光を宿した目に射ぬかれて、身がすくむ。

さつきまでグラス強く握っていた手に余計力が入った。

「あ、怯えないで？別にただ聞きたいだけだから

「そういう人を探る目で見るから、怯えるんだろ」

「そうよ、私のナツに何かしたら許さないんだからね！ナツは山登りができる今までいてほしいのよ

なんかすごいなあ…。

蓮さんと知り合つて山に登れなくなる、なのかな？

「ちょっとやめてよ2人とも。そういうこと言つたら怯えちゃうでしょ」

蓮さんはそのシャープな顎に左手を当てて小さくため息をつく。その様子がまた様になつていて！

私は出来始めていた警戒心を解いて、熱く見つめてしまった。だって、カツコいいものはカツコいいんだもん！

「怖い人じやないから、ね？」

「…は、はい！」

そんな美しい笑顔で言われたら普通頷くでしょ！

「この笑顔がどれほどの人を落としてきたかと思つと、オソロシイ…。

「なつちゃんって意外と単純だね」

「ん?今失礼なこと言われたよ?」

でも蓮さんの方を見ると、ここにここ笑つてゐる。

「モニがかわいいんだけど」

はい!?「今、何ですか?」

かわいいなんて、言われたことない。

だって女子として見られたことすらほとんどないんだから!」

その時は、びっくりしている私の横で秋津が不機嫌な顔してたなんて、知らなかつた。

第43話（後書き）

秋津修にライバル出現！？

それから約3時間、私はみつちり蓮さんに尋問されることにになった。

「好きな食べ物は何?」「

「ねえ、修とはいつ出会ったの?」

「春花ちゃんと仲良し?」

「本は何が好き?」

「ふーん、意外と乙女な小説も読むんだねえ」

正直ツカレタ…。

蓮さんって女子みたい。ほら、いるよね?

好きな男の子のこと何でも知りたがる女子。

あれって、訊かれる方も想われる本人も、面倒じゃないのかな?
ちなみに私は「知ってる?」なんて訊かれたことはないけど、春花
がたまに「教えてー!」なんて絡まれてた。

春花はすごく不機嫌な顔になつて「本人に訊けば?」って返してた
ような気がする。

とにかく。

春花と私が秋津家にお邪魔してわかつたことはただ一つ。

『蓮さんはしつこい』

執着とかじやなくて、なんかこう…ネチネチしたかんじのしつこさ?

「ナツ、気に入られちゃつたみたいね」

帰り道、春花はこうボヤいた。

まだ5時なのに、もう道は暗い。

「え…そつかな」

まあ、嬉しいかと訊かれればそうでもないかも。
最初に会ったときのイケメンっぷりだけを見ていたかつたなー！あ
のお兄さん本当に、生きた宝だよね。

「まあでも、蓮さんはナツが秋津の彼女だつて思つてるから大丈夫
かなあ？」

「え、カノジョ！？」

「あんたまた話聞いてなかつたわね…。ちよつと…そんな目じたつ
て、教えてあげないわよ」

ちよつ、すがるよに見てみたけど効果ナシか…。
にしても彼女つて。

どう考へても私と春花なら春花の方がかわいいし、小柄だし、お似
合いなのになあ。

ん？ちよつと待てよ…。

それつて蓮さんは秋津と私をセットにしておきたいつてこと?
つまり、秋津と春花がセットになっちゃ嫌だー！こととかなー！

といふことはー！

蓮さんは春花が好きつてことなのー！？

そしてアレか。さつきの尋問は、私を通して春花を狙いにいくため
の架け橋！？

そうなのー？どうなんですか蓮さん！

「何一人で悶えてんの」

「あ、いやまあ…。てか悶えてない！」

はいはい、といなしながらも冷たい視線を送る春花の髪が、冬の風にあおられて揺れた。

寒い。もうそろそろ今年も終わるなあ。

「今日、ナツのお家寄つて行つてもいい？」

「もちろんいいけど、どうしたの？相談？」

「ううん、そういうわけじゃなくて。ちょっと…冬君に用事」

「用事？珍しいね」

「用事…っていうか…まあ、勉強？」

「あ、なんだ」

ちゅうどいいや。

フユもうすぐテストだし、春花に教えてもらえればかなり心強いよね。

のんきなことを考えながら、私は春花と一緒にいつもの道を帰った。

第44話（後書き）

秋津がほとんびしやべらない…。
彼の出番は学校のみ、なのかな？

第45話

月曜日の朝、秋津は開口一番私に謝罪し、頭を下げる。

「昨日はうちの兄貴が大変！」迷惑をかけまして、申し訳なかつたです！」

「ええー！別に大丈夫だから！頭！頭をお上げください！」

思わず私まで頭を下げる。

確かにちょっと鬱陶しいやいや、ちょっとしつこなとは思つたけど、女子に追いかかれられる方が断然怖いから。

にしても。いい加減頭上げてよ！

まだ半分ほどしか来ていないとはいえ、クラスの人見てるから！

彼の肩の辺りをぐつと押して、頭を上げさせる。ふいに秋津と目が合つて、心臓が跳ねた。

「うちの兄貴、ナツのこと気に入つたみたい」

「それ、春花も言つてた」

そんなに真剣な目しないでよ？

あの程度なら大丈夫なんだから。

私はにこっと笑つて秋津を見上げた。

それを見た彼は目を瞑つて深いため息をつく。男のくせにまつげ長い…。

「あーあ、話さなきやよかつた」

「それよー！あの鬼畜兄貴に何話したの？」

「いや、この頃学校ビデオって訊かれたから…」「

「新しい友人ができた。毎朝彼女を迎えて行くんだ、って素直に答えたの？」

「まさか！できるだけ適当に流そうとしたけど…まあ、やられたな

ここで春花が乱入してきた。

あいかわらず絶妙なタイミングで入ってくる…

どうせさつきのやり取りまで全部見てたくせに。

そして…鬼畜兄貴って…。

秋津も否定しないのね…。

彼の苦々しい顔を見ると、勘づかれた蓮さんに根掘り葉掘り吐かされたみたい。

ちょっとかわいそうかも…。

「嫌がらせに巻き込まれたって言えよかったのこ

ポツリと呴いた私の言葉に秋津は顔をしかめた。

「それは嫌。俺にも責任あると思つから」

いいのことに思つ自分と、そつ言つてくれて嬉しい自分が混ざつて、何だか複雑な気持ちになつた。

第45話（後書き）

少し短くてすみません…！

冬貴視点でお送りします。

只今午前6時。

今日も家族分のお弁当と朝食を作ると、冬貴はふうと息をつく。伸びてきた前髪を左手でかきあげてから、リビングまで移動して、クリーム色のカーテンを開けた。

火使つてたから?

窓には結露ができるで、冬貴は水が流れてしまう前にと慌ててタオルを取りに走った。

今朝も寒いなあと思いながら、そしていつになつたらねえちゃんたちの関係が進展するのだろう、と思いながら。

たぶん、いや確実に原因はねえちゃんにある。

押しに弱いくせに、強情。

すぐ流されるくせに、妙な所で意地を張る。

もつと素直になればいいのに、とも思つけど、まあ見ている分には飽きなくて面白い。

僕とねえちゃんは性格があまり似ていらないから。

だから叩けば返つてくるような反応が羨ましくもある。

窓を一通り拭いて満足したとき、ポケットに入っていた携帯がブルブルと震えた。

いつもマナーモードにしているけど、メールなら3秒で止まるように設定してある。

それに…こんな朝早くにメールを送りつけてくる人物といえばただ1人。

携帯を取り出してディスプレイを見ると。

ほら、案の定『今川春花』の4文字がピカピカと光っていた。

件名はなし。本文には短く「来週の日曜でよければ」と書いてある。

…。

…うん、もつと早く返信くれよ。

5日前に送った内容に、今返信が来た。

しかも「テスト前だから勉強付き合つて」だつたのに！

…来週の日曜にはテスト終わってますから。

もういいや、自分で勉強しよ。

春花さん頭いいのにな。

あまりその事を言いたがらないけど、実はよく勉強してる。
始めて英語を教えてもらつたとき、あまりにも分かりやすいもんだ
から今回も、と思つたけど。

そう甘くはないか。

ちなみに名前の呼び方は、今のところ春花さんだとどめている。「
春花さまと呼びなさい」と言われたけど、絶対呼んでやらない。
むしろそのうちに呼び捨てにしてやる。

そのときまで待つてくれるとこいけど。
まだ中学生だからって、見ぐびるなよ。

いつか、かつそひってやるんだから。

閑話 フユとハル（後書き）

冬貴くん、年上好きです。

まじかよー?と思つた箇せん...すみません!

第46話

秋津はあいかわらず、毎朝迎えに来る。

けど、この頃ちょっと変わった、と思つ。

それはおそらく蓮さんと会つた日からで。

玄関先でフユと話しているときほそんなことないのに、これ歩き出すと表情が少し曇る。

やっぱり飽きられたのかなあ…。

地味にへこむ。

…くじむつて」とはちよつとは期待してたんだ、私。

でも、期待しちゃうよね。

秋津みたいなイケメンが毎朝迎えに来てくれたり、勉強教えてくれたりして。

この間春花には、クラスで噂になつてゐて話を聞いた。そのとき私はかなり動搖したけど、秋津は何も知りませんみたいな顔してる。絶対どこかで耳にしてるはずなのに。

いい加減この微妙すぎる立ち位置に我慢できなくなってきた。秋津がどう思つてるかもわからないのに、ずっとこのままでいるのは耐えられない。

いつそ想いをぶちまけて玉砕しようかなあ。

それかもう友だちのままでいるか。

どっちにしろ辛いのは変わりないから、このままでいるんだがつなかど…。

「なーにへんでんのーナシりしくないー。」

「ぐわー」

黒板消しを持つて突つ立つたままの私に、春花が容赦なく脇腹に強烈なタックルをかけてきて、変な声が出る。

「うわー、今変な声出た」

「わかつてるよ自分でー！」

「うせ「キャッー」とか言えませんよー！」

「別にキャッ！なんて反応期待してないから、早く黒板きれいにしちゃってよ」

よ、読まれてる…！

「ほら、手を動かして田直わん。せっかく明日から連休で今日はナツ家にお泊まりなのに、時間が減っちゃうからー。」

そうなのです。

明日から試験休みを兼ねて3日間休み！

秋津のお陰で試験もそこそこのまくいったしー

あれだけ問題解けば、苦手でもできるようになるんだと実感した直前講習だったなあ。

「早く」

ちょっとと思い出に浸つてただけなのにー。
まるで小姑みたい。とは言えないのに、黙々と手を動かした。

第46話（後書き）

3連休ほしいですね。
。

「おじやましまーす！あれ？誰もいないの？」

あまりにも家の中がシーンとしていて不審に思ったのか、扉を開けて玄関に入るとすぐ、春花がキヨロキヨロと首を伸ばした。

「お父さんは仕事。お母さんは、たぶん買い物してから帰ってくると思う。久しぶりに春花ちゃんが泊まりに来るんだから、晩ごはんも張り切って作るわよ！」って言つてたから。で、フコは「ンビ二行つてゐるつて今メールが来た」

受信ボックスを開いて再確認する。

春花がふーん、と言つて荷物を置き靴を脱ぎだしたので、その間に「春花ちゃんつてアイス好き？」といつ質問に返事をする。

うん、好き！

イチゴ味が一番好き。

「つと、送信

「先に上がつちやつたよ」

「うん、上がって上がって。先に部屋に荷物置いてきなよ・・・リビングでお茶入れてるから、置いたら降りてきてね。あ、あと暖房のスイッチお願い！」

至れりつくせりね、と言い残して春花はトントンと階段を上がり、続いて部屋の扉が聞く音がした。

それを確認してからリビングに向かう。

今夜は何話そうかな。

とりあえず蓮さんのことは訊かなきゃ だしょ。

それから、最近フコが好きな人できたっぽいから、それについてど。あとは…。

「ただいま」

玄関から声が聞こえて、私も「おかえり!」と答えた。あ、やつぱリスーパーの袋がガサガサいつてる。買い込んで来たのかな。

「はあ、重かつた! もう何回ナツに電話しそうかと思つたか。あれ? 春花ちゃんは? もう来てるんでしょ?」

「あ、おばさんお久しふりです!」

いいタイミングで春花が降りてきた。
昔はよく来てたけど今はあまり来られなくなつた春花に、お母さんは思い切り抱きついた。

「おつきくなつたわね!」

「つーん、あまり変わつてないかも?... それよりおばさん苦しい...」

「あ、ごめんね、嬉しくてつい」

そう言つて腕を緩めた。

「さあ、お茶にしてましょ? 春花ちゃん座つて。ナツは冷蔵庫に食材たち入れて」

「ことこのことお茶を入れ始めたお母さんを見て、春花と私は田を合わせて笑つた。

第47話（後書き）

ナツのママが登場です。
出でよかったです…！

夜も更けてきた桐野家の一室で、春花と私は向かい合つて座つていた。

といつても、春花はベッドの上、私はベッドの下で、夕方にフコが買つてきてくれたアイスを食べながら、かくなる上には2人ともジヤージ、というラフな姿でだけど。

「あ、そうだ。報告あるんだつた」

今まで金曜デマの話してたのに、いきなり報告つて急展開す

しかも何の報告かわからんないし。もしかしてドラマ? ドラマ関係ならいいけど。

「橋本雪枝、学校辞めるらしいの？」

突然すぎる報告に言葉を失う。

「なんかね、お父さんがアメリカに赴任になつたらしいの。で、英語の勉強になるいい機会だし、家族みんなで行くんだって。留学みたいなもんだね」

そ
つ
か
。

お父さんの赴任か……よかつた。

もし…私が原因なりといふことを思つた…。

「これで今後心配は減るわね。赴任ってことだし、ナツは変な心配しなくていいからね」

さすが。この友人に嘘はつけない。

「で、彼女から伝言預かってるんだけど、聞きたい？」

「で、伝言？ なんで春花が？」

「そこは企業秘密」

「え、だつて春花はあの子とほとんど接触してなかつたよね？」

「だーかーら、企業秘密だつて言つてるでしょ？ 聞きたいの聞きたくないの？」

一瞬迷つて、それでも私は首を縦に振つた。

「じゃ、言つわよ。『桐野先輩のことは諦めます。いつまで経つても私を見てくれないし、先輩が憧れてそうなあの秋津つて人にも告白してみたけど折れないし。アメリカに行つて、先輩よりイケメンな男の人ゲットするから』だつて

先輩よりイケメンな男の人つて…！」

「私は女なのに…！」
「まあまあ」

本当はもつと怒りたかつたはずなのに、思つたほど怒りが湧いてこない自分にびっくりした。
ほつとしたから？

本気で秋津のこと好きで告白したわけじゃないって薄々感じてたけ

アーティストがアーティストにならなかった。

第48話（後書き）

やつと橋本雪枝事件が終息です。
あとは、蓮さん…。

第49話

「あとは、蓮さんのことね」

橋本雪枝について一通り話した後、春花が話題を移す。私も訊きた
いことだつたから、ちょつといい。

「蓮さんつていい人なの？」

「それは個々の感じ方によるけど。少なくとも悪い人じゃないと思
うよ。キャンプで迷子になつたとき、私がいなつて気づいてP.T
A側に伝えてくれたのは蓮さんだし」

ふうん。

何考へてるかわからないような人だと思つてたけど、そんなことな
いんだ。株上がつたかも。

…にしても。

「蓮さんつて超絶イケメンだよね！？」

「ええ？ナツソーゆー人が好きなの？確かに秋津と似てるけど
似てるどころじゃないよ！そつくり！」

「そうかなあ。私には別人のように見えますが」

天井を仰ぎ見て反論される。

それは春花のキャンプが蓮さんのイメージに影響してゐるんだよ、つ
て言つたけど、やつぱり納得できないみたいだつた。

「秋津兄弟なら私は弟派」

「…私も弟派だけど。でも、蓮さんがイケメンだつていうのはそれ

と違くない？

「違くない」

手強い。

「ナツは弟の方ちゃんと見とかなきやダメよ？」

「うん」

心配しなくても大丈夫だつて！

春花の好きな人を好きになつたりしないよ！

任せときなつて！ここは私が弟を通じて蓮さん情報を春花に伝えるから！

私は胸を張つて頷いた。

第49話（後書き）

ナツの勘違いは続きます。

第50話（前書き）

本編が50話までになりました！
いつも読んでくださる皆様、ありがとうございます！
あいかわらずのスロー展開ですが、今後もよろしくお願い致します。

第50話

連休を利用して我が家に泊した春花は、桐野家の父母弟全員とすつかり馴染み、2日間の昼はフコとチャーハンを作ってくれた。手先が器用だから、ちゃんとどうはんもバラバラでおいしいチャーハンに仕上がっていた。

私は夜いろいろ話すとして、お母さんとは恋バナしてると、お父さんは最近の女子高生について議論を交わしていた。

最近の子は男女交際に関して軽い考え方だ！と主張した父に、春花は彼氏の1人や2人できて普通ですって！と返したらしい。晚ごはんのときお父さんシコンとしてるなあ、と思つたりそのせいだったんだ。

「ねえちちゃん、春花ちちゃんと何話してたの？」

「あらひ、気になる？」

「その反応、おばちゃんなんだよ？」

「つるさいなあーーーじーじーちゃんおばちゃんだつて」

「秋津の兄ちゃんに言つとー」

「ヤメテクダサイー！」

春花帰宅後、部屋の片付けをしてるとフコが扉から顔を出した。自分だつてちやつかり勉強教えてもらつたぐせに、セコー。

「どうしたの？ 何か用事だつた？」

そう訊くとフコは首を横に振る。

「別に。ちやんと掃除してくるかなって思つて、ひょいと覗きに来た

だけ

「ふうん」

怪しい。テスト前なので、わざわざ姉の部屋に来るなんて怪しい。

「丁度いいや、フコモトつて」

「ええ？」

「ミミ箱取つて」

そう言つて手を伸ばせば、口を尖らせながらも渡してくれる。

「ね、フコ。訊きたことがあるんだけどー。」

「な、何。イヤな予感するんですけど」

「す、好きな人いるのー?」

「……」

「沈黙は肯定でいいんだよね?」

「いいえ」

「いいえつてー怪しそうだね。」

さあ弟よ、吐け。

私はミミ箱を持ったまま、ドアの近くに立つフコにじっと寄つた。

第50話（後書き）

今日はもうひとつお話更新します。
初の秋津（弟）田線の閑話です。

深夜1時に更新する予定になっています。

闇話 むね弟のひとりごと（前編め）

秋津修田線です。

闇話 ある弟のひとりごと

この頃思つこと。

俺つてこんなに臆病だっけ？

そんなことないはず。仕事で忙しい両親より、よくモテる兄を見て育つたせいか、粗った人にはどんどんアタックしていくようになつた。

誰かに捕られる前にっていう焦りがそうさせらのかも知れないけど。でも。

桐野夏花にはそういう風にできない。

もし、嫌われたら……もし、拒否されたら……。

そう思つと身がすくんで、何もできなくなる。

だけど誰にも捕られたくなくて。

クラスメイトだけじゃなく、ナツに言ひ寄る女子の後輩にさえ嫉妬してしまつ。

一度勢いあまつて抱きしめてしまつたけど、それに關してナツは何も触れてこないし。

くそつ。

どうすればいいんだ？

このまま、また手を伸ばしていいのかどうかもわからない。でも、なるべく俺の近くに置いておきたい。

毎朝迎えに行くのだつて、橋本雪枝のせいに見せかけた俺のわがま

まだ。

クラスで噂が立つことだって、実は大歓迎。

噂についてはナツも気づいてるはずだけじ、あえて俺からは何も言わない。向こうからも何も言つてこないことは、嫌じゃないつて意味に取るけどいいのか?と思つ自分がいる。

本人はきっと気づいてないんだろうな。

俺が下心ありありで側に行きたがることも、本当は自分が会いたいから迎えに行つたりしてることも、

きっと知らないんだろうな。

俺の感情も、ロッカーで体操服貸したときこすでに恋に落ちていたことも。

だから、そろそろ、作戦を変えようと思つ。

このままじや、怖くて何もできなこままになってしまいそつだから。

幸いにもナツは流れやすい性格だし。

ゆっくり追い詰めよう。

きっとナツは…

俺しか選べなくなる。

闇話 オカルトのヒーローと（後編）

闇話もでおせわ仰こいただも、あひがほいじれこまかーー！
ひとつも感謝していくますーー！

第5-1話

「ちよ、ちよっと待った！」

じりじりと聞合いで詰める私に対し、両手を伸ばして制止しようとするフコ。

まあそんなことじゃ止まらないよね。

「待つてって言っているじゃん……その女子にしては高い身長で迫られるにマジで結構迫力あるから！」
「女子にしては、とかさらっと失礼なこと言わないでー気にしているんだからー。」

フコまであと2歩。

さあもう逃げられないぞと微笑んだといひで、フコが両手を上に上げた。

「わ、わかったー！降参ー！」
「よし、降参」

て」とは…。

「白状致しますー！」
「よし、姉の勝利！」
「…ほほ脅しだよね」

何か言つた？と訊くとフコはため息とともに首を振つた。

「で？で？誰が好きなの？」

「やっぱ言わなきゃダメ？」

「当たり前でしょ！弟の好きな人とか、めっちゃ気になるー。だつていつか「Jの子が彼女です」なんて言ひて、ウチに連れてくるのもだよ？そりなつたら絶対フコの彼女と仲良くなつて、フコのあんなことやこんなことを教えて…」

「僕は今すぐにでも、ねえちゃんのあんなことやこんなことを秋津の兄ちやんに教えたいけど？」

「……やめて！」

ひとつ咳払いをして自分を落ち着かせると、私はとにかく、と言葉を続けた。

「言ひか言わないかはそのときの流れに任せるとして、知りたいのはその前ー誰に恋してるの？同級生？先輩？後輩？もしかして先生？」

ぐい、と身を乗り出した私を見て、フコは「恋バナに関しての積極性は母さんにそっくりだね」と呟いた。

「…ちやんだよ」

「え？聞こえなかつた」

「春花ちやん…だよ！」

ん？春花？それは今川春花のこと？

え、まさかまさか！フコの好きな人って…

春花なのー？

第51話（後書き）

いつもありがとうございます！

秋津×ナツより、冬貴×春花が進みそうで危険です…。

さつきまでフユを捕獲しようと上げていた手を下ろし口をぽかーんと開ける姉を見て、

「だから言いたくなかったのに」

と言つてフユが息を吐いた。

さつき春花だつて聞いたときは一瞬「からかわれた?」と思つたけど、その表情は真剣で嘘の欠片なんかなさそうで。正直、動搖してる。

「フユ…」

「何?」

「今まで知らなかつたけど…実は年上好きだつたんだね…」

「え、つっこむところ、そこ…?」

開き直つた顔をしていたが、途端に呆れた顔になる。

「ねえちゃんに打ち明けた僕がバカだつた…」

「何でよ…?」

「まあでも、信じてくれてよかつた。打ち明けたら笑われるだらうなと思つてたから」

「笑わないよ」

笑わないけど…本当に春花が好きなの?

だって、春花は…蓮さんが好きなんじや…。

「ねえ、それって片想い?」

「うん、まだね」
「い、いつから?」

その問いにフユは明るい声で「わかんない」と答えた。

「春花ちゃんはねえちゃんの中学からの友だちでしょ? 前から家によく来てたし、一緒にお花見行ったり花火したり、栗拾いしたり雪合戦してる内に、いつのまにかそうなってた」

「そつか…」

「やっぱり意外?」

少し沈んだ声に気がついて、フユは私の顔を覗き込んだ。あ、気づかなかつたけど背が伸びてる。

まだ抜かされてはいけないけど、もう170近くあるんじゃないかな? 無造作に切られた、でも決してボサボサではない少し長めの黒髪。鼻筋だつて通つてるし、フユだつてきっと、それなりに美形な方は入ると思つ。

春花と並んで歩いたらお似合いかも、なんて考えてみる。

「意外じゃないよ。むしろ…」
「むしろ、お似合いに見える?」

フユが私の言葉を続けた。

「うん」
「…ありがと」

心から頷いた私に、フユは本当に嬉しそうに笑つた。

第52話（後書き）

フコも肉食です……一応。

まさかのカミングアウトのあと、フコには「もうすぐ冬休みなんでしょう？協力してね。あ、春花ちゃんの予定はもう揃んでるかい」と念押された。

あのときは曖昧に答えておいたけど、蓮ちゃんの「どがあるとビックも素直に見れない」。

フコ、もし「まぐできす」に失恋したら「ごめん」と一応謝つておいた（心の中で）。

春花は気づいてるのかな？

泊まりに来たときは、フコの恋バナしても普通の反応だつたけど…。うーん、でもポーカーフェイスだから悔れない…。

「ま、早く並んで。名札はちゃんと付けて！終業式始まるから！」

教室のすぐ外で2列に並んでいると、斎藤桜の甲高い声が聞こえた。あ、そつか。今田日直なんだ。お疲れ様ー。

式があるとき、クラス全員を並ばせて講堂まで誘導するのは日直の仕事。これが本当に面倒。だって、絶対みんな並ひつこと聞いてくれないし。

ん？

前に立つて声を張り上げる桜を見ていたら、ちょうど春花が見えた。そして彼女と話しているのは…秋津だ！

ああ、そうか。

今川と秋津だもんね。近い！！

いいなあ…。私も今野とかなら近かつたの。

「ねえ、さつき見てたでしょ、秋津のこと」

「秋津だけじゃなくて、春花のことも見てたよ？」

「あ、嫉妬した？」

「しない！」

と、思いたい。

「あ、そうだ。明日暇ならイルミネーション見に行かない？」

「イルミネーション？」

突然切り替わった話題に首を傾げた私に対し、春花は乱れかけていた前髪をちやつちやつと直しながら笑った。

「そう。今年も例の並木通りでやるから

「へえ！」

並木通りはうちの学校から歩いて20分くらいの、車がほとんど通らない大通りのことだ。

隣にある公園のせいか、昼や夕方は子どもがいっぱいいるけど、夜は誰も通らない。

正直さびれた通りだけど、毎年年末になると盛大にイルミネーションをするので、穴場だつてことどころへんじや有名になっている。

「楽しそうー行く！」

「やつらと思つた

言われたことに思い当たると、私は一いつ返事で頷いた。でも、

「よかつたら、冬^{ヒマ}でも声かけてきて」

と云ふを頼まれて、少し胸が痛んだ。

第53話（後書き）

いつもありがとうございます！
そろそろラストスパートです！

穴場のはずなのに、人が多い。

毎年どこから出でてくるの?と思ひほゞたくさんの人が並木通りに集まつてくる。

集合は5時だつたけど、冬の早い夕暮れのおかげで辺りは暗い。

色とりどりのイルミネーションに立ち止まるのはよーくわかるけど、どうか進んでぐだせ!ー!

「すゞい混雑ぶり!ー!」

背伸びをして春花が言つた台詞に私も激しく頷く。
まだ並木通りの北側(ここ)が入口になる)を少し進んだだけなのに、うっかりするとはぐれそうになる。

「みんなの目的は南側のツリーでしょ?まだまだ混雑は続くね」

そう言つたのは蓮さん。

あいかわらずのイケメンっふりで、側を通りの女性の視線はほぼ蓮さんを集まっていると言つても過言ではないくらい。上は紺のダッフルコートを羽織つて下はジーンズという格好だから、決して目立ちはしない服装なのに…すゞい。

「春花ちゃん、そつち行つたらはぐれる

青のダウンコートを着たフコがさりげなく手を握つて、他の集団に飲み込まれかけた春花を連れ戻した。

「ありがと」

「ううん」

……。

なんだこの甘い雰囲気。

蓮さん見てるよ?さりげなく見られてるよ2人!

「余所見してると、ナツまではぐれる」

「たつ!」

頭を「ツン」と叩かれて右の方を振り返ると、人混みに紛れて少しだけ機嫌の悪そうな秋津がいた。

第54話（後書き）

フコはダウンローントなイメージです。

混雑が続く中を南側のソリーまでゆっくり歩く。歩行者天国になっているので、どちらかといふと歩道側に多いイルミネーションは見やすい。

春花を引き戻したフコは、手を離しこそはしたけどちやつかり隣をキープしている。

ああ、ハラハラする！

きっと蓮さんが見てるのに！

もしかしたら嫉妬とかしてるかも知れない！

いや、でも大人の男性ってかんじだし、そんなことはもう慣れっこなのかな。

と、思っていたのに。

「ナツ、前見て」

「なつちゃん、あつちもきれいだよ？」

……何故、私が2人に挟まれているのだらう。

前見てつて、イルミネーションは横にあるんだけど……。

左に蓮さんがぴったり寄り添つて、右隣にはやつぱり機嫌が悪そうな秋津がいる。

背が高い2人に挟まって、周りからもちらちらと視線を感じた。

「あのつ、蓮さん！」

「何？見えない？」

「いえ、見えます！私女子では背が高い方なので……」

「じゃあ、どうしたの？」

「いや、えーと、春花… フゴと歩いてますねー。」

「そうだね」

「…そうだね？」

その冷静すぎる返しに一瞬言葉を失う。

「な、仲良しだすね！」

「僕らもね」

いやいやいや…。この状況そう見えますか？

「なつちゃんは僕が隣にいるのが嫌？」

「いえ！全くそんなことはないです！」

イケメンなのに変わりはないですからー。

ただ、その…春花のことは？

フコに取られちゃうけどいいの？

その余裕すぎる表情に思わず顔をしかめた。

第55話（後書き）

蓮さん手強いです。

明日はクリスマス当日ですが、イルミネーションのお話はもう少し
だけ続きます。

並木通りの真ん中まで行けば、雪の結晶や星など夜空を型どったイルミネーションが増える。

近くの大学の何とかサークルのおかげで、この辺りのイルミネーションは毎年変わらしく。

去年はアニメのキャラクター風のものがあつて、ちょっとオタク？的な人まで見に来たとか。

「春花ちゃん見て、あっちの方に雪だるまが」

「あ、ほんとだ！」

少し前を歩くフコと春花の会話が聞こえて、思わず赤面する。まるで本物の恋人同士みたい！

なんだかうらやましい。

私はといえば、長身の男性に挟まれ、はぐれないようにされ、子守りされてる気分。

右隣の秋津はまだ少しづつとしていたけど、時々きれいだね、とか混んでるね、と言つと、そのときはフツと優しい顔になつて笑ってくれる。

左隣は数々の女性の視線を総なめにする蓮さん。

こちらは至極機嫌がよさそうで、フコと春花の仲良さそうな姿見ても全く動搖しないことに不信感を抱いた私がちらちら彼を見上げると、につこり微笑んでくれる。日が落ちた中イルミネーションの明かりに照らされる蓮さんの笑顔ったら、もうそれはそれは美しい。いやしかし！それでいいんですか…男として…

なんか、いじらがイライラするー。

「蓮さん、春花取られちゃいますよ?」

「え、春花ちゃん?」

「そうです!」

私がいきなり「蓮」と小声を出したので、蓮さんは聞き返しながら耳を近づけてくれた。

「春花ちゃんが取られるって言った?」

「ああそんな大きい声出したらダメですってー。フコに取られるって言つてるんです! あいつあれでも狙つた獲物は逃がさないタイプなので。春花のことが好きなら、ちゃんとそう示さないとー。」

私の言葉を聞いた蓮さんは、一瞬目を見開いて、それから楽しそうに笑つた。

「なつちやん、僕が春花ちゃんのこと好きだと黙つてね?」

「はー? そつやそつでしょ。」

当たり前すぎる質問に、声を出さず黙つて頷いた。

第56話（後書き）

こつも読んでくださいぬま、あいがといひれこます！

蓮さんの本の氣持はまた明日に。

「やつなんだ！あははは！」

いきなり笑い出した蓮さん。いつちがぎょっとする。笑いつとまた
いつそうイケメン…じゃなくて…

「何で笑うんですか！？わ、私何か変なこと言いましたか！？」
「くく…」めん。なっちゃんがあんまりにもとんちんかんなこと言
うから

とんちんかんなこと！？

「僕が春花ちゃんのことが好きだつて？」「違つんですか…？」

ゆつくり前に進みながら笑い続ける蓮さんを見ていると、まるで私
が悪いことをした気分。
そんなに笑わなくていいじゃん。

「ごめんね、拗ねないで」「拗ねてません！」「兄貴、ナツのことあんまりいじめんなよ」「わかつてゐる。ごめんつて。僕は春花ちゃんのこと、好きなわけじ
やないよ」「やつせりつと言つたのけたあと、蓮さんは前を行く二人をちらりと
盗み見た。

「それに、春花ちゃんにはしっかりボディーガードが付いてるから、近づけないよ」

ボディーガードって… フコのことだよね？
てことは蓮さん、フコの気持ち気付いてる？

そんな疑問を込めて見上げると、前に目を向けていた蓮さんがこちらを向いて、華麗にウインクした。

「だから安心して。浮気なんてしないよ？」

ついでとばかりにそう囁かれる。
安心？ 浮気つて… 何のこと？
春花が浮気するつてこと？
でも… そんな子じゃない、よね？

眉をひそめてうんうん唸る私を見て、蓮さんは「わからなくていいよ」と笑って頭をぽんと叩いた。

第57話（後書き）

毎日ありがとうございます！
蓮さんの気持ちはどうなってるの？

流されるまま歩いて、とうとう南側のシリーまでたどり着いた。…
長かった！！

「きれーい！」

春花が声を上げる。

色とりどりの飾りに、キラキラと輝く小さな電球がよく映える。下の方には赤や靴下がいくつかぶら下がっていて、どうやらお願ひ事を書いた紙を入れられるようになつていてるみたい。

「ナツ、近くに行こ」

いつもより少しあしゃいだ春花は、デートで定番のワンピースに茶色のダッフルコート。赤いチェックがよく似合つてる。

後ろにいた私の手を捕まえた足元では、こげ茶色のムートンブーツが暖かそうだった。

「え、フコと行かないの？」

手を引かれるまま歩き出していくから、春花の方に身を屈めてナツと質問する。

「行かないよ。せっぱ恋に關しては女子同士がいいからね

ナツは彼氏みたいなものだから」と語つて春花はふんわり笑った。

「彼氏じゃない…めず男じゃない…」

何度言つたら分かるのかな。
いや、分かつてゐるけどわざとか！

春花がかわいくて、結局いつも強く怒れないの知つてゐるんだ！確信犯！

「それより、はぐれないでね？ナツはまあ背が高いから見つけやすいけど」

「うん、注意する」

春花がこの人の流れに紛れちゃったら、絶対見つけられない！

……と思つていたのに。

「春花ーはるかー」

小声で呼んでみても、（当然だけど）返事はない。周りをぐるりと見回しても、ダッフルコートの人が多くて特定できない。

いざとなれば秋津か蓮さんがフコのこと見つけられると思ってたのに。

これつて…

完全に迷子ー！？

第58話（後書き）

完全にクリスマス終わっているのにすみません…。

結局、迷子になりました。

周りを見ても人、人、人だらけ。

真つ先に気付くはずの春花が私の名前を呼んでくれてる気配もなく

…。
…見つけやすいつて言つたくせに！

周りを見渡しながら、でも人が多すぎるせいで、着実にツリーの近くまで行く人の流れに乗つてしまつていて。

さつきまでいた場所に行こうとしても、靴下田当てに動く人の流れには逆らえず。

女子の中で背が高いといえども、これだけ人がいれば、たぶん半分くらいは男性だと思う。

当然のことながら、さすがの私でも世の男性方全員より背が高いなんてことはなくて。

もしかしたら、これくらいの背の方が男性に紛れてしまつて見つけにくいのかな。

でも、今日は珍しくスカートはいてるし（灰色のブリーツ…）。
上だつて、白いセーターなんか着ちゃつて、ちょっと女子っぽい服を意識してみた。

フユには笑われたけど、蓮さんは「かわいいね」って誉めてくれたし！

「やつと靴下まで着いたね！」
「ほんとすごい人ー！」

「ねえ、早く入れようよー。」

ふと左を見ると、女の子3人組で仲良く縁の靴下にお願い事の紙を入れていた。
たのしそー。

いや、別に私だって楽しくないわけじゃないんだよ？ただ！

…ヌケダセナイ！

もう一度さつきの3人組を見てから、小さくため息をついたそのとき。

後ろから誰かに手首を捕まれた。

第59話（後書き）

更新が少し遅くなってしまってすみません！

首を伸ばしてキョロキョロと周りを伺つ私の手を、誰かが掴んだ。その力の強さに驚きつつも、もしかして、と思いながら振り返る。

「あき……れ、蓮さん？」

暖かくて大きな手が私の手首を捕まえていた。
秋津と似ていてるけど、どこか違う涼しげな目元。
その目が私を見て嬉しそうに細められる。

「見つけた
「蓮さん…」

見つけてくれるならこの際誰でもいいと思つていたけど…。今日の前にいる人が蓮さんで、ちょっとがっかりして自分が多い。
しかも振り返った瞬間に「秋津」って言いかけてしまった。
…確かに蓮さんの名字も秋津なんだけど。

「心配したよ。春花ちゃんがナツとはぐれたって言つて大急ぎで戻つてきて」「…すみません」「この人の多さだし、年末で浮かれ気分になっちゃった変な人に声かけられたら困るしね」

そう言つて優しく微笑んだ蓮さんはやつぱりかっこなくて。でも、次の瞬間にそんな気持ちは吹っ飛んだ。

「…ねえ。さつき秋津って言いかけてたけど、修が来ると思った?」

「え！？」

「修の方がよかつたかな」

「いえつーそんなことは全然…あの、言ひ間違ひです、すみません」

ペコリと頭を下げる私の近へで、蓮さんは「今日ばかりすみません
つて言うね」と笑った。

それからすぐに真顔に戻る。

「修はまだ探してゐんぢやないかな」

「あ、じゃあ、早く戻らなきゃ」

「ねえ、ここのまま2人で抜け出しちゃう？」

一瞬のフリーズ。

そのとち、いやいや！何を言つてゐるんですか！
と言えねばよかつたけど。

言葉の調子は軽いのに蓮さんの瞳が真剣すぎた。

下から見上げた黒い目の中で、イルミネーションの光が反射してキラキラと輝く。

「なつちやんと、なり」

「あの……」

「結構真剣なんだよ、これでも」

「だから、その……」

「好きになつちやつたのかな」

「…………は？」

予想の斜め上を行きすぎた言葉で、丁寧な言葉遣いなんか忘れて
は？「と言つてしまつた。

：スキニーナツタ??

第60話（後書き）

年が明ける前にはクリスマスを終わらせますー。

田の前にイケメンがいて、自分に向かって「好きになっちゃったのかな」なんて言われて、どうすればいいの？

蓮さんの本心がわからない。

冗談で言つてる？ それとも本気？

「冗談つてる？」

しばらくしてから訊かれて、私は無言で頷いた。
だつて当たり前でしょ！ 今まで女子からしか告白されなかつた私が、超絶にイケメンで優しい年上の男性から甘い言葉囁かれたら、それは感づよー。

私の様子を見ていた蓮さんは、肩をすくめて少し困ったような顔をした。

「じめんね、だつてなつちやん反応がいかこちかわいいから。好きなもの見てるときは田がキラキラしてるし。ほら、そりやつてすぐ赤くなっちゃう」とこもっこ

蓮さんは微笑みながら手を伸ばし、そつと私の左頬に触れた。

「それに、なつちやんって修のこと、好きでしょ？」

「……っ！」

それに、つて！

それについて何？

今すごい「ついでに」みたいなかんじで言われたけど…

「気づいてないと思った? なっちゃんわかりやすいから、バレバレ
「え、バレバレ! ?」

「うん」

てことはもしかして本人に…

焦る私に蓮さんは言葉を続けた。

「…修は気付いてないみたいだけね」

そう言ってにっこり笑われても、困る。
ますます言葉をなくす私に追い討ちをかけるように、蓮さんは直球
のストレートを投げ掛けた。

「ねえだから、俺と付き合わない?」

……。

… 今日の蓮さんの接続語の使い方がおかしいと想つのは、私だけで
すか?

第61話（後書き）

終わるよに更新するつもりです！

夜12時以外にも更新したいと思っています。

：秋津より、蓮さんとフコの方が肉食な気がしてきました（笑）

「ねえだから、俺と付き合わない？」

蓮さんはそう言つたきり、話さないまま。

周りは賑やかなのに、ここだけ時が止まつたみたい。

つこさつ今まで春花のことが好きだと思っていたのに。ていうか、こんな超絶イケメンが私のこと好きになる！？

「疑つてるでしょ。顔に出てる」

「…っ！いや！そんなことないです！」

「いや、出てるから」

蓮さんこそー

口は笑つてゐくせに、目が笑つてないからね！

でもそう言えなくて、私は黙つて彼を睨み付けた。

「睨んでる顔もいいね。ますます修に渡すのは惜しくなつてきた。やつぱりこのまま抜け出さない？俺のこと、嫌い？」

「嫌いじゃないです！でも…すみませ」

「好みじゃない？」

「いやえーと、だから…」

お兄さん、質問しながらこつちに寄るのやめてください！人がいっぱいいるから動けないんだって…！

「やつぱり、こめんなさ」

「俺優しくよ？」

「ひじりやつと、蓮さんの一人称が僕から俺に変わったことに気が付いた。もしかして、ひつちが素の蓮さんなの？」

「なつちゃん。大丈夫だよ、大切にする。ただし、修のことは諦めてね。ちゃんと俺だけを見てて。ね？」

1歩後ろに下がれば2歩前進する蓮さんに押し切られやうになつて、どうしていいかわからない。

わざわざから何度も断るうつとしてるのに、その度に途中で遮られて最後まで言えない。いや、言わせてもらえない。

迫つてくる蓮さんを止められず、あと少しでくつこてしまいそうになつたとき。

「ナツ！兄貴！」

知つてる声が耳に飛び込んだ。

低いけどよく通る声。心地よく鳴り響いて私を安心させてくれる声。やつぱりこっちの方がいい。

やつぱり秋津じゃなきゃダメだ。

蓮さんも、いやもしかしたら世間的には蓮さんの方がかっこいいかもしれないけど、もうそんなことはどうでもよかつた。

蓮さんより先に私の名前を呼んでくれたことが嬉しくて、胸がいっぱいになる。

蓮さんの肩越しに少し背伸びをしたら。

焦つて、でも目が合いつとホッとしたような顔になつた秋津がいた。

あれだけの人の間をすいすいとくぐり抜けて、秋津は私たちの方に来た。

さりげなく私と蓮さんの間に入ってくる。

息がちょっと上がってるからか、肩で息をしている。

秋津は私と向き合つて、まるで小さい子にするように少し屈んで田口を会合わせた。

「ナツ…心配した」

「ノゾ、ごめん…」

大きく息を吐くとともにそう言われて、本当に心配させたつてことが分かる。

「それから兄貴」

私の無事を確認して頷くと、秋津は蓮さんの方を振り返った。

「何で連絡しないんだよ！」

「じめんじめん」

秋津のちょっと怒った顔がなんだか嬉しい。

蓮さんは両手を秋津の前に出して、「僕もさつき見つけたどこだから」と弁解していた。

一人称が僕に戻つてゐる。

ていうか、「やつせ」じゃないよ！

結構話したよ？

「ナツ」

心の中で蓮さんにツツツミを入れていた私は、名前を呼ばれて秋津を見上げた。

「ちょっとこっちに来て」

「え、みんなのところに行かないの？」

「ちょっとだけだから」

反抗する間もなく右の手首を掴まれて、半ば引っ張られるようにして歩き出す。

仰ぎ見るように蓮さんを見たけど、彼は「またあとでね」と口の形だけで伝えるだけだった。

その代わり秋津の耳元で何か言つてたみたいだけど、小声すぎて残念ながら聞こえなかつた。

「秋津っ、蓮さんは……？」

人の中を縫うように歩く秋津に声をかける。

置いていいの！？

「アイツはいいんだ。方向感覚あるし、自分で会流するだろ」

アイツって……。

そんな呼び方していいのかなーと思つてみると、前で秋津はぶつぶつと何か呟いていた。

ほんとムカつく。人のことうまくこと扇動しやがつて、絶対アイツ、最初からナツの居場所の検討付いてただろ。

どうやら蓮さんに文句言つてるみたい。
そっぽんやり考えていると、私たちは人混みを抜けて隣の公園の入り口に出でていた。

第63話（後書き）

やつと秋津登場！
あと2話くらいの予定です。

第64話

夜の公園は暗く静まり返つていて、寂しい。
すぐ側の通りにはあんなにイルミネーションがあつて、あんなに人がいるのに、公園の周りの中はまるで違う世界のようだつた。

「秋津、公園まで来ちやつたけど、いの?」

私は思つたことをそのまま訊いた。

幹の太い木々に遮られて見えるかすかなイルミネーションが眩しい。

「ん

「みんな、探してるかもよ?」

「そこは兄貴が適当にやつてるよ」

「ふうん」

公園に入つて1分くらい、砂の上を歩いていた足音が止まる。秋津が足を止めたから、必然的に私も止めることになつた。

「ナツ、話があるんだけど」

「うん、私も」

わつき蓮さんに言われたこともびっくりしたけど、見つけ出して駆けつけてくれた秋津の顔を見たら、やっぱり私の気持ちは変わらないつことに気が付いた。

言わなきゃ。言ひとこ、したんだ。

最初はこのままの関係でもいいと思つた。

ずっと普通の友達でいて、3年生になつて、受験して、卒業して。また同窓会とかあつたら会おうかな、なんて言つてさよなら。

でも、やめた。

それつて、逃げてるよね？

結局自分が怖いから、振られるのが怖いから理由をつけて逃げてるだけだと思つ。

それに…もし振られたとしても、きっと秋津は今まで通り友達でいてくれると思ったから。

たぶん、そんなことで人の見方を変える人じやないから。

秋津が振り向いて、目が合つた。

そして次の瞬間。

——一度図書館でそうされたよ、元ひい。

強く、抱きしめられた。

第64話（後書き）

次は22時くらいに更新です。

秋津が強く抱きしめるから息ができない。
いや、ちがう。

秋津に抱きしめられて、心臓があまりにドキドキするから、苦しくて息ができない。

ぎゅっと抱きしめられているはずなのに、その腕は優しくて、わつと私が苦しくならぬように手加減してくれているんだと思つて、嬉しくなる。

上着を通して伝わる熱が心地よかつた。

「ナツ」「
「なに?」
「ナツ」「
「聞いてる」

2回名前を呼ぶと、秋津はきゅっと腕に力を入れた。

「俺、嫉妬した」「
「嫉妬…？ 嫉妬って、あの嫉妬？」

そう尋ねると、それ以外に何があるんだよと笑つて返される。

「兄貴がナツと一緒にいるのを見たとき、何で俺が先に見つけなかつたのかって。そう思つたらす“い嫉妬した”」「あ…きつ

「しかも、あのバカ兄貴ナツの頬に触れただろ」

「あ、あれはちょっとした事故で」

「そのあと迫ってたし」

「あー、それも事故?」

「人が多くてなかなか通り抜けないし、声は届かないし。どれだけ焦つたか」

焦つて、くれたんだ。

嬉しい。

でも、私だってそうだよ?

たとえ春花だったとしても、絶対嫉妬した。

もしかしたら、ハッ当たりみたいなことしちゃったかもしれない。

ねえ、もつまつ言つてもいい?

隠さなくていいかな、この気持ち。

こいつやつて、めりつとしてくれてるのは、前みたいに泣いてるからじゃないと信じたい。

「秋津! 私、秋津に伝えたいことがあって。聴いて。わた」

し、まで言えなかつた。

勇気がなくなつた訳じゃなくて。

秋津の唇が、私の唇をふさいでいたから。

「―――つー?」

びっくりした。

目を閉じる隙さえなかつた私の前には、秋津の真剣な顔がそこにあつて、冷たい風で冷えた頬が時々触れあつ。そこだけがまた熱く熱を帶びていいくつで。

「ナツ」

名前を呼ばれて、唇が離れたことを知る。ほんの何秒かだつたのに、ものすごく長い時間が経つたよつに感じた。

「それはダメ。俺から言わせて?
「あきつ?」

それから秋津は体を離して微笑んだ。

「ナツが好きだ。ずっと好きだつた」

好き…。好き。

秋津がそう言つてくれた。
これは夢?

「ナツ、夢じやないから。もつと早く言えたらよかつた」

秋津が笑つて、蓮さんがさつき触れた場所に触れる。温かな指先に

そつとなぞられて、頬が赤くなるのがわかつた。

第65話（後書き）

長くなりすぎるのでも、2つに分けます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8906x/>

声だけを聴いて

2011年12月31日22時48分発行